

東京争議団物語

東京地方争議団共闘会議 編

労働旬報社

東京争議団物語

東京地方争議団共闘会議 編

労働旬報社



定価350円

東京争議団物語

東京地方争議団共闘会議 編

玉県

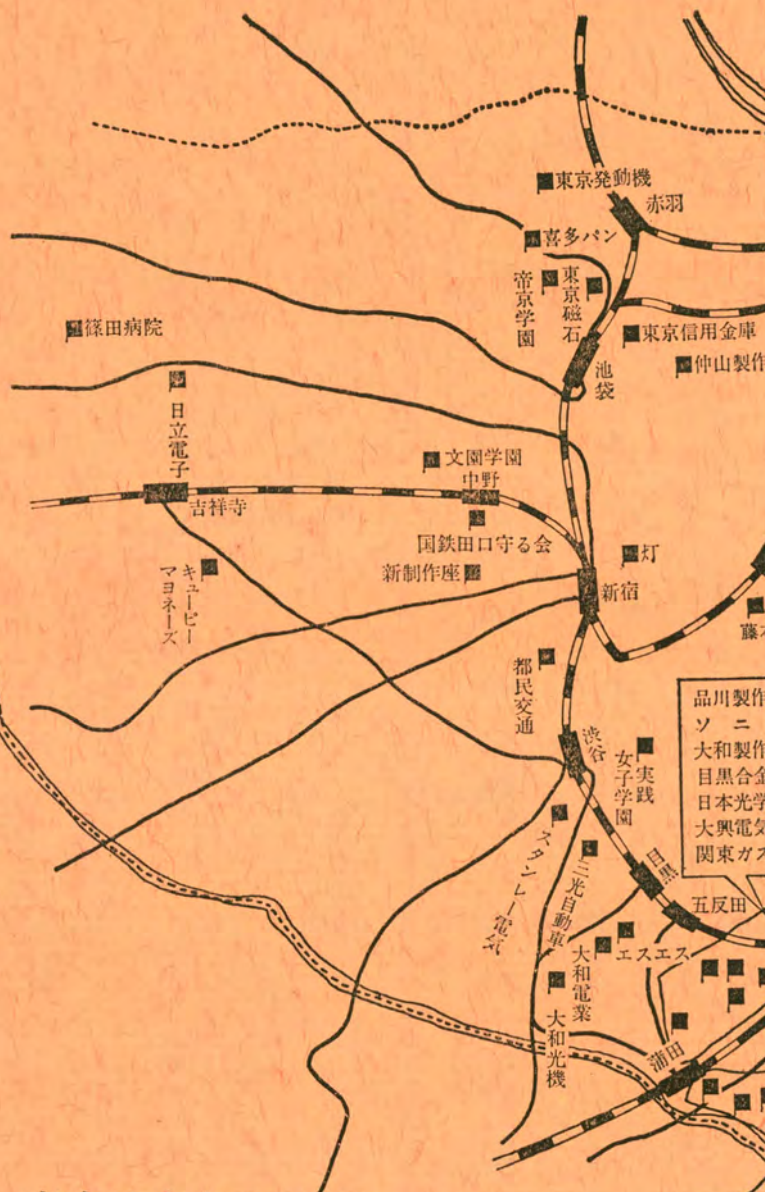


千葉県

東京湾

日本特殊鋼
ナショナル
金銭
東洋事務器
東電機
三井精機

神奈川県



東京地方主要争議団分布図

東京争議団物語

東京地方争議団共闘会議 編



労働旬報社

はじめに

東京で解雇反対闘争をたたかいつづけている労働組合および活動家があつまって「東京地方争議団共同会議」が結成されたのは、一九六二年五月のことである。首都の片隅で歯をくいしばって頑張ってきた三〇余の中小争議団が参加し、孤立無援の状況下におかれていても、労働者の生活と権利をまもって断固としてたたかいぬくことを誓いあった。

そのご一年間、討論集会を積み重ね、自分たちのたたかいの基本的な方向について話しあい、たがいに激励し、組織強化をはかってきた。争議団共同に結集したことで、たたかいの方向と展望をつかみ、勇気づけられて運動は眼にみえるように前進した。エスエス製薬労組の勝利の和解、日本信託銀行労組の都労委での完勝、私教連の立入り禁止仮処分の勝利など、いくつかの貴重な成果が生まれ、討論のなかで明らかにになった解雇反対闘争の基本戦略の正しさが確認された。それは、「安保・三池」のたたかい、日炭高松のたたかいから学んだ「統一の思想」——要求に根ざして巨大な統一をかちとり、共通の敵をあきらかにし、敵を孤立させ、時機を選んで集中攻撃を加える方向であった。

この一年間のたたかひの経験と教訓は、「たたかう労働者のど根性」（一九六三年・労働旬報社刊）にまとめられた。この小冊子は、全国のたたかう仲間たちから、たたかひの展望をひらき、勇気を与えるものとして歓迎された。北海道から、九州から解雇反対闘争をたたかう労働者が、東京地方争議団共闘会議を訪れた。各種の小冊子、報告集、論文などにも引用され、「ど根性」はたたかひの中で流行語となり、「争議団共闘方式でたたかおう」が合言葉となつてひろがった。

それから二年——たたかひは、さらに発展した。苛酷な攻撃を受けて、長期困難なたたかひにたちあがるのは、中小企業の労働者だけではなく、数百、数千名の大型争議団が、つぎつぎに誕生した。そこでは、中小争議団の経験では解決できない多くの新たな困難が生じた。だが、その困難も一つひとつ創造的に克服され、いっそう質の高いたたかひがつくりあげられてきた。

広範な労働者、大衆との結合がつくられ、「連帯スト」まで打たれるようになった。当然、労働組合運動の重要なたたかひとして位置づけられ、全体の労働者の問題になってきている。私たちは、先の「たたかう労働者のど根性」に寄せられた共感と、あらたな報告を待ち望む全国の仲間たちの激励に支えられ、『東京争議団物語』の執筆にとりかかった。この二年間の壮大なたたかひと貴重な教訓を記録に残し、「共同の財産」として全国の仲間たちに伝えなけ

ればならないという使命感から筆をとったのである。

私たちは、この本を書くにあたって、(1)多くの争議を生み、多くの労働者をたたかいにたたかあがらせ、運動を推進させている客観的な条件を明らかにすること、(2)「たたかう労働者のど根性」で報告された「争議団共闘」の路線を守り受けつぎ、さらに発展させていった「統一」の実践的教訓をあきらかにすること、(3)このようなたたかいを支えた争議団内部の「団結」が、柔軟な大衆性をもって豊かに創造されていく過程をあきらかにすること、を重点においた。いくらか、ひとりよがりで一面的なところもある。しかし、この本の出版を契機に討論が發展し、労働組合運動の前進にいささかでも寄与できれば、これにまさる喜びはない。私たちも全国の仲間たちからのきいたんのない意見や批判をうることによって、さらに前進していきたいと思っている。

出版にあたっては、ふたたび労働旬報社に御迷惑をおかけすることになった。筆をもつことに馴れない私たちが、なんとかこの本を書きあげることができたのも、労働旬報社の木曾哲夫、前川清治さんの激励と援助によるところが大きい。心から感謝の意を表したいと思う。

一九六五年八月

東京地方争議団共闘会議

目次

はじめに

I 日本中が争議団

倒産――

こうして東京磁石は倒産した 16

三度の食事を二度にして 18

くそっ、負けてたまるか 21

工場再開の要求をかかげて 23

安上り吸収合併の日特鋼 24

生きるためのギリギリの抵抗線 27

合理化――

変則勤務の中で起った事故 30

国鉄労働者は疲れきっている 32

いのちとくらしを守る闘いへ 34

東京地下鉄では経費節減運動 35

結婚もできない／＼低い賃金 38

女子タイピスト労働者は訴える 39

ダルマさんになるのはイヤだ！ 42

モダン・タイムス現代版 43

虫けらのように殺される労働者 45

弾圧――

狂暴で野獣のような経営者 48

資本の分裂攻撃に〳死の抗議〳 51

〳ここではワシのいうことが憲法だ！〳 54

脅迫、暴力に〳団結〳で反撃 57

暴力団と警官隊がグルになって 58

露骨になった警察の弾圧 61

ビラ配りも認めぬ労働委員会 62

裁判所も〳反労働者の〳に 64

大根でも切るように労働者の首を 67

攻撃の背景――

露骨な攻撃は資本の弱さの現われ 70

II 統一の旗をかかげて

分裂とのたたかい――

「昇格」という名の首切り・日本信託 79

分裂・無協約の攻撃に職場闘争で対決 84

第二組合有志が臨時給要求のビラ 89

統一の波紋を企業の内と外へ 92

第二組合が七二時間スト・日本ロール 94

職場のなかから統一のうねり 98

分裂攻撃に八五日間の部分スト・日本光学

憎らしいのは資本家と分裂主義者 103

たたかいの中で得た六つの教訓 106

連帯――

鳥の鳴かない日はあっても 110

〳甘ったれ〳の姿勢を正しながら 113

一万名のロール支援団結大集会 117

成功した金属労働者の〳必勝連帯スト〳 119

ビルの谷間を〳昼休みデモ〳は行く 124

可能なところから統一の輪を広げて 127

個人加盟の単一労働組合もつくる 131

金融労働者の統一を求める尖兵として 134

静かに着実に前進する支援共闘 138

統一をさらに前進させるために 141

共闘――

暴力団追放署名から地域住民闘争へ

146

平和盆踊りに八〇〇〇人の老若男女

150

〳労働〳は他階層を結ぶ最大の武器

153

地域住民からの〳巨大な贈りもの

157

〳裁判長さん、お花をどうぞ〳

160

大切なたたかう労働者の姿勢

163

守る会――

ひとりぼっちのたたかいから

166

〳アイデアル〳にいうことあり

168

非人間的な夫婦生き別れ配転

172

激しい合理化攻勢の防波堤として

175

やめなければならぬ理由がない

177

地区労オルグにはげまされて

180

守る会に支えられ現職復帰の日まで 183

「守る会運動」の教訓と問題点 187

Ⅲ たたかう労働者の団結

大衆路線――

みんなで決めて、みんなで実行 193

自己批判・相互批判をきめこまかに 196

最初は頼りない争議団であつても 198

激しい討論と行動を通して 199

労働者の熱い連帯に支えられながら 202

強固な争議団をつくりあげるために 204

学習と交流――

東京磁石の創意ある組合学校 206

喜多バンの仲間との交流の中で 208

交流のあとみんなは感想文を書いた

211

先輩争議団の経験に学んで 213

闘争財政――

あきらめず、何回失敗しようとも 216

〃自力更生〃を合言葉に行商活動 219

たたかう労働者は飢え死にしない 221

賃金をうけとり解雇撤回闘争 223

ゴマ化しなく心の底から理解しあつて

226

財政は〃団結〃の重要なカナメ 228

家族共闘――

夫の真剣な生活態度に心うたれて 231

信頼される夫、父親になるために 233

たたかう同志として成長した家族

235

全国からの激励の手紙に励げまされて

238

新しい愛と規律の中で育つ子供たち

241

家族との共闘なくして勝利なし

244

指導と団結――

戦後最大の〃倒産旋風〃のなかで

247

クシの歯の一本一本はか細いけれど

249

指導部の責任は極めて重くきびしい

254

あとがき

國王

器指空 藤京東 京東鼓

全

江都



I

日本中が争議団

倒産

東京磁石株式会社（東京都北区滝野川三の五九）が一八〇〇万円の不渡りを出して「倒産」したのは、一九六四年（昭三九）八月七日であった。

——その日、三沢昭一さん（三八）は、照りつける西陽を背にうけながら、重い足をひきずり、家路を急いでいた。……女房になんといおう。あてにしていた夏の一時金どころか、ひょっとすると給料も出ないかもしれない。会社が潰れる危険のほうが強い。組合は、団結だけが頼りだといった。しかし、問題は明日からのメシだ。……それにしても、常務の無責任さはなれたることか。会社がお手上げになった責任を、俺たち働くもののせいにしようとしている。なぜ、お手上げにならねばならなかったのか、腹をぶちわって話してくれればいいのに。……ともかく、組合がいうように事の真相を明らかにしなければ、今後の身の振り方をきめる気も

起らない。……

彼は、家に帰えると妻にすべてを話した。会社が倒産し、夏の一時金も、給料も出ないかも知れないことを――。妻は黙ってきいていた。そして、ポツリといった。

「ともかく成りゆきをみてみなければ……」

彼も、「組合はきつとなんとかしてくれる。大丈夫だ」と、自分にいいかすように何度もくりかえした。だが、そうはいいいながらも、今後のことを考えると不安だった。

こうして東京磁石は倒産した

東京磁石は、その最盛時――一九六二年（昭三七）には、資本金一億二〇〇万円、従業員八一〇人、磁石業界における市場占有率五〇％を誇るメーカーであった。それが二、三年ほど前から、住友金属工業、日立金属、三菱製鋼などの大独占が、激烈な市場獲得競争に乗りだすなかで、材料、販路、融資の面で三井物産の掌中に落ち、その賃加工会社も同然の地位に転落したのである。

東京磁石が、その地位を次第に失っていったのは、一つにはアメリカのクルーシブル製鋼が、シリコン入り磁石の特許をもっていたことから、六三年秋、まずアメリカ市場から締めだ

されるといふ大痛手を受けたことがあげられる。二つには、翌六四年に入って住友金属工業、日立金属が、クルーシブル製鋼とシリコン使用についての技術提携を行ない、これによって東京磁石は国内市場からも締めだされるという重大事態を迎えたのである。クルーシブル製鋼に支払う特許料は、なんと四半期一万二〇〇〇ドル（三六七万二〇〇円）と売上げの六・五％という莫大な金額である。

こうして大独占の圧迫で弱りきった東京磁石に、三井物産は、六四年六月一七日会社更生法の適用を申請させ、会社乗っ取りの意図をあらわにした。

ところが、適用申請して九日後、東京磁石の会社幹部はこれを突如取りさげたのである。

これは、その後「同業のよしみ」で接近してきた三菱製鋼との間で、資金援助の話しあいがあったためである。東京磁石は、三菱製鋼から数回にわたり、約七〇〇万円の援助をうけた。しかし、三菱製鋼は、その抵当として昭島の約一万坪の土地・工場（二億円）を手に入れた、社長印と株券のすべてを取りあげたのである。

そして八月七日——。わずか「一八〇〇万円の不渡り」にソッポを向き、東京磁石を倒産に追いこんだのだった。こうして三菱独占は、東京磁石をトコトンまで寄りかかせておいて、突然資金援助を打ち切り、計画的に倒産に追いこみ、磁石業界の市場掠奪——市場独占をムキ出しにした。

三度の食事を二度にして

工場の電源は切られ、自主生産も不可能になった。あてにしていた夏の一時金は、ついに出不かった。給料もいつ払ってもらえるのか、見通しはなかった。

……アパートの隣りの部屋の奥さんは、主人のボーナスが「六万円」あったといい、お宅はまだなの？　ときかれた。……同じ秋田から東京に嫁いできている友だちと、ボーナスが出たら一緒に子どもを連れて帰える約束もしていたのに、もう少し、もう一週間と待ってもらったが、先にいってもらうことにした。あの子が、あんなに楽しみにしていたのに……。

妻はグチリはじめた。毎日のように聞かされる妻のグチに、三沢さんはいたたまれない気持ちに襲われる。――俺の力ではどうしようもないんだ。三菱が悪いんだ。すべて三菱が悪いんだと怒鳴りたくなる。だが、彼はじっとこらえてきた。組合の「生産再開、生活防衛」の方針にしたがって、彼は毎日を歯を食いしばって耐えてきたのである。

秋も近づいたある日。それが、ついに爆発したのである。

「馬鹿野郎！　俺の気持がわからないのか。こんな仕打ちをうけ、ピタ一文の金ももらわずに

黙ってやめていけると思うか。自信？ そんなものがあるわけないだろう——」

アパートの窓ガラスを破って、小さい茶ぶ台が茶わんとともに階下に飛んでいった。隣近所からは、おかみさんたちが突然の物音に驚いて飛びだしてくる。子どもも、びっくりして泣きだす。彼は、自分ながら無茶だと思いがちでも、胸につもりもった憤りを、どうしても押えきれなかった。妻や子に、その憤り、怒りをぶっつけてみても、何も解決はしない。

だが、この時は「秋になれば何らかの結論が出るだろう」ということで、三沢さん夫妻の休戦は成立した。しかし、秋になっても、明るい見通しは出てこなかった。

そのころ、妻の実父が上京してきた。お盆に帰えるといって帰えらなかった娘と孫のことを心配して上京してきたのだった。だが、せっかくの父の上京にもかかわらず、見物にも連れて行ってやることができない。三度の食事を二度に減らしている毎日の生活では、みやげもの一つも買う金がない。しかし、娘は父には生活の苦しさをいだしかねた。父に心配させてはならない。だからといって、安心させようにも説明のしようがなかった。苦心して貯めた郵便貯金も、あと残りすくなくなった。

娘は、もう黙ってはいられなくなった。父が帰えるという前夜、ついに娘は苦しい毎日の生活を打ちあけた。結果は、子どもと一緒に秋田に一時帰えるということで相談がまとまった。

妻はそう決心したとき、夫がちゃんと安定した職業についてくれるまでは、「絶対に帰えな

てはこまい」と思った。収入不安定、いや皆無な毎日の生活、物価がどんどん上る東京で暮らすつらさから、逃げだしたいという気持も半分あった。田舎に帰えれば、いくら頑固なあの人でも、今後の生活のことは真剣に考えてくれるだろうと思った。

三沢さんは、それをきいたとき、これからの闘争に打ちこむためには、妻子としばらく別れて生活したほうがかえっていいかも知れない……と自分を納得させた。どうしても引きとめておく確信が彼にはなかったのだ。彼は、妻と子を上野駅から送りだした帰えり道、ひさしぶりに屋台で安酒をあおった。

翌日から、彼は仲間たちの前では何事もなかったかのように振るまってみせたが、よる家に帰えると何んともいえないぬ淋しさに襲われた。彼は、妻子との別居を強いる苛酷な現実に、砂を噛むような思いで耐えねばならなかった。仲間ともさ細なことで口論するようになった。

その間にも、時間は刻々と過ぎていった。だが、たたかいはいつこうに前に進まない。やがて冬を迎えた。突然、精算人から解雇通告が送られてきた。首切りは覚悟していたが、「解雇通告」を手にして彼はギクツとした。同時に、とうとうくるところまできた、もう退けないという実感がズシリと腹の底にすわった。委員長をはじめ仲間たちは、彼に奥さんと子どもを迎えにいくことをすすめ、乏しい財布の底をはたいて金を集めてくれた。仲間たちの暖い気持を、彼は素直にうけとめた。一二月二三日、ひさしぶりに手にした一万円をにぎりしめ、彼は

妻子の待つ秋田へと向った。

くそっ、負けてたまるか！

雪国・秋田は、その夜吹雪いていた。妻の実家まで三里。彼は、吹きつける雪の中を歩いた。雪が顔にあたって解け、頬をつたって体中につめたくしみこんでくる。

「畜生！ 三菱の奴ら——」

彼は、苦しかった三カ月の生活を想い浮べながら、その生活をますますみじめな姿に追いこんでいる奴らに向って叫んだ。彼は、そのときある確信をつかんだように思った。……首を切られたいま、俺たちもいよいよ来るところまできた。くそっ、負けてたまるか。委員長の顔、仲間たちの顔が浮んだ。親子三人、たたかってたたかって生き抜いてみせる。きっと生き抜いてみせる……。

妻の実家につくころには、彼の確信は固まっていた。彼は、すぐ両親もまじえ、話しあいをはじめた。だが、妻の決意は固く、なかなか崩れそうにない。

「どんなにいわれても、あのような不安な毎日、もうごめんです。そんなに一緒に暮らしなければ、ちゃんと職を探したらどうなんですか……」

妻は、そう答えた。だが、彼はもうひるまなかつた。その夜は、とうとう寝ずに話しつづけた。翌朝、隣の部落から仲人と親類の人たちにも来てもらい、「三菱のひどいやり口にたいし、自分たちはあくまで工場再開、全員再雇用の要求でたたかい抜くんだ」ということを懸命に話した。理解してもらえるかどうかはなかったが、みんなに出来るだけ多くのことを聞いてもらいたい、胸の中に渦巻く思いを察してもらいたい一心で話しつづけた。

ようやくにして仲人が口をひらいた。「亭主が苦勞して頑張っているときには、どんなことがあれ、女房も一緒になって苦勞すべきだと思うが……」。この一言で、妻はその固い決意をくずした。

「せっかく、こんな遠いところまで来たんだから、あと二三日も泊っていったら」とすめられたが、彼はそれを断わった。その日のうちに、親子三人汽車に乗った。彼は、自分の張りつめた気持が、時間がたつにつれてゆるぐのが何よりも心配だったのである。

吹雪をついて東京行の列車は走った。やがて東京に近く、列車がいくらかスピードを落したころ、妻は「田舎にいても、東京にいるあんたのこと、会社のその後のことが心配で、すこしものんびりとできなかった」と話し、申しわけなさそうに頭を下げた。そのかたわらで、子どもがスヤスヤとねむっていた。彼は、黙って妻の顔をみつめ、微笑した。

工場再開の要求をかかげて

このように、東京磁石の労働者のほとんどは、苦しく悲しい体験をつんでたたかいを積み重ねてきた。妻を実家に帰えしたものが一三人。九カ月たつてようやく妻子を連れもどしたものの、まだ連れもどしていない仲間もいる。

悲劇は、家族持ちだけではなかった。独身者の中にも、「あくまで生産再開を要求してたたくうんだ」といって親から「勘当」された仲間も幾人かいる。「倒産」という苛酷な現実、人間らしく生きようと願う労働者の生活を、根こそぎ破壊する。

その後、東京磁石の労働者は、健康保険と失業保険の一部打ち切りという攻撃を受けた。病気のため通院していた労働者にとって、健康保険の突如打ち切り通告は、あまりにも大きなショックだった。労働者のなかには、極度のノイローゼになるもの、頭の毛が抜け落ち、記憶喪失症になるという犠牲者もでた。

だが、この間にも三菱独占は、東京磁石の労働者のなかから七〇名の技術者を引きぬき、このあとふれる日本特殊鋼や東京計器の磁石部門とあわせ、市場の半分近くを完全に独占するという体制をととのえていたのである。しかし、三菱製鋼に引きぬかれた労働者も、残ってた

かう労働者と同じように苦しまねばならなかった。引きぬかれた当初は、かなりの賃金が保障されていた。ところが、翌六五年二月に入ると、三菱製鋼の賃金体系に組みこまれ、この結果、六万円とっていた技術課長が二万四〇〇〇円となり、三〇才の労働者（家族三人）で手取り一万八〇〇〇円という驚くべき賃下げが行なわれたのである。このため、七〇名の労働者のうち四〇名はすでに退社し、あらたに職を求め、職安通いをはじめている。

このようにして、引きぬかれて東京磁石から離れていった労働者の前途にも、残ってなお「工場再開、全員再雇用」「労働者と中小企業の犠牲による倒産に反対」して、たたかいつづける労働者と同じように、立場は異なっている、きびしい生活現実が待っていたわけである。

安上り吸収合併の日特鋼

「会社更生法」で再建され、三菱独占の支配下に入った日本特殊鋼（資本金三一億円、従業員二四〇〇名）においても、中小零細企業の労働者が倒産で苛酷な犠牲を強いられているのと同じように、やはり労働者は苦しめられている。

七割生産で工場は動き出したが、時間外労働がなくなり、増産手当が最低となったために、平均賃金は三万円を割った。六四年の六、八月平均では四万一〇〇〇円。つまり、約一万円強

の賃下げとなったのである。しかも、生産は七割に減ったが、人員も一割近く減っており、人不足による労働強化が激しくなった。

加えて、一億三〇〇〇万円にのぼる「社内預金凍結事件」が起った。職場では、「預金がおろせないで、結婚式もできなくなった」「妻が出産だというのに、その費用が出せない。生まれて来る子供を殺せとでもいうのか」「これで息子の進学もダメになった。息子の将来を、会社はいいたいどうしてくれるというのか」「妹の亭主のヘソクリを預けたが、まるでサギにあったようなものだ」……と憤り、すべてを労働者の犠牲によって自分たちの危機を糊塗しようとする資本の悪どいやり方に、労働者は怒りをあらたにした。

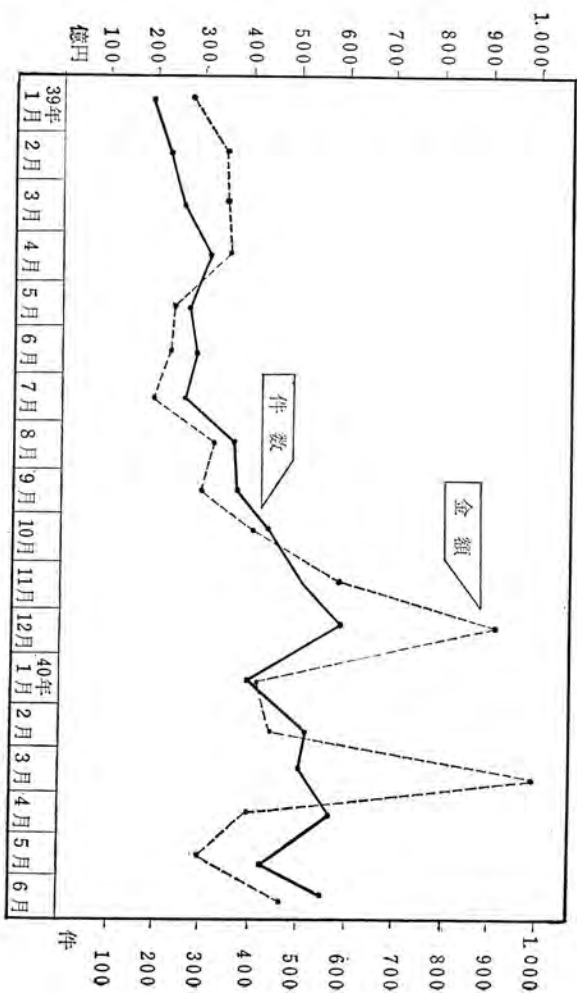
日本特殊鋼の「倒産」は、特殊鋼業界の再編成——合理化のなかで、先の東京磁石と同じく、三菱独占が計画したものであった。六二年に、まず三菱商事が窓口商社となったのを皮切りに、その後、資金ぐり、販売などを一手に引きうけるようになった。つづいて六三年には、三菱商事のあっせんで三菱製鋼と業務提携、翌六四年に入って資本提携を具体的に打ちだすまでになった。そして同年夏、日特鋼が手形を落せなくなったとき、三菱製鋼は「合併」を条件として資金援助を行なったのである。

ところが、こうしてある段階まで相手を寄りかからせておいたところで、いきなり身をかわし、つんのめらせ、六四年一月——突如援助を打ちきり、「会社更生法」の適用申請へと追

倒産件数＝負債金額グラフ

(負債総額1,000万円以上)

東京商工興信所調べ



いこんだのだった。

三菱商事は、「吸収合併」の計画が進みはじめ、*「倒産」*にいたるまでの間に、日特鋼の尻をたたいて増産させてきた。そのため、*「倒産」*時には、三菱商事の倉庫には一万トン以上の商品がストックされ、何んらの損害もこうむらない準備がなされていたのである。そして、「会社更生法」を利用し、二〇〇億円の債権をタナあげさせ、労働者の労働条件、賃金水準を落したうえで、*「安上りの吸収合併」*を果たそうという寸法なのである。

生きるためのギリギリの抵抗線

このように、東京磁石、日特鋼で三菱独占が演じた悪どい役割を、山陽特殊鋼の場合は富士製鉄が、東京発動機の場合は富士電機が、喜多パン製作所の場合は日新製粉が、サンウエーヴの場合は八幡製鉄グループの日新製鋼と岩井産業が、それぞれ演じているわけである。いいかえるなら、いずれも冷酷な独占資本の手による「計画倒産」なのである。

こうして、六四年秋から六五年にかけて中小零細企業、中堅企業の「倒産」があいついで起った。負債総額一〇〇〇万円以上のものだけをみても、毎日一八一九社が「倒産」しているのだ（別表参照）。零細小企業をふくめると、ほぼ二分間に一社の割で倒産している勘定にな

る。おどろくべき数字というほかはない。

東京磁石の三沢さんたちが、いまもお粘りづよく「生産再開、全員再雇用」の旗をかかげ、労働者への犠牲転嫁による資本の攻撃と真っ向から対決し、たたかいつづけているのは、まさに「生きるために譲ってはいらないギリギリの抵抗線」だからである。

合理化

定時より一分三〇秒おくらせて大久保駅を発車した国電中央線の田口運転士は、最初の信号機が橙色の注意信号なのを確認して、速度を四五軒時以下に下げた。二〇〇メートルほど半速で走ったとき、一―二秒間虚脱状態になり、軽く気を失ってしまった。あまりの過労のうえに、すきっ腹がきいたのだ。車内警報器のブザーの音に気をとりもどすと、つぎの信号が赤になっていた。信号のむこうには、前の電車が停車しているではないか。

あわてて非常ブレーキをかけた。当日はあいにくの小雨で、線路は一〇〇〇分の二五の下り勾配。そのうえ、あとでわかったことだがブレーキが一つしかきかず、電車は滑走してしまふ。早く停ってくれ々と必死に念じたが、前の電車の後部がグングン迫ってくる。

前の電車の車掌が危険を察して、車掌室から線路へとびおろるのが見える。腹の底から恐怖感がこみ上げてくる。田口運転士は突っただけで、両足をふんばって眼を見開いた。けっし

て逃げてはならないと自分にいいきかせながら……。

変則勤務の中で起った事故

事故は、こうして一九六四年一月一〇日午前九時五六分に起った。事故は、さいわい軽微なものだった。それでも乗客八名が軽傷を負った。追突直後、二・三秒は何もできなかったが、すぐ外へでて車掌と相談し、連続事故のおこらぬよう手配をしたのち、お客を降しはじめた。そこへ駆けつけたパトカーは、田口運転士に手錠をかけ、現場からひきづるよう連行、一切の接見を禁止して取調べを行ない、一九日間の拘留のち、業務上過失傷害で起訴した。

田口運転士は、一月一日からこの日まで、一〇日間で八回の勤務変更があり、夜半一時に勤務終了して、当日朝五時起きで乗務するなど、変則的な労働をやらされていた。人員不足だからだ。事故当日も、午後二時からの勤務であったが、突然の連絡で午前七時勤務となり、自宅を朝五時四〇分にでて、朝食もとらずに運転させられていた。

そのうえ、この朝、他の線でも事故があったため、ラッシュが長びき、ほとんど注意信号の連続で、最高七分もおくれ緊張の連続であった。また、事故のおきたところは、カーブと勾配、ふくそうする架線と林立する鉄柱で、信号機が見えにくい。電車は老朽化し、二つつくべ

きブレーキ装置が一つしかついていない。当日は小雨だったが、ワイパーは手動式である。また、起訴状は「計器によって速度を確認することなく」と言っているが、スピード・メーターもついていなかった。気のきいたサイクリング自転車でさえメーターのついている昨今、八両編成で五〇〇〇人をのせる国電に、速度計のない電車があるうとは、検事も知らなかった。

運転士は、目の前の車体の下に流れ去る枕木の数で速度を計るのである。しかもラッシュ時には、信号と運転機器を含めると一〇秒〜一五秒に一度の確認をしながらである。労働者の神わざのようなカンと精神力に頼って、かろうじて安全を保っているのだ。そのうえ、過密ダイヤである。おまけに一列車の編成は長くなるばかりで、電車と電車の間隙はつまるばかり。乗客をすし詰めにするので、ブレーキをかけてもなかなかとまらない。そんなにたくさん乗せるのなら、もうかるはずだが、新幹線建設の借金三四〇〇億円の利子をアメリカに払うのがさきで、電車の複線化や老朽車取りかえ、人員増強はさきにのびるばかりだ。その新幹線も地盤軟弱で事故続出、お客をのせて地ならしのために走っているようなものである。

要員不足、過密ダイヤ、保安設備不備、三拍子揃っているのは、事故が起らぬ方が不思議である。田口運転士の場合も、信号は確認され、非常制動もかけられていたのだ。

ただ、次は「赤」だろうと予想して、カンで早めにブレーキをかけるのが遅れたにすぎない。それでも事故がおこってしまうのだ。国鉄当局も、この辺はあぶないことを認めて、事件

後信号をもう一本増やしている。ところが、田口運転士は起訴され、裁判は続いているのだ。三河島事件では、仲間が禁固二年八カ月の判決でブチ込まれてしまった。

国鉄労働者は疲れきっている

国家権力は、これら国鉄事故の問題が、自分たちの支配の根本的な欠陥をついているのを知っている。独占資本の荷物を安く運び、独占のために採算のあわない路線を保存し、新設し、アメリカに莫大な金を年々払う。しかし、労働者や市民の乗る電車は、ボロですしづめで、それを動かし、まもる労働者は低賃金で、数が少なく疲れきっている。

最近一〇年ほどで旅客輸送量は二倍、貨物輸送量一・七倍となっているのに、国鉄職員は二％、二万人以上減っている。だから、無理な勤務を強いられる。普通の状態でも、週に三日は泊りの勤務で、奥さんは昼間、夫をねかせるために、子供を背負って、冬はこがらしの吹きすさぶ街、夏は炎天の戸外へでいく苦勞をしている。そのうえ、臨時で夜中でも曉方でも、全神経をすりへらされる運転へ狩りだされる。緊張の連続の中での昼食の時間は、一九分しかないこともある。インスタント・ラーメンをすすりながら運転台にとびこむことになる。

しかも賃金は安い。田口運転士と同じ国鉄中野電車区に働くＹさんは、一三年間ハンドルー

筋に働き続けてきた三三才の生っ粋の国鉄労働者だが、月給はわずか二万五〇〇〇円だ。奥さんは、幼い子どもを托児所にあずけて働いている。それでも、わびしい木造アパートの六畳一間に七五〇〇円の家賃を払うのが精一杯で、疲れたからだを休めるのみなかなかむずかしい。

機関士、運転士・二〇年勤続で平均三万円ちょっと。車掌、改札掛、線路工手の仲間は二〇年で二万五〇〇〇円という超低賃金で酷使されている。だから、国鉄の職場では、私設職安ができていて、アルバイトの斡旋をやっているところもある。夜勤明けの国鉄労働者が、紺の制服、制帽をぬいだかと思うと、そのまま駅構内の日通へ直行し、黄色い日通の作業帽をかぶって、トラックの上乗りを勤めるなどは、日常茶飯のできごとである。

ビルの清掃人や、土方をやる仲間もいる。夜勤明けに無理するのは身体に悪いと知っていても、どうしてもときどきやらないと喰えないと語る国鉄の労働者は、いかにも腹にすえかねるおもいで働いている。

だからこそ、検察庁も、国鉄当局も、事故の原因は、結局、運転士が「注意義務を怠り、漫然と運転した」ためだと、全責任を労働者にかぶせてくる。田口運転士の場合もそうだった。しかし、田口運転士は、たたかいにたち上った。「二度と事故をおこさないために」、第二の田口をつくらぬために——彼は訴えに歩き、守る会を組織し、法廷を傍聴者で埋め、現地調査もやった。

職場の活動家は、「田口さんはきちょうめんで仕事の好きな人でして、当局から頼まれれば進んで何んでもやり、当局から重宝がられていた人なんです。悪く言えば、労働組合のろの字もしゃべったことのない人で、動員要請をしても、まず一回と参加したことがありませんでした。それが警察に一九日間拘留されてから、人間が変ってしまったようにたたかいたのです」という。

いのちとくらしを守る闘いへ

検察も、当局も、運動の発展をおそれた。

検察官は、「事をかまえるとかえって損するよ。いろいろ事情はわかっているし、君だけの責任にするつもりもないんだから」となだめすかした。当局は、奥さんに「ともかく田口君は事故を起したのだから、まず頭を下げるべきだ。事を大きくすると御主人の首が危い」と脅した。しかし、田口運転士はひるまなかった。負傷した八人の乗客に、「すまない」と思えば思うほど、自分があやまって刑に服することで事をすませてはいけなと感じた。

拘留中、接見禁止がとけて、手錠、腰なわのまま家族にはじめて会ったとき、幼い娘に「お父ちゃん、一緒にお家へ帰ろうよ」とせがまれて、みんな泣いてしまったときのことをおもい

だと、決して警察や権力の言うことに従う気にはなれなかった。自分とおなじように、何十年も低賃金で酷使され続けてきている仲間たちのことを考えると、めらめらと怒りが湧いてくる。田口運転士は憤然としていった。「これでは事故がおこらない方が不思議だ。それをみんな労働者のぎせいにしやがって。わたしが三河島判決の仇をとります」と――。

この田口運転士を包んで、国鉄労組東京地方本部も全面支援の態勢を固めた。職場に自主的にひろがる「守る会」の活動も、次第に他の産業の労働者、地域にも拡大され、*〃*いのちとくらしをまもるたたかい*〃*として発展している。

東京地下鉄では経費節減運動

事情は、私鉄の場合も同じである。東京地下鉄（帝都高速度交通営団）の職場では、*〃*経費節減運動*〃*が押しすすめられてきた。

「ただちにとまり、ただちにスピードをあげろ」――乗客がナダレをうって倒れたからといって、運転士の技術の問題ではないというのだ。その方が、電気代がかからないという地下鉄経営者の考え方がそれである。

「ドアは、なるべく早く閉めろ」――ラッシュで時間がおくれるからではない。日中、ガ

ラガラ空きのときでも、早く閉めさせる。ドアは、開けているときに電気を余計にくうからである。

かくて、急に停車して、戸をすぐあけ、すぐ閉めて、すぐ速度をあげるからラッシュアワー以外は時間があまってしまうため、駅と駅の間はノロノロ運転ということになる。「結構です。その方が電気をくわない」と答えた職制がいたという。整備工場の方でも、部品、工具の節約がひどくなった。すりへったカーボンを取替えようとしても、新品がない。職制に言う、「まだ二ミリくらい使えるのに取替えてしまったのが倉庫に転がっているから、それを探してもう一度使え」と答えた。機械をふくボロ布がないので請求すると、「昨日つかったのでやれ」と言われたが、そうもいかず、他の車庫まで電車に乗ってボロ布をもらいに行ったこともある。

そうかと思うと、お茶がら用のゴミ捨てを別にもってきて、茶がらはこちらに捨てるようにと言う。めずらしく親切だと思ったら、駅務の人が工場まで茶がらを集めにきて、「オガクズを買うのはもったいないから、今日から茶がらでホームの掃除をすることになりました」といって帰った。ホームの蛍光灯、詰所の電球は、三つに一つははずしてしまった。オリンピックの時には、ホームだけでもどして明るくしたが、オリンピック終了とともにはずれてしまった。

こんな調子だから、労働者の厚生施設に金をかけるはずがない。東京都内で暖房のない電車
は地下鉄ぐらいのものである。運転室内に氷が張ると、一往復してもとけないという。しかも
夏は暑い。三五度をこえる室内で運転していると、どうしても眠くなる。そうすると歌をうた
う。それでもたまらぬと立上って運転する。それでもすーっと意識を失い、耳に騒音がきこえ
なくなるまで居眠りをする。地下鉄特有の騒音がきこえているうちは大丈夫だが、ねむりが深
くなるとあの響音がきこえなくなる。ハッとして眼をあげ、わが身をなぐると、ベテラン運転
士は語っている。

駅務（出改札）はいっそうつらい。日曜日など定期の乗客が少なく、切符を切る人数が多い
ので手が動かなくなる。しかも、平均三五度、湿度八〇％のムシぶる同然の地下勤務である。
全泊勤務（週に二回）の時は、二四時間もぐりっぱなしなので、疲れが激しい。おまけに仮眠
するのは、飯を喰ったばかりの休憩室の机の上……。

工場でも、大変な労働強化である。車両が増えているのに、人員はいっこうに増えない。若
い労働者のなかには退めていくものが続出。だが、その欠員を補充しようとしてもしない。車両整
備も、一年定期でやるものを一年半にのばしているが、それでもテンテコ舞いの毎日である。
指を落すもの、骨折するもの、足の指をつぶすもの……負傷者が絶えない。

工場、保線の職場は、地下足袋をはいての労働のため、みんな水虫に悩み、乗務する運転

士、車掌は、極度の緊張と騒音（一〇〇フォン）でストレスに苦しみ、胃腸病が大流行している。腰痛や肋間神経痛も増えてきた。

結婚もできない//低い賃金//

それでは、そんなに地下鉄の経営は苦しいのだろうか。この一〇年間——それ以前の四・三倍の路線がつくられ、営業収入も年間一五〇億円になろうとしている。ところが、人件費のほうは昭和二六年の五〇・六%から三四年には二九・九%と急カーブで低下し、四〇年に入って一二%に落ちた。

低賃金であることはいうまでもない。勤続九年、二六歳の修車手の賃金明細表をみると、基礎給九八〇〇円、職能給一万二八〇円、住宅・危険・地下手当をあわせて六四五円、合計二万二六二五円ナリ。税金、組合費など天引きされた額は、なんと一万九八〇〇円。この金額では、結婚できるわけがない。いったい月六四五円で、どのような住宅と危険と地下作業の保障ができるというのであろうか。だから、職場の若い労働者の共通要求は、「腹いっぱいメシが食いたい!」である。食堂をつくり、経営者負担で安いメシを食わせろという声がうずまいている。

そのうえ、職制の支配がきびしくなっている。労働者三名に一名の職制という班制度がしか

れた。活動家のいない駅では、職場要求のアンケートなど、職制の組合員が一括して記入する。運転台でも、一人きりになれない。乗客サービスを名目にのりこむ検査係が、つきっきりで監視する。

こうした状態のなかで、朝のラッシュには二分一五秒に一台の過密ダイヤ。これで、どうしても安全が保障できるだろう。地下鉄は私鉄といっても、国鉄や東京都からのテコ入れによって、国の政策として新線延長、スピードアップ、経費節減を押しすすめている。労働者の肉体をすり減らし、乗客の安全と快適を犠牲にして――。

こうしたますます強まる資本の合理化攻撃に、いま職場では若い労働者を中心にたたかう核づくりがはじまっており、六五年春闘では堂々と二四時間ストライキを打って対決の構えをますます強めている。

女子タイピスト労働者は訴える

現代合理化の嵐は、ホワイト・カラーの労働者の肉体も虫ばみ、苛酷な労働強化でノイローゼとなり、自殺する女子労働者も出した。

彼女は、キイパンチャーだった。右の人さし指、中指、薬指の三本の指で、毎秒三タッチ、

一時間で一二〇〇〜二〇〇回もキイをたたく。何十人もが一つの方向をむいてキイをたたくのだが、その部屋はまるで工場のような騒音に包まれる。三本指だから、作業は単純くりかえし。彼女は、薬指に痛みを感じ、炎症をおこした。俗にいわれている「キイパンチャー病」(腱鞘炎)である。騒音に悩み、指の痛みに苦しんだ彼女は、「ビルの屋上からカードを全部バラまいてやりたい」と友人にいいのこし、屋上から飛びおり自殺したのだった。

ある損害保険職場の女子労働者は訴える――

「私は英文タイプを打ちはじめた丸四年になります。ただの事務員より手に職をもっている方が心強かろうという意味で習いはじめました。しかし、今この会社をやめて、つぎに受けたらタイプは打てません。私の腕は疲れすぎているのです。こうして書きものをしていると、もう肩が張るのです。

すぐ左手が、無意識のうちに右肩、右腕をいたわっている。左の首をうしろに曲げると、寝ちがえたような痛さです。でも、これはまだ腱鞘炎ではありません。痛くて腕が動かなくなっただけでもない。自分でどうしていいかわからなくなっただけで、タイプにうっ伏して泣きだしてはじめて医者に行けるのです。たった四年間タイプを打って、もう私は使いものにならない。タイプピストとしてだけではなしに、ソロバン入れでも疲れ、ナンバーリングも、ペン字も、お茶を

入れても手がふるえて、こぼしてしまふような半人前の仕事しかできない人間になってしまっています。その半分は誰に渡したのか？ 会社にさされた。でも会社は、課長は、同僚は……？ そんな風には思っていない。私たちの身体に障害があるのだと考えている。少なくとも考えようとしているのだ。私たちは労働力を売っても身体ごと売りはしない。この手記をつづりながら、何回となく書くことを休んだ。私だけではないだろうと心の中で思っていたが、自然に腕が弱ってきていることがはっきりしました。

お料理をしていて、あわて、器が使えない。すりこぎが使えなかった——私はタイピストだからしかたがないのか——そんなつもりでタイピストになったのではない。いやだ。もとの元氣な普通の身体にもどして！」

「私はこの四月で入社三年目になります。一年目は一人前のパンチャーとして働き、二年目は使いものにならないパンチャー、つまり廃人としてすごしてきました。果たして三年目からはどうなるのだろう。やはり、通院を続けなければならないのだろうか。

毎日仕事もしないで、病院に通うことがどんなにつらいものか。うらやましい身分と言われ、ひま人といわれ、そして給料どろぼうと言われています。マッサージを受けるため、病院へ行ってもほかの患者さんたちから、こんな若い娘さんがなぜマッサージを受けているのですか、一体どこが悪いのですかと聞かれたとき、神経痛ですと、この一言を答えるのに恥

かしさで氣も狂わんばかりです」

ダルマさんになるのはイヤだ！

「一月下旬あたり〃ケンシヨウ炎〃ではないかという予感がした。でも、私だけはいじようぶだと思った。私だけは……絶対に！ 休みながら我慢して仕事をしていた。そのうち左手が動かなくなった。書類をめくるのも痛い。それでも我慢して、右手で書類をめくり右手でパンチ作業をしていた。そして、右手が左手と同じような状態になってしまった。手はハンドバックを持っても痛い。腰も足も痛くなった。足のスネから上の方に電波が発するかのように重苦しい痛さが全身へとひろがる。左足の先端、ふくらはぎ、アキレス腱の下の血管が一本一本ふくれ上ってしまった。右足はカカトが痛い。腰をおすと首、背中に痛みがはしる。

足、首、背中のレントゲンを撮る。が、異状なしとのこと。でも、私は痛い。どこもかしこも。痛みのため、自分の手足であるのに思うようにならない。だから、まるでダルマさんそっくりだ。病院に行くようになってから二カ月、やっとカッターのクツがはけるようになった。お花の免状も、和裁の免状もとれなくなってしまった。家では何もできない。ただ寝

るだけだ。寝ていても痛くて眠れない。会社をやめるにしても、治してからやめたい。なおらなければ結婚も考えられない。第一お嫁さんのもらい手がないし、相手が逃げてしまう。いつまでも長グツをはいていたくない。

助けてほしい。

痛みを一日も早くとって！

ダルマさんはイヤ！」

この悲痛な叫びの中から、彼女たちはたち上った。「キイバンチャー病——腱鞘炎」とのたかいは、まず全損保（全日本損害保険労働組合）の職場を中心にひろがった。そして、これを機に労働組合職業病対策協議会も発足し、全国的なたかいとして力強く発展している。

モダン・タイムス現代版

「世界のソニー」——厚木工場では、二〇才の婦人労働者は「おばさん」と呼ばれている。一五才で採用して五年間、段々スピードをあげるベルト・コンベアーで、徹底的に搾りとって、漸く肉体に衰えがみえはじめ、賃金も高くなるころ、職場からおいだすためのいやがらせ

だ。

同じ電機独占の松下電器でも、一年間に三〇〇〇人あまりの労働者が職場を去っていく。あまりの労働強化に身体がもたないからだ。コンベアーは、たえずスピード・アップされ、ある職場では一人当りの生産量が一年間に一・五倍から二倍に増加した。一本のコンベアーに補助要員が一人しかいないため、時間中に便所にいくこともできず、二・五分から五分までという午前と午後の休憩時間をまっけて、一齊に便所に殺到する異様な光景が出現している。

かくて、松下電器は、一九五〇年から六二年の一三年間に、売上高を六七倍にし、利益金を実に二〇六倍にふやした。

また、ある時計工場では、重役、工場長などの居並ぶ前で、定期的にスピード競争をやらせているが、この優勝者の記録を、全体のベルト・コンベアーのスピードにするというから無茶だ。特に 器用なものが一定時間だけ、職制の前でやる張りつめた作業が毎日続けられるものではない。スピードについていけない労働者は、やりきれない部品を、つぎつぎとポケットに突っこみ、昼休みや休憩時間もせつせと働いてコンベアーに乗せているという。まさに、*「モダン・タイムス*の現代版*」*である。

一日中、コンベアーに追われて働くある金属労働者が、作業を終えて顔を洗っているとき、洗面器が急に流れ去って行く錯覚におそわれ、あわてて手で押さえるという悲喜劇も起ってい

る。また、弁当箱をひらいて机の上にのせた労働者が、アルミの弁当箱が逃げていくように思え、弁当箱におもわずしがみついた、という事例もでている。

電機産業においては、労働者をかりたて労働強化のムチをふるってきた一職制が、ついにその任に耐えきれず、自らの命を絶った。その遺書には、つぎのように書かれてあったという。

「……こんど生まれ変わるときは、だれにも左右されない、強い意志をもった人間になりたい」と。

虫けらのように殺される労働者

現代の合理化はまた、残酷非道な労働災害を激発させ、多数の労働者を殺し、片輪にさせている。

一九六五年六月一日——午後零時四〇分。福岡県山野炭鉱はガス爆発を起し、一瞬にして二七三人の労働者の生命を奪った。山野炭鉱は、五九年秋に発表された「一一人首切り合理化計画」の展開のなかで、三井資本が第二会社として発足させたものである。

三井資本は、「採炭不良」を表向きの理由にいったん閉山し、組合活動家を追い出し、人員を整理、自らの権利をなげすめた御用組合と低賃金無権利労働の下請組夫によって、株式会社

山野鋳業所々と衣をかえ、再スタートをきったのだった。閉山は、第二会社設立のためのペテンであった。

この合理化によって、人員は三割も減らされた。ところが生産量は、三井時代の鋳員一人当り月二三トンだったものが、第二会社になって月三〇トンに上昇し、六五年に入って四〇トン台にまで急上昇したのである。賃金は、本鋳員で二割の切下げ。坑内作業で四万一五四円平均だったものが、二万五二九円へ賃下げとなった。物価値上り分を考えると、実際には半額の賃金である。

そのうえ、労働時間が延長され、残業時間は三井時代の二倍も延長されている。公休も出勤が強要され、「突撃！ 的生産督励」が行なわれてきたのである。

本鋳員の労働条件が、このように劣悪なら、下請組夫はさらに苛酷な状態におかれている。九州産業労働科学研究所の原事務局長は、その実態をつぎのように述べている。

「……組夫の賃金は、本鋳員の七割程度で、かつボーナス（本鋳員は夏・冬に各四万円）がなく、厚生施設の恩恵にも浴していない。……実際には、力いっぱい働いて二万円（永田弘、三三才、堀進夫）、月二三万で一万七〇〇〇円（水俣万次郎、五六才、仕繰夫）……よくて二万円で、ふつうは一万四〇〇〇円という低賃金。

しかし、何にもまして決定的なことは、トコトンまで無権利だということである。殆んど

の組夫が入職する際、三万円と五万円の借金（肩入金とよぶ）を組長からしている。人によっては、この借金を募集のための恩恵的なものであるかのように言う者もあるが、もしそうであるならば、かつての遊女の身代金も恩恵的なものになる。要するに、組夫は非法な借金ドレイなのである。だから、病気で寝ていても、入れ墨みをした組の労務が、バイクでのりつけて出れと呼び出しにくるし、「トウマンガツソウ」や「ケツワリ」（ともに逃げだすこと）には、捕まえて指をつめさせたりする組も出てきたのである」と。

下請組夫は、まさに虫けらのように扱われ、殺されているのだ。そして、これらの下請組夫は、「炭鉱閉山で追われた失業者、農業構造改善事業のもとで急激に転落している周辺農村の中農下層や貧農」によってしめられているのである。

このように、炭鉱の労働災害は、急ピッチですすむ合理化のなかで起っている。六五年に入って、二月に北炭夕張（北海道）で六二名、四月に日鉄伊王島（長崎）で三〇名と、いずれも「ガス爆発」によって労働者は殺された。重大災害は減るところか、ますます増えている――。

弾 圧

狂暴で野獣のような経営者

全相銀連、富山相互銀行従組が、組織分裂したのは、六四年六月七日——春闘のさなかのことであった。

この日、重役の自宅でひそかに第二組合がつくられたのだった。その夜から、支店長を先頭に猛烈な切り崩しが始まった。そして、本店人事課においては、第一組合員は二人になっていた。まだ一九歳の小林弘子さんは、その一人であった。きびしい分裂とのたたかいの中で、人事課はそのなかでも最も困難な職場であった。

弘子さんの保証人である元支店長は、彼女の父を再三にわたって訪問し、娘を第一から脱退

させるよう要請した。しかし、弘子さんは会社の組合切り崩しとたたかった。

弘子さんは、その激しくきびしい資本の分裂攻撃を、つぎのように日記に書きつづった。

▲六月八日(月)▼ 昨日、第二組合の結成があったらしい。午後五時半、第一組合員は全

員本店に集合。……相手の卑怯なやり方に憤満を感じる。落ちた人は三八名。うち女子二名。

四時半すぎ、人事異動の内示。

労働歌の時、涙が落ちそうになるのをこらえるのに苦労する。全員集会の時、隣りの席のT嬢、とてもうれしそうな(はりきっている)表情。私の心は、とても沈んでいる。

▲六月二二日(月)▼ 第二のニュースに、青井さんの名前が出ていた。私は、啞然としてしまった。あの青井さんが……。私は涙が出そうであまらなかった。ノイローゼになりそうだといっていた彼。彼がとうとう……。大沢野のさんにTEL。不在。ますますふさぎたくなる。

支部集会。前は一二五名だったのに、今は八〇名くらいである。第二のニュースは二六九名と書いてあったが、どれだけ多くの人が脅迫され、また胸を痛めたことか。

彼女はまた、兄への手紙のなかでつぎのように書いた。これは、その手紙の下書きである。「さて、いよいよ夏がやってきました。でも、私の心はとても重く沈んでいます。まるでわ

からないのです。

六月七日に第二組合ができて以来、一日として安楽に休めた日はありませんでした。

毎日毎日会社へ行く。今日は何人落ちた、そんなことばかり。おまけに仕事はきつくなり、攻撃ははげしい。どうしたらよいのかさっぱりわかりません。でもそんなことはもうどうでもよいのです。心の中のムシクシヤをふきとばしたいのです。兄さんのところへおしかけてもよいでしょうか。この際、休暇でもとってゆっくり静養したい。『富山相互銀行』という名前を見ないですむところ……。そしたら兄さんの顔が、頭に浮んだのです。

何か八方ふさがりの暗やみにいるみたいです。互いに相手の腹のさぐり合い。さりげない言葉の、裏の裏までも気にしなければならぬのです。

でも私は一生懸命考えました。その結果、確信をもって第一へ残ることにしました。そして、第二の人たちにも、自信をもって労働者としての正しい方向へ進んでいこうと、呼びかけようと思っています。

兄さん、私はいまとても苦しんでいます。

だからお願いです。私達の行動を理解して下さい。第二組合の結成は、常務の家で雨戸をしめきったなかで行なわれました。

狂暴な野獣のような経営者は、私たちが血と汗で働いた会社の金を湯水の如く使い、第一

組合員を昼夜の区別なく口説いています。

私たちは、これをはねかえし、これから何年かかるか知れませんが、正しいことを正しいといえる明るい職場にしたいのです。卑怯な分裂攻撃者はいつている。第一の幹部はアカだと。兄さん、アカという言葉の意味を知っていますか。自分の思想と良心をまげない人のことです。大衆の利益になる正しいことを勇気をもって実行する人のことです。私たちは、労働者として明るい働きよい職場を築くために、経営者をお願いしているのに、アカだからこんなことをいう、と攻撃してくるのです。兄さん、でも安心してください。私が第二組合へ入る時は、もうこの世にいない時です。最後の一人になるまで頑張ります。正しいことが正しいと大声でいえるまで、私はアカといわれても頑張ります。両親は、ことなかれ主義で深入りするなといっています。でも、私は深入りしているではありません。当然のことをしているのです……」

資本の分裂攻撃に「死の抗議」

そして、七月のある日の日記に、彼女は「Uさん、私はわからないのです。なぜ、私たちはこう動揺しなければならないのでしょうか」と書いた。彼女の動揺を察知したかのように、七

月下旬にいたって第二組合委員長などが、執ように脱退の攻撃をかけはじめた。

▲七月三〇日(木)▼ K氏とデイト。富山相互銀行労働組合(第二組合のこと) 執行委員長のK氏。いますぐハンコを押せと再三再四いう。私は笑ってごまかしていた。K氏は、U氏が民青だという。その瞬間、私の顔色が変わったような気がする。私は、K氏のことばに惑わされたのだろうか。いやだ、共産党なんて。

動揺しないでおこう。そう決心しました。でも、私はやはりグラグラしました。さすがに委員長でした。

でも、弘子が残ります。きっと、どこかの支店へ飛ばされると覚悟はしています。でも、みていてください。きっと強く生きます。

一時は、とても死を考えました。この事態を解決できるのは、死のほかにはないと考えました。でも考えなおしました。死は考えません。もう、できるだけ生きたい。もっと強くならねば……。自分の道は、自分でさがさねば。私は負けません。Uさん、私少しなまけるかもしれませんが。しかし、叱ってください。頑張ります。もう絶望しません。

とてもついていけないと思いました。でもついていきます。どんなにのろくても、必ずついていきます。でも、私の心はゆらぐのです。みんな頑張っているのです。

翌三一日、職場に出勤すると、また「説得」がはじまった。第二の副委員長に昼休みに。職場に戻ると、人事担当の常務から、「企業破壊者」といわれた。弘子さんの身体の中で、なにかが音をたてて崩れていった。彼女は、ニコリ笑って第二組合への加入届にハンを押した。

その夜――。彼女は、親しかった友だち、第一組合に残る幾人かの仲間に、昼間の出来事を手短かに電話で伝え、「ごめんなさい」と詫びた。日記に、最後の文字を書き終えたのは八月一日午前二時であった。

「第一組合に残りたいけれど

第二組合に行かざるをえなくなりました。

私は静かな気持になりました。

自ら命を絶つと思うと……。

おかあさん

体をうんと大切にしてください。

花が活けてあるおへや

なつかしいおへやです」

多量の睡眠薬をのんで、死の床についた弘子さんは、翌朝、両親に発見されたが、すでに手おくれであった。

この小林弘子さんの自殺事件は、その後資本の分裂攻撃を封ずる大きな地域共闘となって実を結び、〃死の抗議〃にむくゆるたたかいが全国にひろがっている。

〃ここではワシのいうことが憲法だ〃

一九六四年三月二三日午前六時――。

司自動車（東京都足立区千住関屋町一八）の仮眠室に、突然、男の野太いこえがひびきわたった。

「新社長の就任あいさつだ。みんな起きろ！ 起きろ、起きろ！」

一昼夜ぶつ通しの運転で疲れはて、仮眠をとっていた労働者は、この声にハネ起きた。ねぼけまなこをこすりながら構内の広場に出た労働者は、そこに異様な光景をみた。警察機動隊二〇〇名。暴力団員一〇〇名近くが、広場をぐるっと取り巻いているのだ。労使間には、なんらの紛争もなかった。いったい何が起こったというのだろうか。このわけのわからぬ事態に、労働者は職場集会をひらいて真相をつきとめようと行動をはじめた。

ところが、一瞬速く暴力団が労働者に襲いかかり、なぐり、けるの暴行をはじめ、強引に「新社長就任の式典」をはじめたのである。〃労務担当新社長〃と称する男の就任あいさつは「き

ようから労働組合は認めない。ここではワシのいうことが憲法だ」というファッショ宣言であった。

全自交のなかでも戦闘的であるといわれる司自動車労組の仲間たちは、こうしてある朝、突然に組合ぶつつぶしの命をうけた新社長の就任をうけたのであった。この日から、職場は憲法や労働法などがまったく通用しない「無法地帯」と化した。

暴力団は、毎朝車輛を整備している組合員をとり囲み、「組合を脱退しろ！」と強迫し、これを拒否すると暴力をふるった。野球のバットで頭を殴られ、六カ月も入院する犠牲者がでた。同居する暴力団のために、わずか半年の間に一七名にもぼる重軽傷者を出したのである。

司自動車労組は、働くものの権利をまもり、暴力団の追放を要求して、毎朝就業前に職場集会をひらくことを断固としてつづけた。集会で報告する執行委員の襟首をつかみ、暴力団は構内から何回も引きづり出した。ある労働者は、足を皮靴で踏みにじられ骨折。委員長も、車の運転中をとめられ、路上にひきずりだされた。そして、三〇名にのぼる暴力団員にとりかこまれ、減多打ちされた。一カ月の重傷を負わされたのである。

朝の集会は、事実上不可能になった。しかし、それでも全員が顔をそろえ、ガンバローを三唱、仕事についた。労働者たちは、「暴力は恐れない、挑発にはのらない」を合言葉に組織を

まもってたたかいつづけた。

新社長は、「二〇日間で組合を潰してみせる」と豪語して乗りこんだが、そうはならなかった。しかし、彼らはこれであきらめるような奴らではなかった。

脅迫・暴力に「団結」で反撃

彼らは、家庭を襲った。

子どもを幼稚園に送りだし、一人で内職に精を出していたK夫人のアパートへ、突然会社の重役がやってきた。夫が職場で暴力団におどされ、生傷のたえぬのを心配してきた毎日だっただけに、不吉な予感にかられた。ドアを開けると同時に、重役を先頭に四人の暴力団がズカと上りこんできた。

彼らは、「亭主が片輪になってもいいのか」とすぐみ、「亭主をやめさせろ。司自動車だけがタクシー会社じゃない。どうしても駄目なら、お前は夫婦の縁を切るといって亭主に迫るんだ」と三時間にわたって責めたてた。K夫人は、泣きながらじっと耐えた。

この不意の訪問は、全組合員の家庭に行なわれた。家庭への脅迫につづいて、彼らは隣近所にビラを入れ、組合員の家の玄関から附近の電柱や塀にステッカーを貼りめぐらしたのであ

る。それは、「全自交の労働者を喰いものにする山川一郎・花子」「労金の金でキャバレー遊びをする山川太郎・道子」といったように、夫婦の名前を入れたデタラメなものであった。明きらかな中傷、脅迫だった。

親類にも手を廻した。

埼玉で店をだしている組合員の叔父のところでは、彼らは店先で難くせをつけ、あばれ、隣近所にはビラを貼った。山形で教師をしている兄には、昇格試験を妨害するといったように、徹底的に調査し、金に糸目をつけずい、や、が、ら、せ、をつづけた。埼玉県越ヶ谷の場合には、三反歩の田畑をもつ半農の組合員に集中攻撃を加え、その田畑に「私は、長年共産党員として活動してきましたが、いろいろと労働者に迷惑をかけたので、おわびにこの田圃を坪五〇〇円で売ります」と書いた二尺と一尺のベニヤの立札を四、五〇本も立てた。

このように、常識では考えられないことが、暴力団の手によって次からつぎへと行なわれた。そして、脅迫やい、や、が、ら、せ、がひとわりと終わったところで、ふたたび重役が家庭訪問をはじめた。こんどは前とうってかわり、もみ手をしながら札束を奥さんの前に積む戦法をとった。はじめに三〇万円を積み、最高七〇万円まで積んで「組合脱退」「退社」をせまった。これでも落ちぬとみると、再び脅迫し、六カ月に九回も襲われた家庭もでてきた。

そのため、家庭紛議もおきた。たまらず脱落し、他に職を求めた仲間も何人か出た。委員長

夫人は、幾人もの夫人から激しく吊しあげられた。

「あんたの主人のおかげで、うちの亭主は毎日傷が絶えず、家にも暴力団があがりこみ、親せきも迷惑がっている。ほんとうに生きた心地がしない。いったいどうしてくれるんですか！」

つめよる方も、説得する方も、涙を流してトコトンまで話しあった。その後、東京地方争議団でも評価された「司自動車の主婦会」は、ここから生まれたのだった。

暴力団と警官隊がグルになって

二年間の準備活動ののち、組合を公然化した全国金属日本ロール支部（東京都江戸川区葛西町二の三〇〇〇）も、暴力団の襲撃を受けている。

六三年一月一日夜のことである。「組合は認めない」とわめく経営者は、執行委員会をひらいている席上に、暴力団をおどおりこませて会議室からたたきだした。その夜、抗議に行くとなぐる、けるの暴行をうけ、二人の執行委員が一週間の傷を負った。

翌日の昼休み、ただちに工場内にある広場で全員の抗議集会がひらかれた。ここにも、二〇人の暴力団が「殺すぞ！」と口走り、椅子、鉄棒をもって襲いかかり、九人が一週間の傷、ほ

かに一〇数名軽傷を負わした。

こうして、まず暴力団によって殴りこみをかけ、二月四日幹部をふくむ三三名の「解雇」を通告してきたのである。その日、労働者は工場内に坐りこんだ。しかし、暴力団にたたきだされた。

翌五日、通常の出勤より一時間半はやく集まり、解雇者を包み一団となって入門する戦術をとった。ところが、会社も早朝、機動隊二五〇名、暴力団一〇〇名の力をかり、ロッキ・アウトで就労を阻止。約二時間にわたってもんだ。この間、暴力団は思う存分にあばれまわった。機動隊は見てみぬふりで待機、五名が一週間の傷、三〇名の軽傷者が出たというのに、暴力団は一名も逮捕されなかった。

二月六日。会社の分裂攻撃によって生まれた第二組合、非組合員の就労と資材製品搬入を阻止するためピケを張ったが、またも暴力団があばれ、このあと武装警官隊はピケ隊のゴボウ抜きをはじめた。一週間の傷を負ったもの一四名、軽傷者は多数でた。そして同夜半、二回にわたって闘争本部に暴力団が乱入した。

その後も連日連夜、暴力団は暴れまわった。会社正門前のピケ、街頭、寮、社宅、アパートと、どこかまわす暴力をふるい、消防用ポンプで水をかけるかと思えば、ハンマーで殴りつける。夜道では袋だたきのうえ、煙草の火を顔にねじりつけ、鉄棒、角材、石で殴り、真赤に

焼いた鉄棒まで持ちだした。そのため、両眼失明寸前の重傷者も出た。

寮においては、脅迫し暴力の限りをつくす暴力団に、説得に入った管理人の婦人にたいして、髪の毛をつかんでひきずりまわし、一カ月もの重傷を負わせた。

こうした暴力団と警官隊の共同行動は、六カ月にわたってつづいた。特に、警官隊のといった態度はお話しにならないものであった。ピケ隊を襲った暴力団を逮捕せず、逆に組合員を捕える。血みどろになった組合員が、お前たちは、「暴力団を逮捕しろ！」と抗議すると、ヘラヘラ笑いながら「捕まえてやるから、犯人を連れてこい」と腰をあげようもしない。反対に、ある組合員が、暴力団員をバトカーに引きたてていったところ、参考人として一緒に署に連れていかれ、待たされている間に逮捕状が出て、反対に被疑者として拘留された事件も起った。このようなそれまでの常識ではとても信じられないことが、白昼堂々と行なわれてきたのだった。

そして、七月に入ったある日――。日本ロール支部のよびかけでひらかれた「盆踊り」の晩、委員長が暴力団に襲撃され、三週間の傷を負うという事件が起った。このとき各共闘団体に電話連絡をとろうとしたところ、不思議なことが起った。ダイヤルをまわすと、きまって警視庁につながるのである。受話器を置く。するとベルが鳴り、警視庁の交換台が出てくる。この夜、暴力団の挑発と同時に、機動隊がカラのトラックを準備、大量検挙を狙っていたのだっ

た。

このような電話の一時不通は、全国一般の喜多ベン労組、同じく三正堂労組に、暴力団が押し入ったとき、いずれも申しあわせたように起っている。

露骨になった警察の弾圧

六五年に入ると、警察——機動隊の労働者にたいする弾圧は、いっそう露骨になってきた。

春闘においては、特にマスコミの職場に集中攻撃が行なわれた。争議にたいし、警察は独自の判断で介入し、暴力をもってスト決行中の組合員を社外にほうり出した。暴力団を援助し、協力する警察から、さらにすすんで直接、資本の「私兵」としてたかう警察へと変ってきた。

東京新聞では、スト第一日目に私服三〇名が職制とともに職場滞留の組合員に襲いかかり、第二日目には一五〇名の機動隊によって全員を社外におっほり出し、経営者のロック・アウトを援護した。そのうえ、組合員を退去させる指揮をとっていた委員長と書記長を、「不退去罪」容疑で逮捕したのである。

大映の多摩川撮影所においても、同じように三五〇名の機動隊が出動し、製品搬出を助けた。大阪の毎日放送労組でも、一五〇名の機動隊が職場にナダレこみ、組合員を雨中の屋外に

ほうりだし、機動隊の監視のもとで放送が行なわれたのである。

ビラ配りも認めぬ労働委員会

電機労連に加盟するソニー労働組合（東京都品川区北品川六の三五二）は、一九六〇年厚木工場が新設されて以来、ずっと同工場社員食堂で、昼休みを利用して組合ニュース、ビラ配布をつづけてきた。どこの組合でもやっているごくあたりまえの組合活動である。

ところが、第二組合が結成されたのを機に、会社は六三年一月「組合ニュース、ビラ配布は禁止し、責任者は処分する」と通告してきたのである。ソニー労働組合は、さっそく「不当労働行為」として東京都地方労働委員会に申立てをおこない、たたかいをはじめた。これを認めたら、日本中の工場から正当な労働組合活動が締めだされてしまう。

六五年三月になって、東京都地方労働委員会は結論を出した。申し立てを却下するというのである。却下理由は、「使用者の建物、施設、敷地などを利用して行なう組合活動は、たとえそれが休憩時間中、あるいはそれが就業時間外のものであっても、特段の事情のない限り使用者の意に反しては、これを行ないえないものと解釈するのが相当である」というもの。これは、資本家でさえも言いだしえない理屈である。現に、日経連の近藤法規対策部長は、その著

書のなかでつぎのように述べている。

「……休憩時間中、または労働時間外に会社の構内でのビラまきは、労働そのものに関する秩序の侵害ということは理論上いえないから、その方法、手段が直接的に企業秩序違反だとは言えない。故に企業秩序に対する実質的侵害にはならない。会社に無断で会社の構内でビラまきをして、別段施設管理権上実害をこうむっていないから不当とはいえない」と。つまり、独占資本の労働組合対策指導部といわれる日経連でさえ否定できない「休憩時間中や時間外の会社内における労働組合活動の権利」を、資本の圧迫から労働者の権利をヨゴするはずの労働委員会が、これを否定したのである。

担当の公益委員は、石川吉衛門東大教授。彼は、ソニー労働組合の抗議団のはげしい追及をうけて、「これは公益委員会議で全員一致で出した結論だ」といった。抗議団は、さらにいくつかの事実誤認を指摘した。これにたいして、彼はついに「すみません。不名誉なことですよ」とこれを認めた。抗議団の「すみませんですむか。ただちに決定を取り消せ!」という怒号に、なんらの反論もせず、ただ抗議団に向かって頭を下げ、もういちど「すみません」というと、彼はうなだれながら退席していった。

これは、最近の労働委員会にみるほんの一例である。これと類似する反労働者的な決定は、いくつかが重なって出された。

裁判所も「反労働者の」に

労働委員会ばかりではない。裁判所も、権力の侍女としての役割をますます強めている。

——一九六三年秋、賀屋法務大臣（当時）と横田最高裁長官は、裁判官、検事の全国会議や国会の法務委員会などでつぎのような発言を行なった。

「法廷秩序が乱れている」「審議が長びいている」「これは法廷が学習の場、宣伝の場にさ
れているからだ」「法の神聖、裁判の權威を確立して審議を促進せよ」

この方針は、東京地裁にも反映した。この年の暮れ、北海道で労働者から忌避を五回もうけた札つきの園部裁判官が、東京地裁の民事一九部（労働部）に「榮転」してきた。彼を先導に、法廷での労働者の權利は、つぎつぎせめられようとした。

日本ロール支部の「地位保全」の仮処分審理をはじめ、いくつもの争議団事件で法廷における傍聴者の制限がきびしく行なわれた。裁判所は、まず立って傍聴することを禁じた。つづいて、補助椅子も認めず、傍聴者が公判中に法廷を出入りすることも許さなくなった。できる限り、少ない傍聴者で裁判をすすめようというのである。

争議団は、裁判所の危険な企図を大衆的に訴え、裁判所へは大動員をかけ、粘りつよくたた

かいをはじめた。そして、補助椅子を入れること、公判中傍聴者の交替をみとめさせた。

しかし、一方では「審議促進」を唱えながら、判決を出すことが資本の側にとって不利な場合は、いくらでも審議を引きのばした。東京信用金庫従組（東京都豊島区池袋東一の三四）の六名解雇事件がその例に入る。

経営者は、裁判の進行中に争議責任の追及と称して、「ストライキ中に歌をうたった。ストライキ中に赤旗を掲げた。ストライキ中に拍手をした……」など、当然な争議行為をつぎつぎ解雇理由に加えたのである。裁判所は、これを四五項目にわたって採用した。このため、一九六〇年に提訴してから準備段階だけで四年をこえた。経営者は、さらに時間かせぎのため、四五項について七〇人にのぼる証人を申請、「一〇年裁判」をもくろんでいる。しかし、これにたいし裁判所は、審理促進のそぶりも見せていない。

このように、労働組合の側が提訴している事件は、それが仮処分であっても、正式の裁判と同様に証人調べを必ずやり、三、四年もかかって長々と審理する。ところが、資本の側が提訴した労働者にたいする工場建物入り禁止仮処分などは、労働組合側に十分な共闘体制がないと判断すると、一週間ぐらいで決定をだしてくる。審理も、判事室で双方別々によび、代表一名に限って陳述させ、決定をだすというスピードぶりである。

審理の引きのばしについては、あの歴史的な大争議をたたかった三池炭鉱労組の不当労働行

為救済申立事件（一九六〇年）がある。この事件は、つぎのような背景のなかで起った。

三井資本は、石炭産業の合理化の遂行と職場闘争を制圧するため、一九五九年一月に第一次合理化案、八月には第二次合理化案をだし、第一次合理化案が妥結した直後、職場活動家三名を生産阻害者の名のもとに懲戒解雇した。そして、一二月には職場活動家を中心とする一二〇〇名の組合活動家を、同じく生産阻害者として指名解雇したのである。組合は、この解雇処分撤回を要求して争議に入った。これにたいして、会社はロックアウトで挑戦、これと平行して職制を組合員の集会に参加させ、組合運営に支配介入するとともに、組合からの脱退、第二組合加入の説得をすすめ、団結破壊の不当労働行為をつづけた。

そこで組合は、福岡地労委に不当労働行為救済の申立てを行なった。ところが、この救済命令が出たのが、三年後の六四年八月三十一日。なぜ、救済に要する日数が、このように長くかったのか。その企図は、もうくり返すまでもない。もし、歴史の針を逆にまわすことが許されるなら、また救済命令が迅速に行なわれていさえしたら、三池労組の分裂はありえなかっただろう。同時に、六三年一月九日の大震災もなかったといっても過言ではない。

さらに、この不当労働行為救済命令の実効性の乏しさは、*「原職復帰命令」*をかちとった労働者が、原職に復帰した例がきわめてすくないことをみてもわかる。

最近の悪判例としては、東京私学教職員連合会に加盟する実践女子学園教組（東京都渋谷区

常盤町一〇二)の「身分保全」仮処分がある。学園経営者の「立入り禁止」仮処分では勝利の和解にもちこみ、「身分保全」仮処分では、三名の教師の組合活動を理由とする解雇無効を訴えていた。

これにたいして裁判所は、不当労働行為として全面的に組合側の主張を認めた。ところが、職場にもどるのは二名だけなのである。なぜかといえば、三名のうち委員長は、解雇されたあとの反対闘争のやり方がよくない——「特に理性情感いまだ未発達的女子高校生多数を扇動し……」という理由で、学園経営者の予備的解雇の申立てを認めたのである。つまり、首切りは正しくない、しかし首を切られてからの反対闘争のやり方が悪いから、首を切られても止むを得ないという内容である。これに力をえた学園経営者は、残る二名にも予備的解雇を追加した。こうして、裁判には勝ったが、三名とも学園復帰は実現していないのである。

大根でも切るように労働者の首を

労働者の首を、大根でも切るように、何のためらいもなくスパッと切る。いままでは、それでももっともらしい理由を資本の側は考えてきた。しかし、最近はその理由さえつけようとしていない。

三三名の組合活動家の解雇に反対し、ストライキをつづけてきた日本ロール支部一七一名の組合員に、全員解雇通告が送られてきたのは六五年六月二二日であった。それには、つぎのような文字がならべてあった。

「会社は、貴殿を就業規則第六六条三号にもとづき、昭和四〇年六月三〇日付をもって解雇します。

右に伴なう労働基準法所定解雇予告手当については、右六月三〇日以後お支払い致しますからお受けとり願います」

いったいどのような行為が、就業規則六六条三号にふれるというのか。これ以外に何も書いてない。それでは、就業規則六六条三号には何んと書いてあるのか。わずかに、「その他やむを得ない理由」と書かれているだけである。いまだに、その解雇理由はあきらかにされていないのである。

また同じころ、名古屋の中部日本放送（CBC）でも、組合役員二名の解雇が出たが、「就業規則により解雇する」とあるだけで理由が具体的に書かれていない。「理由は何か」と会社側を責めたところ、「胸に手をあてて考えてみる」と答えただけだという。後日、団交の席上で「スト中でないのにリボンをつけたことについて責任追及だ」といったという。こんなことが、白昼堂々で行なわれているのである。

裁判にもちこめば、会社は負けるにきまっている。しかし、彼らは、地裁で負けても高裁、最高裁とひきのばしていくうちに、労働者と労働組合がへばってしまうと考えているのだ。裁判所は、まさにこの資本の要望に見事にこたえて、〃審理ひきのばし〃をやっているといっても過言でない。

攻撃の背景

露骨な攻撃は資本の弱さの現われ

これまで、私たちは「倒産、合理化、弾圧」と、それぞれ職場の中で具体的に起っている苛酷で非情な資本の攻撃——労働者のおかれている状態についてのべてきたが、これらはほんとうにごく一部の事例にすぎない。全国に無数に起きている争議のなかから、いくつかの典型を選び、それをでうる限り具体的な事実によって浮きぼりにしたものである。

「倒産」の攻撃をうけた労働者は、その瞬間とまどい、底知れぬ不安に襲われる。無意識のうちに関心を支え、生きる手段として働いてきた「会社」が、何ものかの手によって、突然つぶれ去る。自分のたっていた地盤——一家の生活の糧をえていた「働く場」を奪われる。労働

者は、本能的に反発する。生活を破壊し、生産点から放うりだそうとする奴に向って抵抗をはじめ。

「だが、俺たちの会社をつぶしたのか」「だが、俺たちの生活を破壊しようとしているのか」——倒産争議にたちあがった労働者は、たたかきを通じ、だがが真の敵であるかを知り。生活を防衛し、働く場所を要求して、粘りつよくたたかきを横にひろげ、戦闘的にたたかう。しかし、敵が巨大にみえ、容易にやぶれぬ壁に絶望し、苦しく長いたたかきに、戦列を離れる労働者もいる。だが、離れていった労働者も、東京磁石の場合のように苛酷な現実には再び切りきざまれ、離散するか、低賃金、無権利労働の世界に苦汁をのんで生きなければならない。

たたかう労働者は、この資本主義社会がつづく限り、日本中のどの会社で働こうとも、低賃金、合理化、労働強化とたたかわねばならないことを知っている。いや、たたかきを通じて学んだのだ。「会社」に依存する生活、この社会の仕組みに疑問をもち、労働者が解放されるには、「社会をつくりかえる」以外に道のないこともつかみとっていく。そのためには、たとえどんなにつらくとも、粘りつよく、長期にたたかう労働者に変化する。

労働者の犠牲によって、その「危機」をのりこえようとする資本の攻撃に、身体をはってたたかいているのは、生きるためのゆずってはならない権利主張、正当な要求を基礎にしている。それは、きわめて困難なたたかきだといわねばならない。しかし、生きるためのゆずって

はならぬ権利主張、要求であるからこそ、多数の労働者は、たたかいに起ちあがり、いまもなおたたかいつづけているのだ。東京磁石の仲間も、東京発動機、喜多パンの仲間も、日特鋼の仲間たちも、労働者として生きる限り、たたかいのホコ先はおさめない。

きびしい資本の合理化攻撃とたたかう労働者も、これと同じ立場で問題をうけとめ、たたかいをすすめている。現代の合理化は、労働災害を増増させ、職業病患者を大量につくりだし、労働者を虫けら同然に扱い、殺す。人間がつくった機械に、人間が殺されていいのだろうか。

仲間たちは、自らの肉体をむしばみ、けずりとる現代の合理化攻撃に、怒りを燃やし、たたかいにたちあがる。組織を固め、スクラムを組み、それにはげしく抵抗する。どんなに考えが違っても、この苛酷な攻撃には一緒になって手をつなぐ。だからこそ、国鉄の田口運転士のたたかいをはじめ、合理化病Ⅱ腱鞘炎、腰痛とのたたかい、時間短縮、人よこせのたたかいなど、多くの仲間はこれを熱烈に支持し、たたかいをひろげ、発展させている。

分裂攻撃は、労働者の「統一」がかけがえのないものであることを、高価な代償によって労働者のひとりひとりの心に植えた。分裂攻撃にひるまず、敢然とたたかいにたちあがったところは、真の「統一と団結」が前進している。

これまでの激しい争議には、必ずといっていいほど暴力団が介入している。暴力団を争議に使えば、労働者が被害を受けるだけでなく、資本の側の弱点も拡大する。日ごろ、「平和的

に、話しあいだ……」と口ぐせのように叫んでいる資本家が、ひとたび労働者が決意してたちあがると、その正体をさらけだし、露骨に襲いかかってくる。司自動車や日本ロールの事実、そのことを教えている。

私たちが、暴力に負けない団結を築きあげることができれば、暴力による弾圧は、さらに仲間の統一と団結の輪を広げ、敵を包囲し、孤立させる反撃の契機になる。数多くの争議団の経験は、その後ますますたたかいを発展させていることを事実をもって証明している。最近では、暴力弾圧によって潰された争議団は皆無だといっても過言ではない。

警察は、*「社会の公僕として、国民の生命と財産を守る」*という一枚看板をかがげ、国民の眼をゴマ化してきた。しかし、警察の弾圧を直接うけた労働者、争議団の訴えを聞いた労働者は、警察は、*「資本家の公僕として、資本家の生命と財産を守るため、暴力団とも協働して労働者と国民を弾圧する」*ことを理解した。警察の弾圧の手口は、同じく司自動車、日本ロールに典型的にあらわれている。それが、六五年に入っていつそう露骨に徹底して強化され、いくつもの争議に介入し、労働者を職場からたたき出している。

*「公正無私」「正義の守護神」*の権化といわれる裁判所も、法をねじまげ、権力と資本の前に屈しはじめた。首を切られ、職場を失った労働者を無一文で放り出す資本を援護し、職場活動家を追放するために、何年でも裁判を引きのばし、*「法廷秩序」*と称して傍聴人を締めだす

など、ますます反動的になっている。しかし、それは逆に考えるなら、敵の弱点の露呈にほかならない。それはまた国民との団結だけが力であることを教えている。

抑圧、搾取強化、弾圧は、敵の本質的な性格のあらわれである。それを露骨に激しくやるか、巧みにおだやかにやるかは、敵の判断する彼我の力関係による。私たちは、弾圧が狡猾にやられることを喜ばないのと同様に、弾圧が露骨にされるからといって、けっして歎きはしない。

「利潤第一主義」をムキ出しに

一九六五年四月二二日——日経連総会において、前田一専務理事はつぎのようにのべている。

「……春闘の後、この夏ごろから、企業の各方面に「合理化の大波」が押しよせてくるに違いない。この合理化は、春闘の結果という現象的なものでなく、昭和四〇年代の経営者に課せられた課題——量より質への転換という本質的な要請によってなされるものである。

……三人でやるところは一人でやるように質の向上をはかることが必要になってくる。……どうしても、これは四〇年代の命題として、一度はくぐってゆかなければならぬ宿命的なものである」と。

告白的口調で語られたこの報告は、まさに日本独占の「ホンネ」である。

自民党内閣によって押しすすめられてきた高度経済成長政策は、あきらかに破綻した。金融、原料、市場をアメリカに依存している日本独占の構造的矛盾は、設備投資の過剰と金利負担でついに爆発点に達した。株価は下りつづけ、大蔵省、日本銀行の国家的援助による必死のテコ入れも、効果をあげていない。株価は、かろうじて一〇〇〇円の大台を維持しているにすぎない。証券独占の山一は、事実上の倒産状態に追いこまれ、国家資金による「無利子、無担保、無期限」の貸付けによって、どうにかもちこたえている。また、東京都議会汚職、吹原産業事件にみられるように、その政治部隊の腐敗と乱脈ぶりは白日のもとにさらけだされ、新たな政治的危機をつくりだした。

アメリカのベトナム侵略戦争での惨たんなる敗北、ドミニカでのぶざまな事態も、これに拍車をかけている。日韓基本条約の調印は、アジアから孤立するアメリカの必死の要請、政治侵略をもくろむ日本独占の強い要求が重なりあって強行された。

日本独占が、「量から質への合理化宣言」を発したのは、こうした背景のなかで行なわれたものであった。利潤第一主義の旗をかがげ、下請企業、中小企業を整理し、競争会社をぶっつぶし、吸収し、系列下におさめ、搾取と収奪の強化をはかろうというのが、日本独占の青写真である。そのため、私たち労働者をいっそう酷使し、賃上げを拒否し、物価をつりあげ、組織

に分裂のクサビをうちこみ、国家権力による弾圧を強め、団結と統一を破壊しようと狙っているのである。

追いつめられた彼らは、必死である。苛酷で非道な攻撃を、さらにいっそう強めてくる。だが、労働者と国民の「団結と統一」は、これと真っ向から対決し、飛躍的な前進をつづけている。それは、一九六五年の参議院選挙東京地方区と東京都会議員選挙での自民党の敗北にはつきりと現われている。この「地すべりの」変動は、さらに徹底的に進むであろう。

以下に語られる東京地方争議団のたたかいも、この「地すべり」を準備し、徹底させて行くうえで一定の役割を果たしてきたし、今後も果たして行くだろう。私たちは、そう信じている――。



II 統一の旗をかかげて

分裂とのたたかい

正副委員長の不当解雇から丸四年、組合の分裂から丸三年余。今なお敢然とたたかいつづけている日本信託銀行労組（東京都中央区日本橋通り三の二）は、不当解雇撤回闘争においても、また統一を拡大するたたかいにおいても、地道に着々と勝利への展望をきりひらいている。しかも、そのたたかいは、明らかに反撃の体制に入っているといえる。

「昇格」という名の首切り・日本信託

——日本信託にあらわれた不当解雇は、現役の正副委員長にたいして、「偉くなって非組合員になれ、それがいやならクビだ」という銀行側の脅しから端を発している。つまり、昇格という名の解雇なのである。

労働組合や組合員には、手きびしい弾圧を加えながら、一方では正副委員長を昇格させて組合から引きづり落とし、組織攻撃の尖兵に仕立て上げようとする銀行側の企図——その狙うところは、真剣に組織防衛を考え、たたかっている労働者には、十分過ぎるほどよく見透せた。

しかし、組合活動では、まだ若いサラリーマン組合であった。執拗に正副委員長の昇格非組合員化を強要する銀行側の圧力と、言葉巧みな泣き落とし戦術によって、職場は動揺をはじめた。

「一〇年も組合のために誠心誠意をつくしてきた正副委員長だ。この際、気持よく拍手で組合から送り出し、偉くなくてもらおうではないか」

「妻も子もある二人に、もし首切りでもでたら大変だ。組合が最大の危機に立たされている現在、二人が組織に必要なことは理解できる。しかし、首を覚悟してまで二人に無理をさせては……」

すかさず、銀行側は組合員の動揺につけこんだ。「もし組合員諸君に血があり、涙があるなら、二人の人生を決定づけるこの重大な時期に、勇をふるって二人を組合から送り出すべきではないか」。そして、追い打ちをかけるように一九六一年六月一二日——非組合員にされる昇格を拒否していた二人に「解雇」を強行したのだった。

「せいせい三カ月の短期決戦だ」——銀行側は、そう豪語した。

若い労働組合にとって、正副委員長の「解雇」は決定的なショックであった。それに拍車をかけるように、銀行側は悪質な分裂主義者を使って組合費不払いの攻撃をはじめたのである。

「勇気をもって組合費不払い運動を起こし、正副委員長を追い出し、組織を混乱におとし入れ、執行部の反省を求める」——彼らは、職制を使い、組合費不払いを組合員につぎつぎ強要した。組合費不払い者は日を追ってふえ、四カ月後には組合員一二〇〇名のうち四五〇名を数えるまでになった。

分裂主義者は、第二組合を結成する前日まで、「第二組合をつくる考えは毛頭ない。われわれは組合費不払いによって執行部の反省をうながすのみだ」と組合員をだましつづけた。そして一一月六日。銀行側の至上命令を拝した分裂主義者は、四五〇名の組合費不払い者をベテンにかけ、第二組合をつくったのである。

解雇通告から五カ月。組合は、動揺を包みかくそうともしない多数の組合員をかかえて、必死の解雇反対闘争と組織防衛闘争をたたかいつづけてきた。しかし、分裂という事態を目前にした重大な時期に、組合は幾つかの決定的ともいえる誤りを犯した。

それは、分裂主義者たちのどす黒い野望を、妥協によってなんとか企業内労働組合の統一を維持しようという考え方となってあらわれた。しかし、執行部が分裂主義者との妥協によって、企業内組合の統一を求めれば求めるほど、それとは逆に統一は後を向いて走り出してい

た。原則からずり落ちた日和見と動揺は、銀行側と分裂主義者をますます勇気づけ、味方の混乱と意気喪失を再生産していくばかりだった。

第二の誤りは、職場に断固とした闘争体制をつくり、そのたたかいを火だねとして、産業別共闘と地域共闘への炎に転化するという運動の原則をはき違えた点にある。

弾圧をうけた労働組合が、与えられた情勢を十分にみきわめ、味方の総力を結集した闘争を組織することなしに、広範な産業別支援共闘や地域支援共闘で敵を包囲するといっても、それは大の遠吠えか、ハリコの虎でしかなかった。銀行側は、組合のこの弱点をとらえ、猛烈に追い打ちをかけた。

第三の誤りは、つぎつぎに崩れ落ちる仲間たちに追いつき、「俺たちを見捨てて、きみたちは第二組合へ行こうというのか」とおどかしたり、「たたかいたくなければなにもしなくてよい。ただ第一組合に残ってくれ」という夜徹した説得工作の中味にあった。激しい分裂政策と弾圧の嵐の中であればあるほど、労働者の要求を組織し、職場に旗を高くかけ、要求を踏みにじる分裂と弾圧の狂暴な攻撃を暴露してたたかうことが要求される。そして、何よりも、このたたかいの先頭に立つ中核部隊にゆるがぬ確信を与え、その不動の団結を確立しなければならぬ緊急の任務があった。——この鉄則をはなれて、動揺する組合員を口先きだけで統一と団結の戦列におしとどめることは不可能であった。

銀行側は第二組合を結成した翌日、第二組合に一人平均三五〇〇円の賃上げ要求と、年末一時金五〇〇〇〇円の増額要求を提出させた。そして、数日後には、かれらの要求のほぼ満額を受け入れ、賃上げは九月にさかのぼって支給すると発表した。

年の瀬の生活に思い悩む組合員にとって、賃上げプラス一時金二万五〇〇〇〇円の臨時収入は、まさしく大きな魅力であった。しかし、この降って湧いたような臨時収入には、労働者の生命にとって致命的な猛毒がかまされていたのである。

「金融労働組合との共闘には参加しない」「向う三カ年間の平和休戦協定」がそれであった。労働組合は、二万五〇〇〇〇円の臨時収入に飛びつこうとする組合員に対して、その危険性を訴えた。だが、多くの労働者はそれに耳をかそうとしなかった。銀行という金融の殿堂で、いつも下積み of 生活と屈辱をなめさせられてきた用務員、守衛、運転手などの組合員たちも、懸命に抵抗しつづけてきた姿勢をたちまちにして崩し、第二組合に走った。残ったのは、用務員、運転手の組合員二名だけだった。

だが、最後まで抵抗しつづけたこの組合員も、その後銀行側の家庭訪問によって切りくずされてしまった。妻たちから泣くようにしてくどかれ、「二万五〇〇〇〇円」の臨時収入の前に屈したのだった。

分裂・無協約の攻撃に職場闘争で対決

こうして日本信託労組は、新しい年（六二年）を迎えた。組合員数は、ついに二割をわった。二〇〇名にも達しない少数組合に転落してしまったのである。しかし、組合は決意をあらたに、第一組合の運命を決する春闘の火ぶたをきったのだった。

この春、それまで丸五年の間、散りじりになっていた金融労働者が、統一して春闘の戦列に加わった。日本信託労組も、スト権で武装し、戦列に入った。

三月に入って、金融共闘の全国統一行動を軸にした波状ストが組織された。駅頭でのピラマキ、金融共闘の大集会、デモ行進が計画され、日本信託労組も積極的に参加した。第二組合への情宣活動も、連日のように行なわれ、統一行動をよびかけた。

これらの統一行動は、それまで銀行側の一方的な切り崩しに対して守勢に立たされていた第一組合の団結に大きな転機をもたらした。櫛の歯がこぼれるようにボロボロとかけた第一組合の団結が、にわかに定着しはじめたのだった。それは、まさしくたたかいかいの中で生み出された久々の成果であった。

「たたかいかいの中でこそ、団結は強化される」——過去一年数カ月になたって、執拗な分裂攻

撃に苦しみ、やせほそる思いの連続であった第一組合に、燭光のような確信がひらめきはじめたのはこの時からである。

たたかいは、三月の決算期を越えて四月に引きつがれた。そして、四月も半ばを過ぎたたたかいの中で、ダニのようにへばりついていた二つの交換条件——「金融労働組合と共闘をやらない」「三カ年平和休戦協定」を全面的に排除した賃金回答を引き出すことに成功した。

賃金回答の内容は、第二組合の回答と変りはなかった。しかし、過去五カ月もの間、「第一組合に在る限り賃上げにはありつけない」という殺し文句で、仲間を引きさいていった卑劣な条件付き賃上げ回答をぶち破って、前年の九月にさかのぼった賃上げ回答をかちとったのである。

春闘における一定の勝利は、それまで組合員をダマシ抜いてきた銀行側と分裂主義者たちの本性を、暴露する結果になった。だが、この成果は、直ちに第二組合員の中に統一への萌芽をよびさまし、第一組合のたたかいの意義を深く浸透させる力にはなり切れなかった。

それも、そのはずである。この春闘をたたかった第一組合には、正直にいつて第二組合に統一の目を注ぐ余裕はなかった。第一組合の団結を維持し、守り切ることこそが最大にして唯一の願いであった。

それだけではない。第一組合員の卒直な気持は、無責任な脱落によって自分たちを苦しめている第二組合員に対して、理屈ではぬぐいきれない部厚い壁をはりめぐらしていた。だから、

はなばなし第一組合の時限ストも、ピラまきも、第二組合員からは、むしろ冷めたい眼で迎えられていた。しかし、それでもよかった。たかう中核としての労働組合が定着し、団結への確信が強まったこと、それ以上に何を望むことができたであろうか。

こうして、熾烈な資本の分裂政策との闘争は、この春闘を通じ、長期の闘争への展望をきり開き、かすかな勝利への期待をいだかせたのである。三カ月間の短期決戦を夢見ていた資本の幻想は、メリメリと崩れ落ちた。だが、この時すでに銀行首脳部の胸中には、次の弾圧スケジュールが準備されていたのである。

労働組合を根だやしにする銀行の弾圧政策の第一弾が正副委員長解雇であり、第二弾が分裂——第二組合の結成であったとすれば、第三弾の攻撃こそは、一九六二年九月に期限切れとなる労働協約失効後の決定的な組織攻撃であった。

春闘後、銀行側はいち早く日経連推奨の理想的労働協約で第二組合を包みこみ、第一組合にも、逆締めつけ条項強化、人事同意権の完全剥奪、平和条項の強化による争議権否認などの労働協約改悪案を提示してきた。この改悪案は、一口にいつて組合の無条件降服を強要する再度の宣戦布告にほかならなかった。

労働協約の条文を金科玉条として組合活動を組織してきた組合にとって、この残酷な改悪案の提示は、職場に沈痛な衝撃をあたえ、組合員の間に三たび動揺の気配を強めていった。

第一組合は、早急に労働協約の学習を開始し、現行協約の一年延長を断固として要求する方針のもとに意思統一をはじめた。だが、どんなに第一組合が現行協約の延長を望んでも、銀行側の不動の意思を突破して要求をたたかいたる自信はまったくなかった。だから、職場討議の深化と共に、「無協約になろうと、どんな攻撃がかけられようと徹底的にたたかう」という方針が固まりつつも、依然として分裂と首切りの厳しい条件のもとにおける無協約状態は、不気味な響きを残していた。

銀行側が、最後の切札として最大限の期待をかけた協約失効の日がやってきた。職場の組合員一人ひとりには好むと好まざるとに拘らず、無協約下の寒風にさらされ、自らの生命を守るギリギリのたたかいを強制されることになった。

銀行側は、無協約の日から、第一組合の銀行施設利用を全面的に拒否し、まるで狂人のようにふる舞いはじめた。組合活動の自由を守るギリギリのたたかいとして、銀行施設内での集会が強行された。

「部屋から出ていけ、業務命令だ」と吠えつづける職制たちに対して、つぎつぎにスト権の発動がおこなわれ、争議行為としての施設利用闘争が展開されていった。しかし、ここでの勝負は、約二カ月の激しい職場闘争を通じて組合側の勝利を確定し、第一組合の施設利用は実力行使によって保障されはじめた。会社は、正式には認めなかったが、組合員の実力行動に屈し

たのである。

施設利用のたたかいで後退した銀行は、必死になって巻き返しをはかり、次には現役執行部の中樞を、ことごとく地方に飛ばす不当配転政策で対決を迫ってきた。しかし、「人事権」の名にかくれたこの卑劣な組織攻撃は、必ずしも有効な打撃を与えることに成功しなかった。たしかに、労使の力関係からいって、不当配転そのものをストレートに阻止することはむずかしい。要は、団結を弱め、組合員の戦闘性を弱めようとする狙いを粉砕することにある。

配転によって活動家を失った職場を積極的に強化し、不当配転によって地方にとばされる仲間が、今までの二、三倍のたたかいを、それぞれの配転職場で組織し、激励しあい、この不当配転を職場交流の機会としてとらえる方向でたたかいはじめた。

事実、このたたかいは一〇〇％完全ではなかったにしても、不当配転にたいする資本の期待を根底からゆさぶった。だから、不当配転による恐れは、日本信託の職場から大きく影をひそめた。

いずれにせよ無協約下のたたかいは、組合幹部や労働協約に依拠してたたかってきた職場組合員の姿勢を根本的に変え、一人ひとりの組合員をたたかう組合員にし、攻撃に強い組合員に仕立てあげてくれたのである。

第一組合は、銀行側の仕組んだ無協約という第三の弾圧政策をのりこえて、団結を確保し、

職場闘争への限らない自信をふかめる成果を獲得した。そして、一九六三年、六四年の春闘を経て、労働組合の戦闘性をますます強め、企業を超えた階級的自覚を高めていった。

第二組合有志が臨時給要求のビラ

こうしたたたかいの経過の中で迎えた六四年八月の全信連統一臨時給闘争は日本信託労組の「分裂から統一へ」の大きな転機となるたたかいとして発展した。

首切り、組織分裂前までは、信託銀行の中では最高水準にあった日本信託の臨時給は、分裂からたった二年半の間に、同業中最下位に転落し、上位の単組に比して一人当年間八万円の格差をつけられていた。だれの目にも分裂のねらいとむごいまでの結果は、きつくやきつけられていた。第一組合は、激しい怒りを結集して臨時給増額要求を銀行側につきつけ、職場へともにたたかうよう呼びかけた。そして、第二組合にたいしてともにたたかうよう申し入れた。しかし、銀行側の圧力によって、臨時給要求をこの期の運動方針から削除した第二組合幹部は、耳目をふさいで第一組合の呼びかけに応える素振りも示さなかった。

ところが、分裂をカサに着て、その後勝手気ままに強行された収奪政策に対する怒りと切実な要求は、第二組合幹部の思惑をぶち破って結集し始め、新たな運動を生み出した。

「私たちの苦しみには、労組（第一組合）、従組（第二組合）の別はありません。私たちも九月臨時給を要求しましょう」というビラが、第二組合有志一同の名前で、全職場に配布されたのである。銀行内の空気は一変し、組合員は喰い入るようにビラを読んだ。

第一組合は、ただちに臨時給の引上げを切実に望む第二組合員の声をアンケートによって結集させたが、その枚数は三〇〇枚を越え、その後のたたかいの基礎となった。

しかも、こうした職場での分裂をのり越える臨時給増額闘争は、十一月に入ってから第二組合に増額要求を決めさせ、さらに一二月に入ってから臨時給の増額を認めさせるという前進を勝ちとった。この間、第二組合有志は、つぎつぎに第一組合との共闘を訴えるビラを配布し、限らない激励をあたえた。

このたたかいの経験は、冷酷残忍な分裂政策の氷壁にとぎされていた第二組合の多くの仲間、俺たちも、やればできるという確信を身体で感じさせ、その後の第二組合有志一同の組織化の大きな原動力になった。切実な職場の要求をひっさげ、自分たちの手と足でたたかうことを知った有志一同の輪は、月を追ってひろがっていった。

有志一同の呼びかけで、統一バス・ハイキングが組織され、第一組合の文化祭に積極的に参加する運動が進展し、定期的な集会が開かれた。それだけではない。こうした職場のたたかいは、第一組合の法廷闘争の傍聴に、有志一同の代表が参加する権利を勝ち取るまでに前進した。

しかし、突風の如く湧きおこった有志一同の台頭におどろいた銀行側は、直ちに第二組合幹部を呼びつけ、「統制委員会」の設置を命じ、「第一組合に近づく奴は、ユニオンで首を切る」と脅しはじめた。また、第一組合の文化祭に参加する第二組合員に対しては、「文化祭に参加すれば除名する」と意気まぎ、資本の権力と御用組合の統制によって統一の輪にクイを打ちこもうとしてきた。

連日のように、有志一同の討論がつづけられた。

「今回は、文化祭の出場をあきらめて、情勢の成りゆきをみた方が賢明ではないか」

「でも、こんなおどかしに敗けていたら、何時になっても立ち上る機会はやって来ないよ」

「俺もそう思う。一人でも多くの仲間に参加させることが、不当弾圧を打破る一番の力になる……」

さまざまな意見が出たが、この討論はおたがいの要求をたしかめ合い、銀行側の攻撃に立ち向う決意を有志一同に固めさせた。

そして、一月二四日。お茶の水の労金会館ホールで開かれた文化祭には、予定されていた第二組合有志のコーラスが、舞台一杯に、その固いスクラムのなかから湧きおこった。さらに、演劇や構成詩劇にも第二組合員は参加し、文化祭は統一の歌声を高らかに響かせた。こうして、「統制委員会」を武器に、統一のたたかいくさびを打ちこもうとした銀行側の

計画は、みごとに失敗に終わった。

統一の波紋を企業の内と外へ

これらのたたかひを経て、一九六四年一二月のある日曜日。第二組合有志一同の代表者が集まって、一年間の総括のための討論がおこなわれた。そこには、第二組合になんの矛盾も感じなかった頃から、次第に労働者としての自覚をもち始める人間変革の過程が生々しく語られていた。

ある労働者は、自分をたしかめるように、「僕は、ガリガリの出世主義者として銀行に入ってきた。だから、第二組合ができた時、なんの抵抗もなく出世の妨げにならないと思って入ってしまった」と前置して、「しかし、だんだんと職場の実態がわかりはじめたころ、僕の職場にいた一人ぼっちの第一組合員の臆することのない献身的な姿に関心を持つようになり、〃村八分〃にされているその人と話し合うようになった。ちょうどそのころ、友だちの働いている銀行で分裂がおこり、第一組合に残ってたかっている友だちからも、いろいろ学ぶことが多かった。今の自分でいいのだろうか。こんな暗い職場を放っておいていいのだろうか。そんな疑問が、僕の頭を支配しはじめ、矢もたてもたまらなくなって、職場に『若人の会』をつく

り、山へ行ったり、話し合ったりする機会がではじめた。そして、仲間がだんだんふえて、職場が明るくなっていく中で、気がついてみたら、出世主義者だった自分の姿が、大きく変わっていた」と語った。

また、ある婦人労働者は、こんな話しをしてくれた。「私は、ある程度、労働組合のことを知っていました。でも、あの気狂いじみた切りくずしの中で、つぎつぎに脱落していく同僚たちを見て、自分だけ頑張っても、どうなるものでもないとききらめて、重苦しく空しい心にさいなまされながら、第二組合に入りました。そして、その時から、私の働く場所は日本信託ではない、大学へ入って、先生になる勉強にはげみ、僻地の子供たちの教育に生甲斐をみいだそうと考えるようになりました」。

しかし、この職場を見放した婦人労働者の心も、雑草のように、不屈にたたかいつづける第一組合のたたかいが影響をあたえずにはおかなかった。

「私は、第一組合のたたかいの正しさ、団結の正しさを知っている。それなのに、第二組合に走ってしまったというだけで、この職場を去って、僻地へ逃げだそうとしている。なにか、その僻地にバラ色の人生が待ってでもいるような期待に胸をふくらませて。しかし、今の日本信託の職場こそ、働く者の僻地ではないだろうか。この職場にふみとどまり、第一組合の仲間と腕を組んで、働く者の僻地を解放するために活動することができないのだろうか」。

真剣に悩み始めた彼女に、第一組合員の暖い手がさしのべられたのはいうまでもない。

「私は、この職場に青春をかけようと本気で思うようになりました」彼女は確信をもって結んだ。

そのほかにも原水爆禁止世界大会に参加し、大きく変った第二組合員の話など、感動的な報告が数多く出された。

それは、まさに銀行側の分裂攻撃のなかで、逆に統一の尊さを知り、統一を強化する労働者として自分を変革して来た「人間記録」であった。機関紙「はもん」は、こうした有志一同のたたかいの前進と成果のなから生み出された。

ところが、三菱独占は、六五年二月三菱銀行の筆頭常務を日本信託に送り込み、系列強化にのり出し、日経連の前田専務理事が、法廷闘争を直接指導するなど、新たな攻撃にのり出して来ている。しかし、日本信託の仲間たちは、すでに広げた統一の「はもん」を、さらに企業内外に力強く拡大してたたかいつづけている。

第二組合が七二時間スト・日本ロール

師走の北風が吹きすさぶ一九六四年一二月一四日。ドレイ職場日本ロールの第二組合は、

「一七年勤続で四万五〇〇〇円」という前時代的退職金の改善を要求して、七二時間ストライキに突入した。

幹部活動家三三名不当解雇撤回の争議開始以来九二年、暴力弾圧の嵐のなかで厳しい分裂政策とたたかいつづけて来た全金日本ロール支部（第一組合）の仲間たちにとって、このストライキは大きな激励と確信をあたえてくれた。

思えば二年前。吹きつける寒風に身をふるわせながら、暴力団と機動隊の兇暴な弾圧に必死にたえたその場所に、いま裏切ったはずの第二組合員が、赤旗とプラカードを押し立てて、ビケを張っている。

ビケの正面前には、「ドレイ職場Ⅱ日本ロールを労働者の手で解放しよう」という大看板がビケ隊を激励し、第一組合の隊列が、終日深い感動と連帯の瞳を輝しながら見守っていた。第一組合の仲間たちから、幾十冊もの労働歌集が届けられ、わき起る歌声は長い分裂の月日を押しながらすかのようにひびきわたり、会社側をふるえあがらせた。

あまりのうれしさに、カンバを集め、陣中見舞の菓子を送る全国金属の組合員も現われた。分裂支配の暗い職場で、笑いと輝きを忘れていた第二組合の仲間たちの顔も、雨雲を吹き飛ばしたように晴ればれとしていた。

「こんどこそ、徹底的に頑張るぞ」と第二組合員が笑顔で話しかければ、「しっかりやれ

よ」と全金の仲間たちが激励する。そればかりか、第二組合の家族までが「うちの父ちゃんもなかなかやるでしょう」と嬉しそうに全金の組合員に語りかけて来た。

日本ロールの仲間たちは、この時ほど「労働者に本質的な分裂はない」ことを痛感した時はなかった。

「ここまで来れば、俺たちは必ず勝てる。この第二組合との共闘を、全力を上げて一層強めよう」——日本ロールの仲間たちは、新たなたたかいの前進と成果をかみしめながら、明日へのたたかいを誓い合った。

しかし、第二組合員との共闘をここまで前進させるまでには、日本ロールの仲間たちの血のにじむような努力が積み重ねられてきた。第二組合員の家庭訪問にでかけても、彼らを待ち受けていたものは、固くとざされて何時までも開かれない雨戸だった。

「うちでは、お父さんに働いてもらわなくては食べられないのよ。もう二度とこないでください」と、かたくなに訴える主婦の声が、ビタリとしめられた雨戸の響きとともに、ロールの仲間たちの心に遠慮なく突きささってきた。寒い冬の夜など、「バカヤロー」と怒鳴りつけて泣き出しなくなるような深い悲しみと無力感にかきむしられて、家へもどったことがなんどあったことだろうか。しかし、そのたびにロールの仲間たちは、第二組合工作を反省し、真剣に

学習した。

「俺は就労者対策班（第二組合との共同闘争を推進する専門部）だけど、どうも憎いという感情が先にたっちゃう」

「俺もだよ。それでいて、＼共闘しよう＼というんだから、自分でも矛盾を感じてるんだ」

「でも、その感情をおさえて、彼らの要求を組織しようよ。そうすれば必ずわかってくれるよ」

「そんなに甘くないぞ。うちの第二組合は腰ぬけが多いからな」

さまざまな意見が出された。それでも、第二組合との共同闘争の方向がわかり始めた。しかも、ロールの仲間たちは、苦しいたたかいのなかで、かつては肩を並べて働いていた就労者たちを、雨戸を冷酷にとざしてしまいうまでに追いやった冷酷な資本の分裂政策こそ、もっとも憎むべきであることを知り始めていた。

連日、争議団のたたかいの様子を伝えていた「闘争ニュース」が、いつしか第二組合員の不満や要求を引き出すアンケートに変わりはじめた。

「賃上げをやりたい」「請負給を固定給にして欲しい」「労働災害をなくせ」「娯楽施設をつくれ」——数えきれないほどの要求が全国金属に集約された。ロールの仲間たちは、アンケートに書きこまれた要求を見ながら、心の奥深く沈んでいる労働者としての魂を擲んだように

感じた。憎いはずの第二組合員の要求をもって、ただちに団交をはじめた。翌朝には、その結果をビラにして配り、家庭を訪問して直接説明した。死亡者まで出した激発する労働災害に対しては、基準監督署や国会にまでたたかいを拡大し、世論に訴えてたたかった。

このたたかいに激励されて、就労者のなかにも抗議運動がおこり、分裂後初めての成果ともいうべき、作業用ヘルメットが獲得された。

こうして、職場からたたき出された日本ロールの仲間たちが、就労者の要求をかかげて献身的にたたかう姿は、それまで分裂の傷跡にひしがれ、感情的シコリで分断されていた就労者の階級的自覚を高め、工場内に急速に全国金属派が組織されていった。

職場のなかから統一のうねり

このような統一へのうねりのなかで、歴史的な「10・18 団結大集会」が、一万人の労働者を結集して成功した。大集会の成功は、全金日本ロールはもとより、広範な金属労働者や争議団に無限の感銘と激励をあたえただけでなく、会社側の妨害をけって参加した五〇名以上の第二組合員の勇気と確信を呼びおこした。

この不屈のたたかいは、この年の一月一九日に、ついに年末一時金二カ月分を要求して、

第二組合をストライキに立ちあがらせ、職場にたたかいの息吹きを湧きおこした。

月を追って変化してゆく職場の情勢を背景として全金東部地協の「2・5日本ロール必勝連帯スト」が、部厚くロールの仲間たちを包んで決行され、さらに一段と勝利と統一への展望をきり開いていったのである。

職場の統一と支援共闘の前進にろうばいした経営者は、日経連の応援をうけ、この前後から必死の巻き返しをはじめた。企業危機の宣伝を強化したり、全国金属派の重要人物に対して懐柔政策を打ちだしたり、労資協調路線で全金争議団と就労者との接近をたたきつぶそうとした。

安定賃金協定、労働強化、定年制による首切り、職制の締めつけ強化など、いっさいの犠牲が労働者に転化され、職場での矛盾をすくした。しかも、そのたびごとに第二組合の一部の幹部は、労働者の力を結集して、資本と対抗するのではなく、労資協調路線を表面化させ、話しあいによる解決の道をすすんだ。また、日本ロールの職場に重くのしかかる富士製鉄の「黒い手」は、就労者と下請企業に対する搾取と収奪を一層激しくし、職場にたたかいの波動をひろげていった。

かくして、一九六四年一〇月末、安定賃金協定で手足をしばりつけられた第二組合員は、劣悪な退職金制度にありつただけの怒りをたたきつけて、たたかいに立ち上ったのである。

臨時大会で、三〇二票対四三票でスト権を確立し、経営者と第二組合幹部の思惑をのりこえ

て七十二時間ストに突入したのだった。

ど、ぎ、もを抜かれた経営者は、スト三日目に暴力団と機動隊でビケ隊を脅迫するなど、大あわてだった。しかし、就労者は、このたたかいによって会社史上はじめて悪名高い日本ロールの青木天皇から、若干の譲歩をたたかいとり、前時代的退職金制度の改善に道を開いた。

日本ロールの職場に燃えはじめたこの新たなたたかいは、いま狂人のような資本の攻撃と対決して、発展の段階を迎えている。第二組合をたたかう労働組合に変え、職場のなかから統一のうねりを呼びおこし、分裂政策にうち勝つ展望を見詰めながら、きょうも全金日本ロールの仲間たちは元気にたたかいつづけている。

分裂攻撃に八五日間の部分スト・日本光学

「日本経済は不況で、企業競争は一層激化している。こうした情勢にあっては、世間一般とくらべて著しく高水準をはこる日本光学の賃金、労働条件は会社の発展を阻害する。だから、労働協約を改訂し、職務給の導入を計りたい」

平均三七七〇円の賃上げなどの要求をかかげて闘争に入った「ニコン・カメラ」で有名な日本光学労働組合（東京都品川区西大井一の六の三）に、資本が職務給の導入および争議権、人事

交渉権の剝奪というピンタをあびせてきたのは、一九六四年の夏であった。

それまで、六割をこす婦人労働者を中心とした三〇〇〇人を数える職場は、比較的風波も立たず、組合もおとなしいと評判されるような状態が続いていただけに、この会社の提案をめぐって職場は混乱した。

「いままで、こんなことはなかったのに、今年はどうしたのだろう」「組合は最後まで頑張れるかしら」——本能的に敵の攻撃のきびしさを受けとめた労働者は、職場の片隅でこんな話をかわしていた。

執行部は慎重に討論し、つぎのような態度をきめた。

「職務給は、分裂と低賃金、労働強化をもたらすだけだ。しかも、〃協約有効期間中は協約改廃の目的をもった争議行為を行なわない〃、〃人事移動の協議権を通告制にする〃という労働改悪は、事実上、労働組合の否定を意味する死刑法である。だから、当初の要求を堅持し、断固たたかいぬく」と。

八月に入ってから団交は、予測したとおり、なんの進展も見られなかった。職場は、そんな団交報告を聞くたびに、不安とともに頑迷な資本に対する怒りを燃やしていった。そして、大会で圧倒的多数をもってスト権を確立した。

第一波の全面四時間ストは、八月末から九月にかけて四日間にあたって行なわれた。

会社は、労組破壊のねらいをむき出しにしながら、社長、常務の社内放送をはじめとして、「巨額な争議資金を用意したから、絶対に勝つ。ストライキ参加者の首は保障できない」と脅し、職制によるいっせい切崩し工作を開始した。

一〇月に入ると、係長、職長グループの「スト解除決議」、代議員会でのスト解除動議など、ヒモつき職制を使つての切崩し工作は一段と組織的になって、第二組合結成のねらいも表面化して来た。

「二、三カ月で片ずくだろう」と思い込んでいた職場は、冷水をあびせられたように緊張しはじめた。

「どうしたら、勝てるのだろう」

「分裂したら、たたかえないのではないか」

「こんなに、敵が強腰なのも始めてだ。何か理由があるのではないか」

など、労働者の中には、部分的に焦りが現われて来た。しかし、指導部は地区労と協力し、長期の体制づくりを職場に訴えつつ、一九六四年いっぱい、全面ストを含む一五波、延べ八五日にわたるストライキをたたかい、敵の分裂攻撃とガツチリ四つに組んでたたかった。

一方、資本の命を受けた分裂屋、裏切分子は、「企業を守る会」、「真面目な組合員」の名で、連日のように「労組は一部の過激分子にひきづられて利用されている」と宣伝した。さら

に、ストを解かなければ、第二組合を結成すると脅しをかけてきた。

職場では、一層露骨な切崩し工作が行なわれ、職制が組合員一人ひとりを地下室へ呼びつけ
ては、「ストライキをやめて組合をぬけろ」と脅迫を続けた。

こうして、半年間にわたる資本の激しい分裂攻撃に耐えた日本光学労組も、年が明けてからは、事務関係の労働者から、その結束が乱れ始めた。そして、ついに職場グループ毎に脱退届が組合事務所に届けられてきた。

受け取った脱退届を手に唇をかむ若い組合員。「ちきしょう。またか」床をふみ鳴らしてくやしがる組合員。「信頼していたあの人が……」と、顔をふせて泣く女子労働者。息もできないような緊張感が、職場を支配した。

このような状況の中でむかえた一月二四日。職制と分裂主義者を動員した会社側は、日本光学労組を分裂させ、「ニコン労組」と呼ぶ第二組合をデッチ上げたのである。

憎らしいのは資本家と分裂主義者

分裂したばかりの職場は、どこでもそうであるように、日本光学の職場も敵と味方の宣伝、組合員のうばい合いが続けられた。ところが、半年間の分裂とのたたかいは、たとえ第二組合

の結成を許したといつても、若い労働者をたくましくきたえ上げていた。

「第一組合脱退署名」を第二組合の分裂主義者が強制して取って歩けば、第一組合の女子労働者は自発的に「脱退署名撤回署名」を組織して、勇敢に仲間を取りもどした。第二組合に落ちた仲間にも、たたかいの様子を知ってもらうため、なんらの指示もないなかで職場新聞を発行するグループも現われた。また、分裂以前とはくらべものにならないほどの無数の職場集会が、自発的に組織されて、分裂にたいするたたかいを誓い合い、はげまし合った。

なかでも、不当配転とたたかう青年部長の姿は、多くの第一組合員を勇気づけた。彼の使う机、椅子はもちろん、毎日履くスリッパまで持ち去られているなかで、彼は断固として職場に入ってたたたかい続けた。しかも、必ず毎朝部分ストに参加する組合員宛の手紙を書き続けてきた。そこには、職制のいやがらせなど一日の出来事が詳細にしろされており、毎朝スト参加者の前で読み上げられ、全体を激励する大切な武器にまでなっている。

また、多くの争議団の分裂との困難にみちたたたかいと、貴重な前進と教訓が日本光学の仲間たちを限りなくはげましていたことも事実である。

こうして、分裂から三カ月。もつとも苦しい時期にもかかわらず、日本光学の仲間たちは分裂の敵を明らかにして、職場に統一の旗を高々と掲げた。

ある一〇代の女子労働者は、「はじめは、なぜこんなにまで他の労働者が応援してくれるの

か、とても不思議だった。でも、どこへ行っても日本光学の闘争の話がでるし、次第に労働者は一人ではないということもわかってきた。いまでは応援にきてくれる人たちと会って話するのが、とても楽しみです」と明るく語っている。

また、他の女子労働者も、「わたしはストに入るまで、組合なんかにぜんぜん関心がなかった。でも、まわりで一生懸命支援してくれるし、自分でも組合に入ってたかうことが、正しいことだと信じているので頑張っています」と語り、さらに「一番つらいことといえば、やっぱり身近な人が第二組合に落ちて行った時です。この間も、一六才の女の子に『元氣？』と声をかけたら、下をむいて泣きだしてしまった。裏切ったのだから、憎らしいとは思うけど、でも、こんな若い子までウソと脅して第二組合に切崩した職制や資本家が、本当に憎らしいと思うようになりました」と確信に満ちた態度でつくくわえてくれた。

職場で第二組合に落ちた仲間、毎日のように激励の手段を書いているという女子労働者も、「わたしは、思っていることが上手に話せないのが焦っちゃう。本当に第二組合へ行った人たちは、普段からあまりわたしたちと話し合ったことのない人が多いのだから、ストに入る前から、もっともっと話し合っておけば良かったと後悔しているんです。でも、ストに入ってから会社にくるのが面白くなったので、ふだんより三〇分ぐらい早くきてしまうんです」

ここまで『ど根性』がすわれれば、第二組合が数の上で過半数を越え、三分の二をしめよう

と、反共ビラが親元へ届けられようと、職制に地下室へ呼びだされようと、けなげな女子労働者は、断固として第一組合の旗を守りぬくであろう。

今までの分裂組合が、一年も二年もかかってたどりついた道程を、日本光学の仲間たちは、分裂の翌日から堂々と歩みだしているのである。

日本光学の仲間たちのこうした分裂とのたたかいは、多くの先進的な経験を学ぶなかで、分裂にうろたえる労働組合の弱点を克服し、直ちに全面的な反撃を開始した貴重なたたかいである。

おそらく、この仲間たちは、吹き荒れる分裂の嵐の中で一層成長し、さらに豊かな経験と教訓を、日本の労働運動に残す名誉ある任務をになってくれるに違いない。

たたかいの中で得た六つの教訓

ここに紹介した三つの分裂とのたたかいは、東京争議団共同に結集する争議団のごく一部の経験にすぎない。しかし、すでに資本の分裂のクサビをたち切って、職場に統一の旗を高く掲げるまでに運動が前進していることを、これらのたたかいはしっかりとしめしている。

「分裂したらたたかえない」と、つい数年前までささやかれていたことを思えば、東京争議

団共闘に結集した仲間たちの分裂とのたたかいの前進は、それじたい日本の労働運動の前進を意味しているといえるであろう。

ここではこれらの貴重なたたかいのなかから得た教訓を、簡単にまとめておくことにしよう。

先に、前提として明らかにしておく必要のある点は、職場に統一を拡大強化する客観的条件が、今日一層強まっているということである。

敵の攻撃がきびしければ、きびしいほど、逆により広範な労働者が、たたかいに参加する条件が成熟するという階級闘争の法則を、今日ほどしっかりと掴むことが大切な時はない。

この立場を前提として、労働組合の側の主体的な問題を整理すると、第一は要求である。労働者の切実な要求を多面的に取り上げ、第一組合が先頭に立ってたたかえば、時期の早い遅いはあっても、第二組合員は必ず第一組合のたたかいに関心を示し、たたかいの意義を理解し、行動に立ち上るだろう。ところが、要求を軽視し、理屈でわからせようとしたり、争議団のたたかいだけを訴えるセクト的な態度は、明らかに失敗するだろう。

第二は、第一組合の団結の問題である。職場における統一の母体は、あくまでたたかう第一組合なのだから、けっして方針を右よりにするなどの妥協で統一を追いかけてはならない。

第三は、第二組合員を敵視してはならないということである。特に、*「裏切りやがって憎ら*

しいぐという感情を克服して、資本の分裂政策の本質を具体的な職場の実態のなかから浮きぼりにし、分裂の敵を明らかにすることは統一への運動のカナメである。

また、一部の悪質な第二組合の幹部の役割を暴露することは、一定の意義をもつが、だからといって、あたかも第二組合が敵であるかのように考えることは、統一を拡大するたたかいにとって有害である。

第四は、統一はけっして企業内的には前進しないという問題である。一つひとつの争議は、けっして切り離されたたたかいではないのだから、産業別共闘、地域共闘、争議団共闘などのたたかいに積極的に参加し、広範な労働者の連帯のなかで、職場に統一をきずく必要がある。特に、今日の情勢の中では、日常的な要求と共に、独立と平和と民主主義を守るたたかいが、分裂とのたたかいの有力な武器であることを明記する必要がある。

第五は、第二組合のなかに中核を組織する問題である。分裂とのたたかいは、切実な要求にもとづきながらも、やはりそのなかでどれだけ階級的な自覚をもった労働者を育てるかによって決定的なのである。したがって、独自に「中核の養成」を追求しなくてはならない。このことに成功するなら、第二組合は自らの足で歩き、自らの手でたたかいに立ち上るだろう。

最後は学習の問題である。分裂とのたたかいは、長期のたたかいを覚悟しなければ勝利できない。だから、ひとつの局面での勝敗に一喜一憂するようなことであってはならないのであ

る。情勢を正しくつかみ、労働者階級の理論を学び、先進的なたたかいの経験を吸収する日常的な学習は、職場におけるねばり強い統一へのたたかいに欠くことのできない支えになる。

ひと通り問題点を整理したが、日本の労働運動にとって、分裂とのたたかいは「克服された問題」ではない。特に、安保闘争後における分裂は、その規模と内容において、はるかにきびしく、兇暴であるといわれている。だからこそ、いたるところでたたかわれている先進的争議団によって、前人未踏の地に開拓のオノが打ち込まれ、勝利への真剣なたたかいが開始されているのである。

さらに、分裂攻撃にたいするたたかいは、たんにその企業における不当解雇を撤回させ、または統一を回復するたたかいの勝敗にとどまらず、独立と平和と民主主義と生活と権利を守る労働運動と、民主運動の全体の消長に直結する位置づけをあたえられていることを、しっかりと腹にすえておくことを、最後に強調しておきたいと思う。

全金日本ロールは、言語に絶する暴力弾圧に耐えながら、争議突入後九カ月目の一九六三年一〇月一八日、一人の「日本ロール支援団結大集会」を成功させ、さらに一周年の六四年二月五日、全金東部地協一人の「ロール必勝連帯ストライキ」を組織した。

それは、歴史的な安保闘争以後に日本の労働者階級がはじめてかちとった連帯ストであり、争議団のたたかいのあらたな発展を示す重要な統一行動であった。

鳥の鳴かない日はあっても

日本ロールの仲間たちが、産業別統一闘争を中心に、すべての労働者、勤労人民の統一をおしすすめる正しい闘争方針を確立するまでには、一定の期間と困難なたたかいが必要であっ

た。

首切りと同時に工場の外にはおりだされたロールの仲間たちは、おそいかかる機動隊、暴力団の弾圧に身体をはって耐えぬいたが、ピケットは破られ、第二組合員は就労し、資材製品は自由に出はいりして、生産は一日として止めることができなかった。仲間たちは、味方の倍を数える暴力団、機動隊の厚い壁に身体をぶっつけてははねかえされ、無力感におちいり、勝利の展望を見失ってしまった。

どうせ敗けるなら、一発なぐりこんでという悲痛な敗北感による意見もでてきた。組合は混乱した。

たたかいは、勝利を保証する正しい方針を緊急に必要としていた。二五〇人の組合員の知恵を結集した真剣な討論が何日も組織された。労働者教育協会から講師を迎えて、十数回にわたる学習会も開いた。その中で、東京争議団共闘のたたかい、さらに三井三池と日炭高松のたたかいが、無限の教訓と励ましをあたえてくれた。

こうして指導部は、つぎのような方針をつくりあげ、全組合員の思想としていった。

「(1)共闘の強化 全国金属にいつその支援をあおぎ、連帯ストができるまでたたかいを広げる、未組織労働者を組織する、農漁民の苦しみと要求をきき、組織し、町民と結合する、日韓会談を中心とする全国的な政治課題と正しく結合する。

(2) 分裂とのたたかい 第二組合を敵視しない、第二組合の不満と要求をきき、組織し、職場にたたかいを起し、統一を強化する。

(3) 支部の団結の強化 以上の方針を長期に貫けるように学習に励み、全員でたたかう、アルバイトを中心に生活体制をいっそう強化する、全員の声をたたかいに反映させ、力を發揮するために二二班の班編成とする」

スト突入ご四カ月の六三年六月、歴史的な戦術転換の大会が開かれた。それまでの討議と学習・交流の成果で大会は成功し、ビケを解き、統一の前進のため奮闘するあたらしい闘争方針が満場一致でかちとられた。

日本ロールの仲間たちは、異様な緊張感のなかで、勝利の展望をつかんだように感じた。翌日から、新方針のもとに、産業別統一闘争を軸に、巨大な統一をめざす意識的な活動が開始された。

徹夜でその日の事件をビラにすっては、オートバイと自転車、地域の労組へ訴えに走った。ビラには、下手なガリ版で暴力弾圧のすさまじい様子がいっぱい書かれている。

日本ロール争議は、当時の自民党池田内閣が国会で強行突破をねらっていた「新暴力法」の生きた証拠として、全金と地域の組合にひろがっていった。

日本ロールは、引き続き全金東京地本三〇〇支部に、どんなに手がたりない時でも、週に一

度は組合員が出かけるよう徹底してオルグ活動を強化した。寒風吹きすさぶ冬は、鼻みずをこすりながら、持ちきれないほどのビラ、闘争ニュースをかついで、東京中の支部から支部へ訴えて歩き、夏は汗とほこりにまみれながら、一層重く感じるビラをかついで、真っ黒に陽やけしてたたかいを拡大する苦労を続けた。なかには、馴れない歩く活動に、顔がむくんでしまう組合員も現われるほどであった。こうして、烏がなかない日はあっても、日本ロールの闘争本部から赤ハチマキ姿のオルグ班が出発しない日はなかった。

しかし、調子のよいことばかりは続かない。時には、このあいだ来た組合員はいつていることが全々わからない。もっと闘争がわかっているのをよこせ。態度が悪い。支援されているんだからもっと腰を低くして支部廻りをやれ、というような批判を受けることがあった。そんな時、日本ロールの仲間たちは落胆したが、素直に反省し、激励し合いながら、翌日にはまたオルグにでかけた。

「甘ったれ」の姿勢を正しながら

まったく明けても暮れても、オルグの毎日であった。ところが、三カ月も続けるうちに、「いつも会って話すのは、組合の役員だけだ。支部廻りだけでは、職場の労働者に闘争を知っ

でもらうことはできない」という悩みが起きてきた。そこで、大衆的な交流会を組織する運動が起こされた。

たとえ、往復四時間もかかる三多摩の組合でも、乏しい闘争資金をはたいて闘争を知ってもらいたい一心で交流会に出かけた。帰るのが夜中の一二時を過ぎることなど、少しも珍しいことではない。しかし、日本ロールの仲間たちは、暴力弾圧の有様を、どうしても敗けられない争議であることを断片的に熱っぽく語った。

また、組合大会、職場集会、学習会などには必ずでかけ、訴える時間をつくってもらった。日比谷公園をはじめ、横田、横須賀などで行なわれる統一行動にも、必ず赤ハチマキ姿で参加し、大量のビラを配布した。

なかには、生まれてはじめて人前で話すせいで、すっかり上ってしまい、全身に汗をかきかき訴えたのが、わずかに五分間だったという仲間もいる。また、なんとかたたかいを訴えたまではよかったが、「見通しはどうなのか」と聞かれてめんくらい、とっさに「争議に見通しはありません。勝った時が私たちの見通しです」と答えて大喝采を受けた年輩の組合員もいた。

なにしろ、「百姓がいやで東京へでてきた」「勉強が大きらいだから労働者になった」と自称する連中のオルグだから、ハチの巣を突つついたようなさわざである。しかし、どんな失敗をして恥をかこうと、思っていることの十分の一も言葉にならなかつと、争議に勝つために

は訴えなければならない。だから、日本ロールの仲間たちの訴えやオルグは、まさに真剣そのものであった。

次第に、全金の各職場で日本ロールのたたかいが話題になり、少しづつ浸透していった。なかでも、警察、暴力団の弾圧の現場をカメラで写して、各職場に掲示する活動は、直接目でたたかいを見てもらうことができ、大きな効果をあげた。

闘争資金のためのお菓子、アサリの行商も、連日各支部の協力で、昼休みに工場のなかで店を開いた。この昼休み行商は、なによりも広範な職場の仲間たちに元気にたたかっている姿を見てもらうまたとないうち場々になった。

しかし、これらの活動は、必ずしも直線的には進まず、さまざまな困難に突き当たった。工場を占拠していないことは、決定的に不利だ。いったい日本ロールは、工場占拠を真剣に考えているのか。地域にでて署名をとったり、政治闘争ばかりやっているではないか、という基本的な方針に対する批判にぶつかることもあった。また、「カンパ、行商、決起集会くらいならいいが、〃連帯スト〃まで打ってくれとは少し甘えているのではないか」という反発に出会うことも一度や二度ではなかった。

さらに、「日本ロールは、〃アカ〃が多いから」と交流会などを避ける組合すらあった。ロールの仲間たちは、そのたびに深刻に悩み、憤慨した。

「あそこの幹部はダラ幹だ」「あそこは、労働組合の名前がもったいない。従業員組合とあらためた方が似合うよ」とくちぐちに語り合った。しかし、なげいていてもはじまらない。そういう幹部、そういう組合も含めて、統一闘争に参加してもらわなければならないのだ。どうしたらよいかを真剣に相談した。

深く話しあってみれば、反省しなければならないのは自分たちだという結論になった。「ダラ幹」だとか「御用組合」だとか、軽々しくいってよいのだろうか。労働者の生活の安定を望まぬ幹部や組合があるだろうか。どんな幹部も、どんな組合員も、こんなに、ひどい攻撃を受けているおれたちが、ドレイ職場解放でたかっているんだから「負けた方がいい」と思っているはずはない。自分の職場の問題で手が一ぱいなので、支援したくもできないのだろう。戦闘的な支部だって、話はきいてくれるが、そう簡単に連帯行動に入れる状態ではない。この問題は、日本の労働組合が全体としてまだ弱い。企業主義的な弱点をもっているからだ。

これは、おれたちももっている弱さだ。だから、訴えたらどこでもすぐ応援してもらえると「甘える」争議団の方に問題があるといわなければならない。おれたちは、すこしでもその組合が強くなり、すこしでも幹部の人の役にたつ訴えをし、ビラをまこう。それは、日本の労働組合運動を全体として前進させるうえで、役にたつたかということだ。

よし、おれたちはやりぬく。必ず「連帯スト」を成功させよう。日本ロールの仲間たちは、

一層のファイトをもやして活動に精をだした。

一万名のロール支援団結大集会

上部単産の全国金属東京地本は、いち早く現地での決起集会を開いて日本ロール支部を激励するとともに、「日本ロール支部に加えられた首切りと暴力弾圧は、首都の労働者階級にむけられた兇暴な挑戦である」と位置づけて、たたかう体制をととのえた。必要なオルグを張りつけ、カベ新聞、機関紙などで各職場への教宣活動を強化した。

全金東京地本東部地協は、これらの活動を土台に、組合員一人一〇〇円のカンパを打ちだした。つづいて、東京地本も五〇円のカンパを決定した。これらのカンパは、今日まで日本ロール闘争を継続する物質的な力になってきたが、全金東京の組合員はすでに一人当り一〇〇〇円以上の「ロール・カンパ」を行ない、物資カンパと合わせると、その総額は六〇〇〇万円に達している。

そのなかには、「団結袋」による石鹼、カンズメなどのカンパが、三度にわたって組織されており、全国から日本ロールへ集中された。なかには、「ぼくも、お父さんといっしょに応援していますから、ガンバってください」という小学生からの手紙などもふくまれていて、家族

を大いに激励した。今日までに、約六〇〇の「団結袋」がよせられている。

さらに、九州から北海道にわたる全国オルグが、各地本の協力で第四次まで組織され、全国二〇万の組合員に直接たたかいを訴えることができた。また、事実上の親会社であり、吸収合併をたくらむ富士製鉄三工場へのオルグ団派遣も、富士鉄労連の好意で二回にわたって行なわれた。

このように、日本ロール闘争に労働者が結集され、たたかいが広がるにつれて、敵は暴力弾圧を手びかえ、次第に守勢に廻りはじめた。たたかいは目に見えて前進しはじめ、組合結成一週年を記念する日本ロール支援10・18団結大集会が日比谷野外音楽堂で行なわれた。全金の仲間を中心とした一万名の大集会は、ロールの労働者を心の底から激励し、ピケを解き、産業別統一闘争を中心に追求してきた春からの方針に深い確信をあたえた。

工場からだされている不安や、展望がもてない悩みは消え去った。どんな困難をものり越えたたたかい抜く「ど根性」が一人ひとりの組合員のハラにすわった。総評大会と金属共闘も、日本ロール闘争に満場一致の支援決議を行なった。

戦線は広がり、たたかいは飛躍した。「自信満々だった」敵が顔色を変え、力関係は変化しはじめた。全国金属の産業別統一闘争が、しっかりと柱になりはじめたからである。そして、地域住民、第二組合との共同闘争と結合して戦力は倍化され、「正規軍」の風格をそなえてき

た。

どんな弾圧がかかろうと、ビクともするものではない。当初、組織するのに苦勞した交流会も、「ロール闘争の経験を聞かせてください」と現地を訪れる労組が殺到し、連日のように交流会が開かれるまでになった。

そればかりではない。「学習会を開くので講師にきてください」という注文まで舞い込み、勉強するのがいやで労働者になった組合員の「にわか先生」が出現した。

「この俺が二時間も話しをするんだってよ」——日本ロールの闘争本部は大さわぎである。それでも、「にわか先生」は遠く長野、石川、千葉、岩手県まで出かけ、立派に「先生」をとめた。

成功した金属労働者の「必勝連帯スト」

一方、東部地協は、「ロール闘争は全金に加えられている合理化と分裂攻撃の「防波堤」である」といっそうその位置づけを明確にして必勝を期す体制を組みはじめた。

10・18団結大集会の成果の上に、「日本ロール対策委員会」が各支部に大衆的に組織された。対策委員会は、組合三役を一名加えるほかは、職場の組合員によって構成することを原則

とし、職場、地域で日本ロール闘争を強化する任務になった。

そして、一月一〇日に、事実上の工場代表者会議ともいべき、第一回ロール対策委員長会議が開かれ、〃連帯スト〃を目標に急ピッチに体制をととのえることが決議された。この席上、浜田精機など四支部が「いつでも〃連帯スト〃を打つ用意ができています」と発言して牽引車の役割を果たした。

三〇〇〇人の組合員をかかえる精工舎や松尾橋梁などの大型支部は、長期の準備期間を必要としたが、中小支部と歩調を合わせて準備を進めることを誓った。

明けて六四年一月一日、議長を先頭とする東部地協常幹は、これら各支部の準備の状況を詳しく点検した後、地協一万人の組合員に次のように指示した。

(1) 地協あげての〃ロール必勝連帯スト〃は、争議突入一周年の六四年二月五日とし、午後一時より一時間決行する。

(2) 各支部は、一月末日までスト権を確立し地協に集約する。

(3) このたたかいを春闘の第一波の統一行動とし、突破口とする。

各支部は、この指示に答えて藤沢製作を先頭に次々にスト権を確立した。日本ロールの仲間たちも、10・18団結大集会に続く大闘争に気の遠くなるような感動を覚えながら、オルグを強化した。

東京地本書記局の協力を得て、幻灯「もえひろがれ葛西の火」をつくり上げ、五〇ページにわたる闘争経過のパンフとともに各職場に持ち込み、膝をつき合せて、さらに深めて交流を行った。とくに、生活資金はプール制をとって、アルバイトで稼いだ金額は全額組合に入れていくこと、なかでも独身の組合員は三万円稼いでも八千円前後で耐えていること、また、スト突入当時、奥さんに大反対され夫婦別れの話しまでもち上ったが、三カ月間辛棒強く説得して、奥さんをついに変えたナマナマしい経験談が、職場の労働者の圧倒的な関心と支持を集めた。

すでに、「もえひろがれ葛西の火」の上映回数は日本ロールだけで二〇〇回を越え、延べで参加人員は五〇〇〇人を数えており、交流会にいたっては三百数十回、のべ参加人員約一万人に達しようとしている。パンフも、ガリ版刷りとはいえ一万部以上を発行した。

これら交流会、幻灯の上映運動、パンフの発行などは、たたかいを職場に広げ、日本ロール闘争に広範な労働者を動員する何よりの武器となり、あわせて全金機関の指示に答えて産業別統一闘争を下から盛り上げていく、はかり知れない力になっている。地協議長、地本争対部長をはじめとして、地協常幹は、最後の点検と激励をかねて、忙しいなかを各支部を訪れた。六〇支部のほとんどが連帯スト権を確立して、体制は文句のつけようがなかった。支部段階でも、この日のために執行部を中心に予想以上の熱のこもった奮闘がなされていた。

ある職場では、最初の大会で「ロールスト権」は、「うちだけで大変なのに、いくら日本ロールでもストを打つまで手はまわらねえよ」と否決されてしまった。しかし、ロール対策委員会に参加し、他の支部の準備の状況を聞くなかで、「自分の工場だけの条件の困難さに目をうばわれている時ではない。なんとしても「ロール必勝2・5連帯スト」に参加しなくては」と思い立ち、職場に帰って教宣活動を徹底させた。ロール闘争だけを切りはなして訴えるのではなく、春闘要求との結合をはかるように苦心した。日本ロールの仲間たちにもぎてもらい、交流する機会もつくった。

そして、再び大会を開いた。すでに、職場の空気は変わっていた。圧倒的な支持でスト権が集約され、地協の先頭に立って「2・5」連帯ストをたたかうことが決議されたのである。また、もうひとつの職場では、スト権確立の過程で、「うちの賃上げでストを打つならまだわかるが、他人の争議でストを打たれてたまるか。もし決行したら断固責任を追及する」という資本の攻撃を受けた。しかし、若い執行部は「連帯スト」の問題だけで、なんと七回におよぶ団交を開き、日本ロールの劣悪な労働条件と組織破壊の兇暴な弾圧を訴え続け、どうしても「連帯スト」の必要を説いた。

その結果、経営者までが、「経営者としても許すことのできない非人間的な行為だ」と語り、責任を追及するどころか、組合と共に日本ロールに抗議電報をうつというめざましい成果

を上げていった。

こうして、緊張のうちに明けた六四年二月五日は、大弾圧を受けながらストに突入した一年前と同様、冬の雲が重くたれていたが、事態はまったく変わっていた。泣く子もだまる勢いを示していた日本ロールの経営者をはじめ、日経連、富士製鉄、国家権力も手のだしようがなく、静まり返っていた。安保闘争以後、日本の労働者階級が、はじめてかち取る歴史的な「連帯ストライキ」は、午後一時を期して、いっせいに打ち込まれた。

日本ロール闘争本部の電話は鳴り続け、各職場からのスト成功の報せが飛び込んで来た。結果は、スト突入支部四六、時間外抗議集会八、参加人員一万人。

日本ロールの仲間たちは、飛びあがって喜んだ。暴力団になぐられながら、「全金」が「連帯スト」を打てるようになったら」と思い続けてきたその「連帯スト」が、現実となったのである。

組合運動の経験のまったくない、闘争資金と一銭も持ち合わせなかった「丸腰」の日本ロールが、全金の産業別統一闘争を軸に、第二組合、地域住民との共同闘争を発展させて、文字通り全国の争議団の先頭を切る先進部隊に成長したのである。しかし、全金はこれらの大闘争のほかに、一人一万円前後の越年資金のキャンパ、青婦協主催の「一〇〇〇人の日本ロール支援もちつき大会」、二年目の「10・18大集会」、2・5統一職場抗議集会」を組織するな

ど、連続的に日本ロール支援の連帯行動を組んでいる。

全国の仲間たちから寄せられたこれらの階級連帯の象徴ともいうべき、寄せがき、激文は四〇〇枚に達した。日本ロール正門前の空地には、金属労働者の力でできた時価十数万円の大看板がそり立っている。タテ二メートル、ヨコ一〇メートルの鉄板には、九ミリの鉄板をくりぬいて、「ドレイ職場日本ロールを労働者の力で解放しよう。三八年二月五日より三三名不当解雇スト決行中」のスローガンが大書されている。

風雨はもちろん、暴力団のどのような妨害でも倒れない、コンクリートの基礎の上にたつ大スローガンは、厚い共闘にささえられ、〃統一の核〃となった日本ロール支部そのもののよう

に、見る人を激励している。

ビルの谷間を〃昼休みデモ〃は行く

晴れわたった早春の昼休み、東京の中央区銀座裏の小公園から、一五〇人ほどのデモ隊が出発した。〃アメリカはベトナムからでいけ!〃の横幕を先頭に、〃春闘がんばろう〃〃物価値上げ反対〃などのプラカードをかざし、シュプレヒコール。

公園をでるとすぐ先に、四年にわたって企業閉鎖反対をたたかう全国一般・正路喜社労組の

たてこもる「労働者の城」がみえる。薄汚れた四階建の小さいビルだが、真紅の旗が屋上に高くひるがえり、青空にくっきりとはえている。「城」の前にさしかかると、テープ、紙ふぶきがまかれ、窓から若者たちが手を振り、シユプレヒコールの交流がはじまった。「正路喜社の仲間たち、がんばれ！」「東京放送・毎日新聞の企業閉鎖反対！」「春闘がんばろう！」「アメリカはベトナムから出ていけ！」「水道値上げ反対！」——もうたいへんな騒ぎで、警官がヤキモキしている。正路喜社労組の労組員は、もちろん隊列にも加わっていて、風雨に色あせ、ひきちぎれかけている組合旗は、デモの先頭になっている。デモが進むにつれて、あちらのビル、こちらの事務所から、仲間たちがプラカードを片手に参加して、デモは急激にふくれあがった。こうして約二〇分のデモのち、二〇〇名をこえた隊列は流れ解散して、事務服のキイパンチャー、菜っ葉服の印刷工、背広姿のサラリーマンがそれぞれ職場に帰って行った。

このデモは、正路喜社労組が地域の労組・民主団体によびかけ、中央区京橋ブロック平民共闘（平和と民主主義を守る共闘会議）の主催で行なわれた。正路喜社労組では、毎朝一時間全員討議を行なっているが、アメリカが北ベトナム爆撃をはじめたとき、ただちに抗議行動をおこすことの一環として、「昼休みデモ」のよびかけをきめた。

よびかけをうけたブロック小共闘とそこに結集する各労組、政党、民主団体は、この提案を支持し、ブロック内の主要な労組、団体を手わけしてまわり、デモの成功をかちとった。

このちいさなデモをきっかけに、開店休業状態だったブロック平民共闘は活動を再開し、物価問題はじめ、日韓、基地問題で活発にたたかいをはじめた。

これは、ほんの一例だが、地域のたたかいをつくりあげ、発展させるうえで、中央区の争議団は、重要な役割をはたしている。区平民共闘や区労協が、複雑な組織問題をかかえて、敏速に統一行動のイニシヤティブを握り得ないとき、中央区争議団共闘は、職場の労働者の要求にこたえ、必要な行動を提起してきた。この昼休みデモのすこし前にも、区全体の規模で中央区争議団共闘のよびかけによって、日韓会談粉砕の集会とデモが行なわれている。

この中央区は、銀座、日本橋をかかえる日本一の繁華街だ。独占の本社が大ビルを競い、劇場、デパートが軒を連らねている。陽が落ちると銀座一带はネオンの海となり、バー、キャバレーなど資本主義のアダ花が咲きほこる。しかし、ここにも労働者がいて、たたかいがある。争議も弾圧もある。関東六県のお台所を一手にまかなう巨大な魚市場でも、不況にあえぐ兜町の証券街にも、いかめしい銀行の建物のなか、うすぐらい印刷工場でも、首切りがだされている。冷暖房完備のビルで働く女子労働者は、事務の機械化とともに、身体をむしばまれていく。デパートにも、「合理化」——ひとべらしの攻撃があり、労働災害もある。夫婦生き別れ配転もあれば、「企業閉鎖」もある。

可能なところから統一の輪を広げて

争議組合は、地区労に結集して、争議団共闘をつくり、自分たちのたたかいを訴えながら、それぞれの部署で奮闘する方針をたてた。

それぞれの組合が、自分たちの争議の条件を生かした共闘の方針をたて、それが全体として区内の情勢を変え、勝利の条件をきりひらくという意思統一をした。自分たちのたたかいが全体のたたかいを発展させ、全体の発展が、自分たちのたたかいを有利に進め、勝利をかちとる力になることを深くつかんだ。

この中央区争議団共闘は、中央区労協の指導で東京地方争議団共闘が結成される六カ月前の六一年暮につくられ、争議団共闘の運動の原型となった。

市場、証券、印刷、商業サービス、金融、貿易と主要な区内の産業のそれぞれに、いわば都合よく争議団が配置されている。それぞれの戦線での争議団の奮闘で、争議団共闘結成以来、各分野での労働戦線の統一は大きく前進してきた。ここでは正路喜社労組（東京都中央区京橋宝町三の四）の共闘の方針を一例として紹介する。

正路喜社労組は、一九六一年一〇月三十一日——破産による企業閉鎖、全員解雇の攻撃をうけ

た。同社は老舗の広告代理店であったが、安保闘争後の高度経済成長政策の最初のシワ寄せで金融面で経営が苦しくなった。労組骨ぬきの吸収合併が提起されたが、労働協約を拒否すると主要取引先の東京放送、毎日新聞は破産による組織破壊を企てた。しかし、同労組は四階建のビルを占拠してたたかいにはいり、破産をかければ組織は壊滅すると考えたマスコミ独占の意に反してガッチリとたたかいをくんだ

争議に入ると、単産の指導と支援を受けるが、同時に地域の組合に支援してもらうため、どこでも訴えに地域——とくに地区労加盟組合を回る。正路喜社労組の場合も、カンパ、署名、行商で、地区労加盟組合を手はじめに、未加盟組合も回りだした。やがて、同盟、新産別、企業内単独従業員組合などへ訪れだした。

さすがに困難だった。労政事務所のだしている労働組合名簿を見て、シラミつぶしに訴えに行った。受付けがなかに入れず電話でとりついで断わるところ、やっとあえたとおもったら、ろくに話もきかずに、なにがしかの施こしを包んで追いかえすところなど、一〇組合回ってなるとか支援を考えてくれるのは二組合ぐらいの割合であった。

たたかいの前途は困難だった。なによりも、闘争の展望がなかった。窮乏生活にも慣れ、心配していた失業保険切れののちも、なんとかメシの食えるくそ度胸はついた。しかし、止まない雨はないというから、争議もいつか解決のメドがつくだらう。ともかく断固頑張って、なん

でもたたかってやろう」という方針では、勝利の確信がつかめるはずがない。

争議突入ご一年半。エスエス労組が勝利の和解で職場復帰をがちとり、日本信託が都労委で完勝した。この二つの勝利は、全部の争議団を激励した。正路喜社の場合も例外ではない。争議団共闘の討論集会で学んだ二つの勝利の教訓の分析をもち帰り、全員で討議した。歴史的な全員集会で夜ふけまで執行部の報告をきいたとき、全員が展望をつかんだ。文字どおり眼の前がパッと明るくなった。裸電球の下の顔は、どれも確信に満ちた笑顔で光っていた。

それから何日もかかって、二つの勝利の教訓を具体化した。その中心は自分たちの争議の条件を生かして、統一を拡大し、共闘を具体化することであった。

正路喜社争議の条件は、(1)中小企業の争議であり、独占の計画的ぶっ潰しでおこった、(2)商業・サービスの労働者の争議である。しかも、地域には組織、未組織を問わず、商業・サービスの労働者が圧倒的に多い、(3)その上、マスコミ産業の一部であり、マスコミの経済的基盤として目立たないが、重要な役割を果たしている広告の労働者である。

また、たたかいの背景は、(1)安保以後の独占集中のゴリ押しⅡ高度経済成長政策、(2)安保以降のマスコミの反動化との深い関連、としてとらえた。

ここから、どこに統一をもとめ、共闘をつくりあげるか、その統一をどの方向に発展させるか、という方針がきめられた。

まず、組織方針は、つぎのようにきまった。

第一、商業サービス、中小企業、中央区という条件から、上部単産である全国一般傘下の地域の職場との交流、共闘を強化し、共闘体制を軸とすること（全国一般東京の組織人員の五割は中央区にあり、中央区労協の組織人員の四割は全国一般の労働者）。

第二、この全国一般東京地本中部地区協を強化拡大し、中央区内の膨大な未組織商業労働者を組織するため、個人加盟の単一労組をつくりあげること。

第三、中央区内に集中している同一業種の広告労働者との共闘をつくりあげ、開店休業状態の広告労協の活動再開をもちとること。

第四、広告労協を基盤に、マスコミ共闘の結成に参加し、マスコミ各労組との共闘をうちたてること。

第五、中央区内の争議団を結集して、中央区争議団共闘を発展させ、区内労働戦線の統一と強化のため、各争議団が独自の分野で奮闘すること。

第六、とくに正路喜社周辺の京橋ブロックの強化に力をそそぎ、すべての労働組合とさまざまな段階での共闘関係をつくりあげ、着実に平和と民主主義を守る共闘会議に参加させること。

この組織方針を追求するため、全組合員を各戦線に配置し、それぞれの具体的任務と当面

の目標を明確にした。

その中で貫く、いわば政治方針は、(1)自分たちの受けた攻撃をうったえ、統一の武器にすること、(2)相手の要求をかちとるため献身的に奉仕すること、(3)可能などころから統一の条件をつくりあげていくが、目的意識的に労働者階級と勤労市民の主敵にたいする闘争へと一歩ずつ着実に組み入れること、を目標にした。

個人加盟の単一労働組合もつくる

実践してみると、ことは頭で考えていたほど簡単ではなかった。しかし、一貫してこの方針を堅持して進んだ。右へゆれ、左へゆれながらも、六つの組織方針はどれも前進して、共闘は厚くつくられてきた。

全国一般の組合との関係は、いちばん早く前進した。訴えに行っていたのが、そのうちにながながと話しをさせてくれるようになり、いわば「合理化」の講師の役割をさせられたり、テープに吹きこんで全組合員に聞かせてくれたり、組合の機関紙誌にのせるためのかなり長文の報告を依頼されたりということがはじまった。

広告の組合は、大部分が企業内単独組合だから、同一業種といってもなかなか共闘は進まな

かった。

これは広告労働者の統一の母体である関東広告労協が休業状態であったからだ。正路喜社労組は、広告担当執行委員をきめ、活動再開のため奮闘した。たんねんに広告の職場をまわり、実情の報告、調査活動もねばり強く行なって、二年がかりで正規の大会を開き、役員改選までこぎつけた。その後、広告労協は加盟組合も増加し、着実に前進をはじめた。

この場合は、相手の条件をよく考え、正路喜社労組に対する支援はあまり要請せず、もっぱら各単組のそれぞれのたたいの前進と広告労協の発展をめざして活動した。

ブロックの強化は、平和と民主主義を守る地域小共闘の活動を中心に、同盟、新産別、企業内単独組合、中立単産関係との共闘関係をつくりだす仕事にとりかかった。すでにのべたように、これは根気のいる仕事だった。署名を持って行ってダメ、行商のジュースを持って行ってダメ、もちろん原潜、日韓の統一行動では話にならない。さて、どうするかと行きづまったところへ、民主的映画の上映運動があった。あきらめながらも、行ってみたら映画のキップならというので、だんだん深く話しこめるようになったところがいくつもある。こういう経過で、今はさきにのべた「昼休みデモ」にでていくようになった組合がいくつもある。まったく闘争もせず、事実上、組合あってなきがごときところへ、賃金の資料集め、要求書の作成を手伝うことからはじめて、一步一步共闘を前進させてきた事例もある。このなかで、同盟の独占の職

場で、中国・北朝鮮や北ベトナムの映画の券が売られ、原水禁大会のカンパが集められたところさえできた。

中央区争議団共闘は、前にあげた日韓デモその他を呼びかけたり、学習会をやったり、映画の券を売ったり、分裂組合協議会をつくって系統的に分裂問題の研究と討論集会を続けたりしている。

そして、いちばん強力な共闘をつくりあげたのが、個人加盟単一労組の組織化であった。企業内組合の組織化なら、いくらも経験があったが、単一はじめてで、ずいぶんとめんくらったときがある。しかし、今では公然分会が一二分会と、ちょっとした勢力である。

いくつもつくって、いくつもつぶされたのちの一二分会である。そこには、企業内組合間の共闘——団結とは質の違う団結がある。田舎へ帰郷すれば、正路喜社労組あてにリングを送ってくれるといった個人的つながりにまで発展している。

結婚のこと、家のこと、両親のことまで、正路喜社労組に相談にくる。毎晩でも泊りにきてくれるし、いつでも法廷にきてくれる。オルグ格の正路喜社労組の組合員の結婚式に分会全員で出席して、コーラスを歌ってくれたときは、正路喜社の全員が心から喜んだ。行くえもわからぬ大海原に、櫓一丁でこぎだすような争議のなかで、つぎつぎと組織され、結集されてくる単一の仲間たちの友情は、なにものにもかえがたい心のささえになっている。

金融労働者の統一を求める尖兵として

一九六一年の春——安保闘争の激流の中で大きく成長しはじめた金融労働者は、地銀連、全損保、全相銀連など七つの金融単産を主軸として、過去五年にわたる分裂の歴史に終止符をうつべく、金融労働者の再結集をはかり、金融共闘の結成に向けてたくましく躍動していた。

金融独占は、資本主義の牙城・金融資本の足下をゆさぶるこの金融労働者の産別共闘への潮流を、だまって見すごすはずはなかった。東京における金融労働者の拠点の一つであり、また、その上部団体である全国信託銀行従業員組合連合会（金信連）の中核組合であった日本信託労働組合は、まず金融独占の攻撃の矢面に立たされた。

すでに述べてきた六一年六月に強行された日本信託労組の正副委員長解雇事件と同年一二月の組合分裂は、金融労働者の産業別結集に対する金融独占の初期的攻撃の一環として位置づけられるものであったといえる。事実、日本信託に対する弾圧政策は、その後、あいついで全国的に拠点となっていた金融労働組合に対する激しい資本の攻撃を誘発していった。地銀連東北地協の拠点・七十七銀行への分裂攻撃、全損保の拠点・東京海上火災への労働協約改悪攻撃をはじめ、主要拠点労働組合にたいする攻撃が激化していった。

金融資本の狂暴な反撃は、当然予想するところではあったが、これらの弾圧、とくに日本信託に対する不当弾圧は、金融共闘に衝撃をあたえ、たたかいの前途が容易ならぬイバラの道であることを痛感させた。

六一年の八月一日、金融共闘の前身である全国金融労組懇談会は、歴史的な「八・一一アピール」を発表し、全国六〇万の金融労働者に対して、大産業別共闘への結集を呼びかけ、大幅賃上げ、合理化反対、不当弾圧反対、独占集中の金融政策反対、平和と民主主義を守れ、など七つの諸要求をかかげてたたかいに立ち上ろうと訴えた。

また、金融共闘に対する不当な弾圧攻撃に対して、断固としてたたかう決意をあきらかにし、日本信託、七十七銀行、岩手銀行、東京信用金庫などの弾圧反対闘争に対して、支援共闘を強化する具体的な行動に立ち上った。

不当弾圧反対闘争への支援を訴える金融共闘と全信連のビラが、東京駅、神田駅、有楽町駅など東京中の主要駅頭で無数の労働者、市民の手に渡された。一〇〇〇名単位の不当弾圧反対集会が組織され、日本信託経営者に対する集団交渉、デモ行進など激しい抗議行動が展開された。これらの弾圧反対闘争は、六二年の春闘に向って着々と隊伍を強化しつつあった金融共闘の前進を支える主要な要素に転化され、発展した。

一方、日本信託の直接の上部組織である全信連は、まだ上部団体として十分な力量をもちえ

なかった当時の実態もあって、突如として発生した不当解雇事件を前に啞然たる表情をかくすことができなかった。解雇当時の全信連議長は、当時をふりかえって、「正直なところ、全く闇雲の状態というより表現の方法はない。たたかいの前途に対しても確信を持ち得なかった」といつている。

全信連としては、素朴に労働者の生活権を、かくも無惨に破壊する日本信託経営者の弾圧攻撃に対する人道的義憤を闘争支援の土台にすえる立場に立っていた。

全信連は、まず「日本信託解雇特集号」の機関紙を発行して、解雇問題の本質を傘下組合員に訴え、不当解雇による犠牲者の救援カンパを不当解雇撤回の日まで、毎月保証する決定を行なうとともに、傘下各単組の協力によって一一〇万の闘争資金カンパを直ちに日本信託労組に手渡した。この解雇発生と同時に決定された全信連の物質的支援は、その後四年間の不当解雇反対闘争を支える重要な激励となった。

不当解雇の発生直後にさしのべられた全信連、金融共闘の具体的支援を基礎にして、日本信託労働組合は「不当解雇撤回闘争」の基本路線を、「金融労働者を主軸とする広範な労働者の支援共闘を組織し、敵を孤立させる」ところにおき、東京を中心としてあらゆる金融の組合と職場に訴えのオルグに入った。

これらの訴えは、金融共闘結成に向けて積極的な活動に取組みはじめていた多数の労働組合

と労働者の共鳴と共感を集め、一、二カ月の間に、日本信託の不当解雇問題は東京のみならず全国の金融労働者に知れ渡っていった。地方銀行、損害保険、生命保険、信用金庫などの職場から続々とカンパが寄せられ、日本信託の各職場にむけて、金融労働者や地区労の仲間たちによって組織された「激励ビラ入れ」が展開された。

不当弾圧反対闘争の急速なひろがりをおそれた経営者は、悪質な分裂主義者と職制を全面的に動員して闘争を切り崩すための激しい攻撃を強化してきた。とくに、金融共闘に結集しようとしている金融労働組合に対して、アカ攻撃と中傷をくりひろげ、全信連を支援闘争の戦列から脱落させる策動がつけられた。

卒直にいった、当時の全信連は、日本信託を除いて、そのすべてが労使関係に紛争もなく、温室的組合運動の領域にとどまっていたといえる。したがって、前近代的労務政策と対決し、絶えずそれとのたたかいに明け暮れていた日本信託労働組合の運動は、全信連の中である程度の異和感を醸成していたというのが実情であった。

解雇直後、積極的な資金カンパなどの支援体制をとったとはいえ、全信連内部には、発展し強化されていく広範な支援共闘のうねりを不安と動揺のまなざしで見守る弱さをぬぐいきれていなかった。

日本信託労組は、全信連に内在するこのような弱点を厳密に理解しながらも、日本信託に加

えられた弾圧政策が、全信連をはじめとする金融労働者全体に向けられた攻撃であることを明らかにし、全信連の団結と統一を強化することの必要を一貫して訴えつづけた。日本信託という労働組合のたたかいを勝利させるという利己的観点からではなく、全信連の団結と統一の強化という立場から全信連の機関討議に参加し、支援共闘を訴えたのである。

このような訴えと討議の積み重ねは、不当解雇という思いがけない重荷を背負ってたたかいの戦列に加わった全信連の姿勢を、静かに変化させる底流ともなった。折から、歴史的な金融共闘による統一賃上げ闘争が大規模に提案されている情勢の下で、全信連内部には、統一賃上げ闘争への参加をめぐって真剣な討論が展開されていた。金融労働者の大産別共闘をひたむきに追求してきた日本信託労働組合は、終始統一賃上げ闘争の必要を強調する立場にたって奮闘した。

静かに着実に前進する支援共闘

一九六二年の春、全信連は金融共闘とともに、結成以来はじめての統一賃上げ闘争を組織する決定をおこない、不当解雇反対闘争を産業別統一闘争で包む体制へと進んでいった。

全信連指導部のこのような運動路線の発展は、従来、幹部間の交流だけにとどまっていた全

信連を、職場の組合員の団結に基礎をおく上部組織の方向に歩一歩と近づかせていった。統一情宣活動が活発化し、婦人部を中心とする職場組合員の交流が高まり、各組合間の相互ビラ入れが組織されるまでになった。そして、これらの活動には、日本信託の不当解雇撤回の要求が固く結合してたたかわれた。

このような全信連の成長過程を通じ、日本信託労働組合は解雇闘争を一貫して全信連の強化と金融労働者の統一拡大のたたかいとしてとらえ、全力を投入し、情熱をかたむけてたたかいをつづけた。また、統一賃上げ闘争には、分裂少数組合の重みを克服し、スト権を立てて産業別共闘に参加し、日本信託の分裂を利用した信託銀行労働者の労働条件の切り下げにねばり強く抵抗するたたかいを組織し、*「縁の下」*の力持ち^々的役割を産業別共同闘争の中で自発的に受けもった。

そして、六三年四月、東京都労委における組合側の全面的勝利をかちとったのだった。これは、全信連の支援共闘を、さらに確信にみちた姿勢に転化させた。

「全信連の強化は、日本信託の解雇反対闘争の前進と共にあった。日本信託のたたかいは、全信連そのもののたたかいである」——日本信託闘争に対する全信連の評価は、大きく変化していたのである。

法廷闘争が中労委に移され、組合側の立証に入ると、全信連は冒頭の組合側証人として桑島

議長を法廷に送り、立証活動において、決定的ともいえる冒頭陳述を行なうことによって、その並々ならぬ決意をしめした。

金融共闘の支援も、春闘を中心にした数限りない統一行動の中で、不当解雇反対闘争への執拗な支援共闘を金融の広範な労働者の中へ浸透させていった。中労委の組合側立証の最後をかざった上田金融共闘議長の証言は、何人もおかすことのできない迫力と決意で法廷を威圧し、金融労働者の戦闘的連帯の勝利を高々と打ち鳴らしたのである。

解雇発生以来、数十波を数えるストライキ、おびただしい情宣活動、無数のオルグ、話し合い、リボン、腕章、ステッカー、ビラまきなど他面的な職場闘争。そして、過去四〇回開かれた審問に対する画期的な大量動員、資本の弾圧政策をかん^ふぶ^ふなきまでに暴露した立証活動、六万をこえる署名ハガキ、三〇〇〇を上回る労働組合の公正審理要請書の集中、前後幾十回にわたる要請団の真実の叫びなど、丸四年のたたかいの蓄積は、中労委を部厚く包み、首切りを強行した資本にそのたたかいの重さを知らしめた。

そして、中労委の裁定を目前にした六五年の六月、全信連中央委員会とは日本信託闘争について不退転の決意を明らかにする決定を行なった。中労委での組合の優位は、もはや動かしがたいものではあるが、最近における労働委員会の反動化と日本信託問題に対する日経連、三菱独占、大蔵省などの激しい圧力を懸念し、万一の中労委敗訴を前提とした全信連の基本的方針を

討議したのだった。中央委員会は、「中労委の勝敗に関係なく、全信連は日本信託労組のある限り、支援共闘の強化を追求する」ことをきめた。

日本信託の中央委員は、胸にこたえるこの決定の意義をかみしめながら心で泣いていた。全信連は、日本信託問題を自分自身の問題として、全信連の運命をかけるたたかいとしてとらえる立場を鮮明にしたのである。静かに、着実に進む産業別支援共闘に包まれて、日本信託の不当解雇撤回闘争は六五年八月、中労委で全面的な勝利をかちとった。「統一の思想」は、新しい巨大な成果によって、あらためてその正しさを立証したのである。

統一をさらに前進させるために

「統一、そこに勝利がある」というかつての日炭高松のスローガンは、いまでも生きている。

統一の中心は、もちろん労働者階級である。その労働者の統一の中軸が、産業別統一であり、これを柱に地域的統一が組まれる。ここに紹介した日本ロール、日本信託の経験は、一貫して産業別統一闘争を柱に、統一を追求すれば、どのようにに大きな成果をあげ得るかを証明している。

「日本中が争議団」の章であきらかにしたように、労働者が統一する客観的条件は、ますます成熟してきている。巨大な統一のために、共通の要求でたたかいを組織することが、争議団

のゆるぎない戦略路線になってきている。

そこには、いくつかの困難があるが、必ず克服できるし、「連帯スト」さえやれることが明らかになった。全国金属とロールの場合だからできたということではない。外国銀行従業員組合連合会でも、マーカンタイル銀行の仲間に加えられた退職金制度改悪の攻撃にたいして、一年以上にわたり二〇波をこえる連帯ストを波状的に打って、ついに勝利した。

このような連帯行動は、争議団を励まし、そのたたかいを前進させるだけでなく、連帯にたち上った労働者と組織を強化する。現に、〃2・5連帯スト〃をかちとった全金東部地協が、六四年春闘で東京地本のなかで最高の賃上げをかちとっている。

これは、経済闘争と権利擁護闘争の深い相互関係をあきらかにしている。他人の首を心配しないような組合は、ゼ、ニ、もとれないということであろう。

ここでは、各単産、各地方で争議団を支える産業別統一闘争と地域共闘が日程にのぼり、発展するように、いくつかの教訓を整理する。

その第一は、攻撃を受けた争議団が「他力本願」にならず、どんな困難に直面しても、たたかう旗を守ることである。そして、争議団のおかれた具体的状況の正確な分析にもとづく正しい統一の方針が必要とされる。なぜなら、巨大な統一闘争は、どこか遠くからやってくる闘争ではなく、たたかいの現場から芽生え、発展する闘争だからである。敵に打撃を与え、味方の

戦列を強化する上で、最も必要な統一の中心はどこか、当面早急に組織すべき共闘がどれで、長期の観点にたつて組織する部隊はどこか、を明確にする必要がある。

第二は、このような争議団のたたかいを生かす単産の指導と援助である。上部機関の、密な計画にもとづく、目的意識的な指導は大きな比重をもつ。たたかいは、広げただけでは力にならない。成果を結集し、さらに広げ、再び結集するという指導の責任を上部機関は立派に果たさなくてはならない。

第三は、共闘の発展も、その基礎は職場要求にあるということ。ロールの「2・5連帯スト」成功の一つの条件は、それが春闘の時期と重なっているということである。これは、個別要求と共通の要求の関係をよく示している。争議団は、この関係を正しくつかみ、たたかいの中で結合する努力をしなければならない。しかも、決して焦らず、十分準備の期間を置くことが大切である。

第四は、職場オルグと上部機関の幹部、他労組の幹部との団結の問題である。共闘発展の成否にぎり、産業別統一闘争を指導するのは、明らかに上部の幹部、オルグおよび単組の指導部である。しかし、その力は職場の労働者が握っている。したがって、争議団は、第一に職場の労働者へのオルグ活動を幻灯、パンフなどの武器を駆使して、徹底して強化しなければならない。職場にある力をひきだすことが、あらゆる闘争の土台だからである。しかし、同時に上

部の幹部、他労組の幹部とも團結することを忘れてはならない。争議団のなかには、一時的にせよ幹部やオルグへの不信感が生まれることが、しばしばある。争議団に困難があるのは当然なのだが、その原因を正しく掴まず、上部へのもたれかかりの裏返しとしてでてくる。しかし、上部の幹部やオルグともなれば、「お前のところの争議は敗けた方がいい」などと考えるものはひとりもない。力を入れようと評価の違いはあっても、ともかく争議のなりゆきを心配してくれているのである。要は、争議団の主体性と統一の客観的な可能性にたいする確信の問題である。

第五は、原則的で柔軟性にとんだ工作态度を一貫して堅持する問題である。日本ロールが、まず暴力弾圧反対で訴え、その後、ドレイ職場解放、三三名解雇撤回の要求を各職場へ入れて、共闘に結集した過程は、深い教訓を示している。正路喜社が、中立労連や全労系の労組を共闘にひきこむ経過も同様の教訓を示している。相手が受け入れやすいように、あせらず節度をもって問題提起する必要がある。たたかいを訴える場合も、争議団の特権的な武器ともいうべきたたかいの苦労話を忘れてはならない。それは、広範な労働者を結集するのに大いに役立つ。

第六は、たたかう労働者にふさわしい活動態度の問題である。多少経験を積んだからといって、横柄になったり、傲慢になってはいけない。まして、「俺たちだけがやってきた」などと

いうお山の大将的思想は、共闘をせばめ、統一の可能性を摘みとってしまふ。

つぎにのべる他階層の人びとの統一の場合は、とくにそうである。その点、他階層との共闘に真剣にとりくむことは、労働者のなかでの統一をつくりあげるうえでも大いに役にたつであらう。

暴力団追放署名から地域住民闘争へ

半農、半漁を中心とした保守的な地域を変えて、住民との共闘に成功し、一大戦力を築き上げた日本ロールでも、たたかいの初期は「被害者意識」が濃厚だった。

連日、一〇名もの負傷者をだす暴力団の攻撃を受けていた頃、暴力団追放署名が地域から圧倒的な支持が得られるものと思ひ込んで、勇んで闘争本部を飛びでて行った若い組合員は、ものの一時間とたたぬうちに、しょげ込んで帰ってきた。

「こんなに俺たちがやられているのに、どうして親父が留守だなんていって署名してくれないのだろう」

「すぐやってくれたのは、暴力事件を目の前で見ているごく近所の人たちだけだよ」

「この辺の人たちは遅れているよ。署名するのをこわがってるもん。訴えたってしょうがねえよ」

「あの角の家では、＼あんたたち働きたくないからストをやってんでしょ。近所じゃ共産党だって評判よ＼なんていやがんの。完全に会社の宣伝にのってるよ」

日本ロールの仲間たちは、いくらか記入されていない暴力団追放の署名簿をにぎりしめながら、真剣な討論を続けた。

そして、どうにか「俺たち労働者が不平・不満や要求を持つように、地域の人たちも貧乏人なら必ず生活の不安や悩みをもっているに違いない。俺たちはこの点を忘れていたんじゃないだろうか」というところまでたどりつくことができた。

ところが組合員の間には、「俺たちは三三名の首切りでたたかってんだ。町のことなど関係ねえじゃねえか」「そんなあまちょろいことじゃ、争議は負けちゃうぞ」という強い反対論がわき起った。

しかし、ひとたび正しいと思ひ込んだらなんでもやって見ることだ。

それまで、資本家の無慈悲な仕打ちや、警察、暴力団の暴力弾圧を連日伝えていたビラが、＼日常生活のなかで困っていることはありませんか。町会や区会に要求したいことはありますか。＼という要求をひきだすアンケートに変わっていった。しかし、組合員は、こんなことぐ

らいで地域住民と結びつくことができるのかどうか、また、集めた要求が実際にかち取れるのかどうか、まったく半信半疑で再び地域へ散っていった。

こうして、江戸川区葛西の町に「赤ハチマキ」姿の「不平不満屋」が飛んで歩くようになった。

ところが、見ず知らずの家を訪れるのは大変勇気がいる。いきなり、「こんにちわ。全金の組合からきました、何か不満はありませんか」というわけにもいかず、なかにはあまりの辛さにアンケートに自分が適当に書き込んでくるもの、玄関の表札だけを見て自分で署名、拇印までおして知らぬ顔でもどってくるもの、ひどいになるとビラまきの統一行動を組んでも、持ったビラを人影のないところでまとめて川に投げ込んで、野原で昼寝をむさぼり、ころを見はからって組合にもどり、すまし顔で総括会議に参加するという組合員なども現われて、大変な騒ぎになった。

しかし、運動は見違えるように生き生きとなり、前進し始めた。百数十枚のアンケートが回収され、一〇〇を超える要求が結集された。

日本ロールの仲間たちは勇気づき、これらの要求を地域的な条件を考慮して、「街灯をふやせ」「保育所をつくれ」「道路を直せ」「夏でも水のでる水道にせよ」「区民税を下げる」の五つにまとめて、再び地域へ返した。

ここまでくれば、もうしめたものだ。なんとなく、地域と結びつけるような感じがしてくる。

五つの要求署名は、地域から圧倒的な支持を受け、六三年七月から翌年の一月にかけて二〇〇名の署名を集めた。区議会に請願した後は、社会党、共産党の議員の力もかりて大衆を動員し、がむしゃらに圧力をかけた。そして、秋には早くも成果が現われた。自民党の区議会議員をだしても実現しなかった「保育所の建設」がはじまり、夜になったら女性の歩けなかった葛西の町に「街灯」がついた。

地域の人たちは、この成果を見て、真っ先に「全金の組合のて等（ものたち）がやってくれた」と評価し、「なかなかいいことをやる。若いのに感心だよ。町のためにもなる連中だ」「自分のところだけで大変なのに、町のことまでやってくれる」と日本ロール争議団に対する見方を変えはじめた。そのなかには「全金は「アカ」だ。働きたくないのでストをやっている」とかげぐちをきき、暴力団追放署名には冷めた態度をとった人たちも、もちろんふくまれていた。

さらに、この要求をたたかい取る闘争のなかで、日本ロールの企業拡張にともなう土地の買収の際に、経営者が悪い買いたたきをやって、地域の農民から激しい憎しみをかっていることを日本ロールの仲間たちは掴んだのである。

あわてたのは会社側だ。「俺はクリスチャンだから、日本の祭りは関係がない」といって、今迄一度もだしたことのなかった町会への寄附を一度に五〇万円もはずんだり、やったこともない映画と講演の夕べを開催しても、それはもう手遅れだった。

日本ロールの仲間たちは、農民から憎まれている敵の弱点を突いて、地域住民の間へどんどん入って味方を拡大した。さらに、「工場公害」「〇〇町の道路を直せ」などのたたかいと共に、「脱脂ミルク反対」「固定資産税評価替え反対」などの全国的な課題も幅広く進めている。また、これらのたたかいのなかで二〇〇〇部を越える「町民新聞」まで発行している。

平和盆踊りに八〇〇〇人の老若男女

富士電機の子会社乗っ取りにともなう「計画倒産」とたたかう板橋区の東京発動機の仲間たちも地域住民との共闘を創造的に発展させている。

附近の人たちは、門前に林立する赤旗とせわしげに出入りする組合員、支援団体の人たちで物情騒然たる工場附近で「こんなデカイ会社でもつぶれるのだからねえ」とうわさし、はりだされた闘争宣言に食い入るように見入っていた。東発の「倒産」は組合員ばかりでなく、地域の人たちにとってもいい知れぬ不安とショックをあたえた大事件だった。

東発の仲間たちはたたかう方向をさがし求めた。そして他の争議団のよい面を学び取り、ただちに実践に移した。

「地域住民と結びつく」方向が確認され、工場にたてこもるだけでなく、地域へオルグをだすことになった。東発の仲間たちの脳裏には、地域住民と結合して発展する日本ロール闘争が焼きついていたのである。

手はじめに、独占資本・富士電機の東発乗っ取りの野望と「計画倒産」の残酷な実態を暴露したビラを配布した。そして長期化を予想して闘争資金カンパを訴えた。

この訴えは、町内に思いのほか反響を呼び、毎日のように商店や附近の知り合いから一〇〇〇円、二〇〇〇円のカンパがとどけられた。なかには、以前に会社重役から「会社にくる時は東発のオートバイでこい」とムリヤリ車を買わされたという、出入りのソバ屋さんのように、米一俵をとどけてくれる人もあり、組合員を感激させた。

はじめは、恥しさが先に立って気乗りのしなかった団地への野菜、お菓子之行商も、闘争の宣伝活動と結合させて成功し、町の名物と評判されるほど人気を取った。

しかも、この行商活動は自民党内閣の強行する「農業構造改善」事業の悲惨さを身をもって知るまたとない機会になった。

埼玉県の農婦は、「ただでやるから自分で取って行ってくれ、なまじ手をかけてもガソリン

代にもならねえから、そのままにして置くんだよ」と浮かぬ顔で語ってくれた。野菜を仕入れに行った組合員は、「生活をぶちこわされているのは俺たち労働者だけではない」と今さらのようにおどろき、「これでは、農民の〃企業閉鎖、全員解雇〃だ」と組合に報告した。

第一〇回原水禁世界大会の成功をめざす〃平和盆踊り〃といえ、若い活動家の集まる小規模の盆踊りを想像させるが、東発の仲間たちの主催した盆踊りは老若男女を一度に二〇〇〇人も結集し、〃健全で楽しい盆踊り〃をとという町内の要求を存分に満たす壮大な盆踊りであった。しかも経費はすべて町内からの寄附でまかなわれ、夏の夜を四日間にあつて八〇〇〇人を結集した。まさに、幾重にも広がった人の輪は、独占資本・富士電機の〃計画倒産〃とたたかう東発の労働者と地域住民との団結の〃和〃であり、打ち鳴らすヤグラ太鼓は夜空にとどろく東発労働者の雄叫びだったということができよう。

最後の日には町会長までが参加し、「町会でやると金がかかるし、なかなか実行がむずかしい。こんなに盛大にやってくれたので、子供たちも喜んでゐる。町のお祭りの時もひとつ頼みますよ」と東発の仲間たちにお礼を述べて行ったほどである。

それだけではない。東発の仲間たちはこれらの地域住民との結びつきを強化する活動の成果を「東発の労働者と無担保債権者を救済せよ」の署名に結集させた。それは、富士電機の〃計

画倒産〃によって総額三〇億円の債権を煙りの如く消されようとしていた一〇〇〇を越える中小下請企業家を結集する重要なたたかいだったが、町内からも圧倒的な支持を受け、なんと一週間で一万名の署名が集められた。この署名運動は自民党議員もふくめて、板橋区議会で満場一致調査して善処する決議を行なわせ、富士電機・金成社長を国会で喚問する原動力になったのである。

さらに、新潟地震には、いち早く地域へ宣伝カーを入れて物資のカンパを訴え、大型トラックを満載にして現地へ急行し、帰京後は写真ビラで実情を訴え、保守政治の〃ゆがみ〃を暴露しつつ、新潟地震の真実を明らかにし、地域の人たちから大変感謝されている。

三協紙器、日本ロールの仲間たちが切り開いてきた地域住民との団結の道を、東莞の仲間たちは一層スピーディーに、そして大胆に突き進んだのである。

〃労働〃は他階層を結ぶ最大の武器

こうして、首を切られたり、企業をつぶされた争議団は自分たちだけの要求にしがみつくてクトを反省して、地域住民や他階層の生活と要求に関心を寄せ一層目的意識的にたたかいを起すようになる。たたかいが前進している争議団は地域に知り合いがふえ、道で会っても、あい

さつをかわす人が日ごとに多くなる。ここまですれば、首を切られている不安や、企業倒産のさびしさはもうなくなる。地域が味方なのだ。

しかし、争議団がより広範な地域住民と結びつくには、「さらに生活のなかに深く入って、感情的にも団結する」必要がある

労働者と農民、商人など他階層を結ぶ最大のものは、〃労働する〃ことである。労働者とはとより、農民も労働することのなかに人間としての誇りや喜び、苦しみや怒りを覚えるのだ。だから、たたかう労働者はこの最大の共通点をたたかいの武器に変えなければならぬ。田植え、稲刈りから引越しの手伝い、日曜大工にいたるまで、相手が困っていると見たら損得抜きで一生懸命手伝うことだ。そして合間にお互いの生活を交流するのだ。

しかし、オルグやアルバイトで疲れたからだはなかなかいうことをきかないし、職業安定所ではないから、手伝い仕事を見つけないのです。たまたまかである。

日本ロールの仲間たちも苦心した。

組合員「こんにちは、おじさん稲刈りを手伝わせてくれませんか」

農民「うん！ なに？」

組合員「日本ロールの組合のものです、稲刈りをやらせてください」

農民「いやいや、やってくれんでもいい、イシ（お前の意）ら、しろうとにやられたら余計

迷惑だ」

組合員「俺はおじさん、これでも百姓のせがれですよ」

農民「そうにも見えねえが、故郷はどこだべえ」

組合員「信州です。すこしはおじさんを助けることもできますよ」

農民「いや、会社のテラ（者）には無理だべ。百姓というものは、今、この仕事が終わらなければあした、あさってと一〇〇日だって働いてやっと稲を刈り入れるんだ、イシら勤め人にはできん。頭数そろえええというもんでねえからなあ、それにわしら人を頼むほど田もねえし金もねえ」

組合員「いいえ、金はいりません」

農民「金いらねえと、いまだき金をとらねえで働くアホがいるか」

組合員「本当ですよ、おじさん。——ところでこのできじゃ、反当り五俵ってところでしよう」

農民「まあ五、六俵とればいい方だべなあ、イシはそんなに稲刈りしてえか」

組合員「ええ、やりたいです」

農民「そんならやって見ろ」

こんなやりとりが江戸川区葛西の町のあっちこっちで行なわれ、やっとのことで、鎌を手に

田んぼにおりることができた。あとは夢中だ。ギンギンいう腰をたたきながら、あやしげな手つきで鎌をふるう。合間には相手の生活の様子を聞き、世間話しに花をさかせる。やがて〓地域と結びつくため、稲刈りを募集します〓のはり紙が闘争本部にはられ、日曜日などには集団ででかけるようになる。

ところが、うまいことばかりは続かない。一日目はなんとか手伝ったが、二日目は慣れない仕事につかれて、サボってしまつて評判をおとしたり、でかけてものの二〇分とたたぬうちに稲ならぬ自分の指を刈って病院にかけ込み、四針も縫うなど、その苦労は大変なものだ。そればかりか、日本ロールの仲間たちは夏の暑いさかりに真黒に陽やけしながら、土地埋立ての土方を三カ月間にわたって手伝い続けた。

しかし、地域の人達は、この日本ロールの仲間たちのまじめな働きぶりを見て、さらに態度を変えてきた。

ある農民は「わしはイシらがストライキに入ってから、今日までイシらを〓アカ〓〓アカ〓〓と思って、とんでもねえ怠け者だと思っていた。町のもので、ヤツラはなかなかやるし、まじめだというものもいたが、わしは信じなかった。とにかく今日からイシらを信じる。運之助（日本ロール社長）はとんでもねえ野郎だ。俺たちもあいつには恨みがある。今度何かあったらすぐ相談しよう」と素直に反省し、日本ロール闘争に一肌ぬぐことを約束してくれている。

また、もうひとりの農民も、「はじめ、勤め人に稲刈りができるもんかと思っていたが、いや、たいしたもんだ。勤め人も大変だべ」と古い知り合いにでも接するように親しみを込めて話しかけてくれた。

全く感激である。苦労は無駄ではなかった。ここにも労働者の果たさなくてはならない仕事を発見したようで、展望が開けてきた。町のどこを歩いても日本ロールの人氣は上々だ。ひとりでも多くの味方がほしくて、地域ヘビラをまいた時とは雲泥の差である。今では、日本ロールへ地域の人たちから稲刈りや引越し、土運びの仕事を頼みにくるようになっていく。

地域住民からの「巨大な贈りもの」

争議団が「被害者意識」を克服して地域の要求を組織し、労働を通じてさらに住民との結びつきが強化されるまでになると、逆に争議団を支える力が町のなかに生まれてくる。

六四年二月八日、自由法曹団の弁護士さんたちが、組合幹部と共に一〇〇名を越える大部隊で日本ロールの現地を訪れた。

この交流会で「全金の組合に何かいうことはありませんか」という質問に、地域のおばさんたちが真剣に「日本ロールの組合に何もいうことはない。ただ、一日も早く勝ってほしいと願

っています。勝った時には、この辺のものたちで赤飯をたいてお祝いすることになっているので、もっと応援してやってください。早く若いものたちに赤飯を食べさせてやりたいから」と訴えてくれた。

そればかりか、なかには「あんたたち、何まごまごしてんだい。もっと一生懸命応援しないと、日本ロールは負けちゃうよ」と懸命に喰ってかかるおばさんまで現われた。居合せた弁護士さんと組合幹部は思わず、感動で声をつまらせずにはいられなかった。なかには、涙をながしながら「これだけ地域と結びついている日本ロールは絶対に勝てる。いろいろ日本ロールに対する批判もないわけではないが、連帯ストライキの体制を組んで勝たせて見せる」と固い決意を語る組合幹部もあった。

日本ロールの仲間たちは、この時の感激をどういい現わしてよいのかとまどいながら、「こんなにも俺たちのことを心配してくれているのかと思ったら涙がでてきた」と語っている。

また、闘争本部前の煙草屋さんのおばさんも口癖のように、「青木運之助くらい悪い奴はこの世にいない。だから、あんたたちが勝ったら〃日の丸〃を上げるんだ。それを見るまでは、とても死ねないよ」と話している。おそらく、その時の〃日の丸〃はどんな赤旗よりもさらに素晴らしいものに見えるに違いないであろう。

しかし、日本ロール争議団は、これらの活動のなかで、もっと巨大な贈り物を地域住民から

受けている。

会社正門前の五〇〇坪の土地は争議に突入してから、近所のKさんが、会社、警察、暴力団の圧力をはねのけて、組合のために、わざわざハス田を埋立ててくれたものである。三〇〇〇人の決起集会も、一〇〇〇人もの団結もちつき大会も、町ぐるみの盆踊りもすべてこの広場で行なわれてきた。そればかりではない。おどろいたことに「闘争するのに金が足りなければ、工場でも作れ」と巨額な工場建設資金の援助まで申しでてくれたのである。「全金工場」はすでに会社正門前に実現し、二〇人ほどの日本ロールの仲間たちが連日鉄板の音を響かせている。これでは、敵がばくだいな金をだして暴力団を雇い、全金組合員を工場からたたきだしてもなんの効果もない。「全金はつぶれるどころか、やる気十分だ。地域を味方につけさせたのは、大失敗だった」と嘆くことしきりである。

さらに、現在使用しているそれぞれ六坪前後の闘争本部、集会所、食堂の三つの建物も近所のTさん、Kさんの援助によるものである。

こうして組合結成間もなく、「丸腰」で工場を追いだされた日本ロールは、地域住民との共闘を発展させ、町を変えながら、その力で会社正門前にしっかりと陣地を築くことに成功したのである。

まさに、敵は地域から孤立し、逆に日本ロールは味方をふやして戦力を豊かにした。選挙の

たびに共産党、社会党の票がのびるのも、これらの活動の成果であることはいうまでもない。

〃裁判長さんお花をどうぞ〃

私教連の労働者は、独自の共闘をつくりあげて、解雇反対闘争を有利に前進させ、いくつもの勝利をかちとってきた。それは、生徒、父兄、卒業生との共闘である。

一九六三年晩秋、東京地裁のうすぎたないレンガの建物は、時ならぬ春めいた雰囲気ではじめいていた。実践女子学園と文園学園の女学生が、不当に解雇された先生を教壇に復帰させてくださいと、連日五〇名から最高五〇〇名という大動員で、地裁の建物を埋めつくし、取り囲んだのである。

生徒たちの裁判所にたいするたたかいは、時に激しく、時に柔軟で、裁判所側も文句をつけるスキはなかった。それは、集団の中から生みだされた戦術だった。たたかいの各段階で学級討議を組織し、裁判官に面会に行くにも、全体の代表数名にするか、各学級代表にするか、あるいは全力動員にするかなど、戦術を全体で討議して、ねばり強くたたかいを持続した。ひとりひとりの生徒はかわいい少女であっても、その統一された行動の力は、おそろしく強靱であった。理事者側とも鋭く対決した。ホームルームの時間に説得にきた校長を質問攻めで立往生

させたことから、暴力団のピケを破って教師の入校を守ったり、解雇された教師のあとに非組合員の教師が担当につけられたところ、学年末までついにその担当教師をボイコットし続けたなど、すばらしいたたかいを組織した。

この生徒たちの団結は、ある場合には教師集団Ⅱ教組の労働者よりはるかに強い社会的説得力を発揮した。教師たちのはたらきかけとともに、生徒の団結が中心になって、共闘は父兄、卒業生へと伸びていった。

家庭や職場では、封建的な暴君だったり、利潤の追求に苛酷な経営者である父兄でも、子供の教育は民主的にやってもらいたいという要求をもっている。

こうして、保守党の政治家、経営者、宗教家、文化人など各層の人びとを含んだ文字どおり幅広い共闘ができあがった。なかには、子供の要求を支持して共闘に参加した父が、家庭生活でもだんだん民主的な父になったなど、さまざまのエピソードも生まれた。

生徒の団結を中心にできた幅広い共闘は潮のように底知れぬ力をもって理事者を孤立させ、裁判所を包み、柔軟にその首ねっこをおさえ、文闘、実践ともに立入り禁止仮処分では勝利的和解をかちとり、身分保全仮処分でも勝訴判決を得た。

生徒たちの波状的な攻撃と、大人の胸を揺がす真実の叫びにうちまかされた裁判官は、「子役を出すな。俺は芝居でも子役に弱いんだ」と言った。この発言は権力の側の弱点をはっきり

告白している。が、同時に生徒⇨子供と教師の運動にたいする一定のゆがんだ見解が示されている。

それは、生徒はまだ成人していないから、十分に事態を自分で観察判断できないが、教師の「扇動」で言いなりに動いているのだ、という考え方である。これは、一般の人も、社会通念のようにそう考えていることが多い。

しかし、学園の民主化と正しい学習の権利をまもるという、自分たちの要求にねざして、教師の解雇撤回闘争に立上った生徒たちの示した驚くような創造性は、生徒を生きた人間でロボットではないということを、事実をもって証明した。

自分たちの要請行動を、「教師がなにもわからぬ子供を大勢つれだして、数でおどし、圧力をかけ、いやがらせをやる」というふうに裁判官が曲解しているらしいのに気づいた実践女子学園の生徒たちは、じっくり討議をした。その上で、ある日、数名の代表が、大きな花束をもって裁判官に面会に行った。

「裁判長さん、お花をどうぞ」と差だして、自分たちの学習は民主的でなければならいこと、そのためには学園の民主主義を守り、解雇された先生に一日も早く教壇に復帰してもらわねばならぬこと、自分たちが要求しているのは、正義と民主主義にほかならないことを、静かに語り、「今日は、いつもうす暗い裁判所をすこしでも明るく和やかにすれば、きっと珠玉の

真実も発見されやすくなると思って花束をもってきました」とつけ加えて帰っていった。

自主的な集団討議でなにをなすべきかを決め、行動の中で真実を明らかにし、連帯することの力と意義を理解できる生徒を育てることが、民主的なたたかう教師の最大の目的だ。このような教育を求めてたがったため、教師たちは解雇されたのだった。

ところが、敵権力がもっとも嫌い、たたかう教師がどうやって実践すればよいか悩んでいたこの生徒の自主的な団結と行動が教師の解雇反対運動のなかで、全体のたたかいとして実現し、花をひらいたのである。

理事者や裁判官や商業ジャーナリズムが、したり顔で何を言おうと、生徒たちは、これから自分たちが必要とおもえば、裁判所へも警察へも、どんどんかけていくであろう。

裁判官が軽蔑をこめていった、これら「子役」の生徒たちこそ、実は魂の教育の場における「主役」であり、日本の未来をきり開く主人公であることを、権力はやがて痛いほどおもう知らされるであろう。

大切なたたかう労働者の姿勢

日本ロール、東発の仲間たちのたたかいからみて、たたかう労働者が他階層の人びと、地域

住民と結合するには次の点に注意することがどうしても必要である。

第一は、「やられているので助けてください」という受け身の態度や、自分の要求だけにしがみつくとセクト主義を徹底して改めることである。そして、歴史の主人公である労働者階級らしく、ど根性をすえて困難に耐えつつ、地域住民の要求を掘り起して、争議団みずからその立場に立ってたたかうことだ。そうしなければ、先進部隊の争議団は逆に地域から孤立させられる危険性がある。

第二は、感情的な団結を重視するということだ。争議団は「労働」という最大の共通点を「武器」に変えなくてはならない。「争議団は地域の労働者と住民の日常的な利益の守り手」という思想は、これらのたたかいのなかでこそ本ものになる。いい変えれば、労働者階級の歴史的な使命と役割、その指導性が自覚されるのである。

第三は、争議団が他階層や地域住民と団結する客観的な条件が強まっているということだ。物価問題だけをとてもそれは明らかである。日本ロールや東莞の仲間たちは地道な活動でその条件を生かしたにすぎない。だから、他階層や地域住民との団結の可能性はすべてたたかう労働者の姿勢にかかっているといえる。

第四は調査問題である。地域には必ずボスが存在し、利害関係も複雑だから、たたかいながら階級構成などの調査を深めなければならない。そして、争議団は「町の未来像」ともいうべ

きたたかいの長期計画、政策をたてる必要がある。

最後は、いつまでも労働者の側で要求を〃解決してやっている〃ことは、運動を持続的に発展させないということだ。可能な限り、たたかいに参加した人たちをその階層にふさわしい組織に加盟させて、みずからたたかう立場に立つよう援助することが大切である。

守る会

ひとりぼっちのたたかいから

「なんである、アイデアル、いうことなし」——これだけ聞けば、誰もが「洋傘」のテレビ・コマーシャルであることを思いだす。

一九五四年——「回転ダボ」（折たたみ傘の自動装置）の特許で洋傘界に革命を起こし、わずかな期間に五階建ビル（金館コンベア・システムで装備）をたて、すさまじい勢いで業界に進出し、市場を独占した「丸定商店」（東京都台東区三筋町一の一）こそ、その宣伝元である。

資本金は五二〇〇万円。三〇社をこえる下請零細企業を系列支配し、洋傘の月産一二〇万本。日本はおろか世界最高をほこる生産量であり、売上げ高も月なんと三〇億円。丸定商店は

文字通り「洋傘独占」である。しかし、資本主義は一つの新案特許の発明だけでは企業の発展を許そうとはしない。そこには、冷酷な資本主義の法則がむきだしにされ、むごいまでの搾取と収奪の年月が、黒い爪あとを残して企業の躍進を押し進めてきた。

「アイデアル」の製造元「丸定商店」も、その例外ではなかった。底なしの低賃金と人権無視の労働条件を唯一最大の根拠として、今日の業績を築き上げてきたのである。

二〇歳の労働者の賃金が一万二〇〇〇円。トラックの運転手で七年勤続の労働者が一万五〇〇〇円。加えて、婦人労働者のトイレの時間までストップ・ウォッチで計り、「お前はトイレが長いぞ」とおどかすのだから、職場の実態はおよそ想像がつこうというものである。

定時制高校に通う奥田少年が、不当にも解雇されたのは、この劣悪な労働条件を改善するため労働組合結成のうごきが職場の片すみでくすぶりはじめた一九六四年四月七日のことであった。

それは、(1)会社の一般的な諸規則を守らない、(2)不良品を良品にまぜた、(3)作業靴をはけと命じてもはかない、というなんとも貧弱な解雇理由であった。それも、解雇通告を受けて入構を拒否されてから、なんと一〇日以上もたってから口頭で聞かされる有様だった。

奥田少年は、怒りに身をふるわせた。そして、「なんとしても工場に入る」決意を固めた。それから毎朝、一七才の奥田少年と数人の職制、守衛の「入れる」「入れない」の押し問答が

続いた。しかし、労働組合もない工場でひとりぼっちにされてしまった彼に就労できるはずがない。だが、彼はあきらめなかった。

工場正門前に立ちつくし、出入する職制に抗議を続け、労働者には「理由なき解雇」の不当さを訴えた。しかし、会社の目の光るところでは、仲のよかった労働者も、何一つ答えようとはしてくれなかった。彼は腹立たしさを覚えながら今度は附近の民家へ飛び込んだ。そして、自分は埼玉県から通っても無遅刻、無欠勤で半年前に「優良社員」として表彰されたばかりの者であること、それなのに、理由もなしに首にされたこと、工場の労働条件がきわめて悪いことなどを無我夢中で訴えた。

はじめは、「どこの子だろう。若いのに」と眉をしかめていた人たちも、その熱意にうごかされて、「ともかくからだに気をつけて頑張るなさい」と励ましてくれるようになった。雨の日などには、工場前に立つ彼に傘をもってきてくれる人もあった。

「飛ぶ鳥も落す」勢いのアイデアル・丸定商店を向こうにまわした一人ぼっちの彼の苦難にみちたたたかいはこうして開始された。

「アイデアル」にいうことあり

上部団体の東京商業一般労組は、このたたかいを重視して、(1)工場のなかに労働組合を結成し、たたかいを起す、(2)地域の労組や住民と結びつくこと、(3)奥田君を守る会を組織してたたかう体制を固める、ことを決定して連日工場と地域へピラ入れを行なった。

会社側が、「なんである、アイデアル、常識」と植木等に演技させれば、奥田少年のピラは「なんである、アイデアル、非常識」と職場の実態をバクロし、「作業中にも便所へいかせろ」をはじめとする一二項目の要求を突きつけ、敵が困って「なんである、アイデアル、またいっちゃった」と変えれば、「なんである、アイデアル、また首切っちゃった」と、血も涙もない丸定資本を糾弾し、さらに「なんである、アイデアル、また首切っちゃった」と変更すれば、「なんである、アイデアル、いうことなし」と暴利をむさぼる経営者と労働者の生活を対比して職場の声を代弁しつづけた。

このピラが低賃金と「合理化」にあえぐ職場に反響を呼び起さないわけがない。

あわてたのは会社側だ。職制を動員して一枚残らず取り上げてしまった。定時制高校に通う奥田少年にとって、ピラは職場の仲間たちに話しかける唯一の伝達方法だっただけに大変なショックであった。

しかし、敵はさらに大きな衝撃を彼に加えた。「奥田は「アカ」で会社の発展を妨害したので首切った。今後、奥田に近づくものは無事ではすまない」という「アカ攻撃」によるおどか

しが、仲のよかった同僚まで彼からひきさいってしまった。

病氣見舞いに行った彼に、その同僚は「奥田君なんかこないでくれ。こられると直る病氣も直らないから」と興奮しながら追い返したのである。彼は、病室を飛びでると近くの土手に上って男なきに泣いた。信頼して生命のつなとも頼む同僚から虫けらのように突き放されて、目の前が真っ暗になってしまった。

「こんなにまでして、たたかわなくてはならないのだろうか」——彼は、それこそ真剣に闘争をやめることを考えた。ショックで小さくなる心と首を切った敵への怒りが交差する複雑な氣持を自分でたしかめるために、奥田君は暗くなるまで土手に座っていた。

「あの時は、本當いって闘争をやめようと思いました。でも、最後まで心に残ったのは家族のことでした。〃兄ちゃんのお金が入らない〃というので、毎朝、新聞配達をして応援してくれる三人の妹と、毎日〃スイトン〃で我慢している両親のことを考えたら、こんなことでくけてたまるかという根性で身体がふるえました。また、毎日クタクタになるまで絞られている仲間のことを考えると、どうしてもたたかわなくてはいけないような使命感にかられて、たたかいをやめることなどどこかへふっとんでしまいました。」

奥田少年は、當時を思いだしてこう語っている。まさに、働くもののど根性である。迷いの土手をおりた彼は、さらに意欲的にたたかいに取り組んだ。

「せめて、自分の食う分は」と見ず知らずの間屋と交渉して即席ラーメンを安く仕入れ、毎日行商カンパを訴えて歩いた。オートバイのない彼は自転車だった。

「毎日走る距離は五〇キロ以上」というのだから、さしもの豪傑ぞろいの東京争議団共闘も、その活躍ぶりには頭が上らなかった。

「守る会」は、こうした彼の奮闘を基礎として、六四年一月一六日に結成された。二〇〇人以上の仲間たちを結集して盛大に開かれた結成集会では、会費も五〇円と決められ、手袋、靴下などのカンパ物資が山になるほどとどけられた。学校の友だちは欠席がちの彼を助けてノートを廻してくれる。全日自労の全国大会と全損保東京地協で支援決議を受け、丸定商店社長村田啓一あての抗議ハガキは守る会会員の手で、すでに一万五〇〇〇枚が売られ、重要な戦力になりつつある。

「首を切られたんですから、〃なんである、アイデアル、いうことあり〃です。しかし、ぼくはもうひとりぼっちではありません。絶対に勝つまでたたかいます」

彼は、今日も元気いっぱい即席ラーメンをつんだ自転車に乗って、勝利にむかって、東京中を走りつつづけている。

非人間的な夫婦生き別れ配転

「……皆様の温い心の配慮もむなしく、問題は解決されぬまま一二月になり、夫の神戸転勤の日は確実に決定されてしまいました。私は東京を離れて行く夫を妻として当然見送るべきでしたが、多くの人の見送りの中で心の動揺することをおそれて、東京駅のホームには行けませんでした。電車で大井町まで行き、大井町駅で夫の乗った「つばめ」の通過をひとりで待っていました。」「つばめ」の車窓から私の心にはっきりと夫の姿をみとめて、私の夫へのはなむけにしたいと考えたからです。ひとりホームに立ちつくしてどうしてこんな悲しいことになってしまったのだろうと思えば思うほど涙が流れて来るのでした。やがて走って来た「つばめ」は轟音をひびかせながら私の前を一瞬にして通り過ぎてしまいました。こんな別れをして、夫は神戸に、妻の私は東京に別々に住むようになってからはや一年以上、昼間は職場の忙しさにとりまぎれて忘れてはおりますが、夕方家路をたどる時「鳥」になって飛んで行けたら、はるか関西の空に」とふと思うこともあります」

一〇〇年もの昔、まだアメリカでドレイ売買が公然と行なわれていた時代に、愛し合う黒人夫婦を別々に売ったという事件なら数限りなくひき起されたに違いないが、二〇世紀も後半、

それも東京のと真中で共稼ぎ夫婦を東京と神戸にひきさくという「事件」が起きた。

六三年一二月、東京海上火災に勤務する活動家・松沼夫妻に加えられた攻撃がそれである。職場の自発的努力によって生みだされた「守る会」は、ここでもしつかりと松沼夫妻を包んだ。統発する腱鞘炎など返り見ようとせず、IBM統計機などを導入して事務の機械化を強行する資本に、日ごろ恨み骨髓の労働者は、別居夫婦をしいる松沼さん配転にだまっていなかった。

「配転はサラリーマンの宿命なのだろうか」職場では真剣な討議が続けられた。

「資本は合理化を一段と激しく強行する方針だから、組合が邪魔になってきている。だから、その弱体化をねらっている。今回の松沼配転はその氷山の一角にすぎない」ことは誰の目にも明らかであった。

支部大会も、はじめて特定の人事異動に対決してストライキをかけてまでたたかうことを決議した。

(1) どうしても松沼君を配転させなければならないなら、ふたり一緒に転勤させよ、(2) ふたり一緒に転勤できなければ現状のままにせよ。要求も明確に、会社側に通告された。ホワイト・カラーと呼ばれる労働者が資本に対決し、「配転反対」をたたかう根性をすえたのである。

しかし、敵は妻の絢子さんから夫をひきさき、特急つばめの轟音とともに神戸へつれ去って

しまった。ひとり大井町駅に立つ絢子さんの気持は、一〇〇年の昔、愛する夫と別れ別れに売られて行った黒人ドレイの心に似て、激しい怒りと悲しみでいっぱいであった。

だが、悲しみにうち沈んでいる余裕などはない。松沼夫妻は、神戸と東京であらゆる集会に参加して、東京海上火災の「非人間的な夫婦生き別れ配転」の実態を訴えて歩いた。日比谷公園で行なわれる統一行動には、絢子さんは必ず「松沼をもどせ」の抗議署名簿をもって参加し、参加者一人ひとりに訴えて署名を取りつづけた。

次第に、「松沼さんを守れ」の声は、職場要求と結合して労働者を結集し、翌六四年二月には、神戸にも「松沼さん夫妻を励まし守る会」が誕生した。会員は、たちどころに三〇〇名をこえて創意ある活動が力強く開始された。

抗議署名を四人の会員で三〇〇名も集めた「守る会」の班。夫と協力して六〇名を超える署名を集めた婦人会員。また、第一〇回原水禁大会の会場には三〇人の「守る会」会員が、三万人の参加者のなかに入って署名を訴えるなど、一人ひとりの知恵と力を結集してたたかいが地道に進められた。

さらに、演劇部は「松沼さんはひとりではない」「広い大きな輪のなかで」のシブプレヒコールを創作し、コーラス部は創作曲「松沼さん勝利の日まで」を発表して、いっそう広範な労働者を「守る会」運動に結集した。

絢子さんのいる東京でも、六四年七月一日東京松沼さん夫妻を励ます会が発足した。そればかりか、「守る会」の炎は金沢、横浜、大阪、名古屋にも燃え移り、全損保を中心として全国的に燃え広がった。

激しい合理化攻勢の防波堤として

こうして、六四年一月二日、同じ配転とたたかう興亜火災の「深野夫妻を守る会」との合同で、全国の代表者を結集した「松沼・深野夫妻を励まし、生活と権利を守る大集会」が東京日本橋公会堂で開催されるまでにたたかいは発展した。

この時の感動を、二組の「生き別れ夫婦」は、生涯忘れることはできない。職場の守る会会員の手によって作られた構成劇は、一見華麗にさえ映る近代ビルに、荒れ狂う「合理化」と、そのなかでの「夫婦生き別れ配転」をえぐりだして、「配転はサラリーマンの宿命」ではないこと、たたかひによって阻止することができると訴えた。

会場をうめつくした七〇〇人の仲間たちは、深い感動に包まれながら、精いっぱいの手拍のなかに限らない支持とたたかう決意をこめて、二組の夫婦をたたえた。構成劇の後、全国各地からこの集会のために上京した「守る会」代表からの数々の贈りものが手渡された。赤ちゃ

んのうぶ着や毛糸のあみものなど、「守る会」の人たちの手で丹精こめてつくられた品物が、二組の夫婦を取り囲んだ。それはちょうど、松沼・深野さん夫妻を支える全国の「守る会」の熱い連帯と団結力を象徴するかのようであった。「再びこのようなむごい配転が職場の仲間にふりかからないためにも、最後までくじけずにたたかいます」という両夫妻のあいさつも、感動にふるえていた。

こうして、「松沼夫妻を励まし守る会」は、あらゆる職場に加えられている「合理化」による生活と権利の侵害に対するさまざまな要求と結合して発展し、いっそう広範な大衆を結集し続けている。とくに、全損保においては、「守る会」運動が労働組合を階級的に強化するたたかいとして広く自覚され、位置づけられてたたかわれているのが、一つの特徴である。だから、「守る会」のたたかいは単なる救援運動の範囲を越えている。

その後に、同じく生き別れ配転が一組もでていないこと、「合理化」反対闘争が次第に職場に根を張ってきている事実などは、「守る会」運動が敵の攻撃をふせぐ強固な防波堤であり、同時に組合の組織的強化に大いに役立っていることを、何よりもよくもの語っている。

「守る会」のたたかいは、松沼夫妻の生活を正常にもどすまで、そして「合理化」による犠牲が労働者にふりかかる限り、とどまるところを知らずに燃え広がるであろう。

やめなければならぬ理由がない

一九六三年六月二十五日――

三菱樹脂株式会社の本社営業部に勤務する高野達男君が、田幡総務部次長に「第四会議室にくるように」いわれたのは、午後二時半過ぎであった。入社して三カ月、やがて試用期間も切れる。彼は、いわれるままに会議室のノブを廻して中に入った。しばらくして、久野総務部長（のちに関係会社部長となる）が姿をみせた。彼は緊張した。いったい何事が起ったのだろうか。

久野部長はおもむろに切り出した。

「こんど君にやめてもらうことになった」

突然の宣告に、彼は頭の血が引いていくような驚ろきを受けた。彼は、やっとの思いで落ちつきをとりもどし、重い口をひらいた。

「なぜでしょうか」

「それは君が胸に手をあてて考えてみればわかることだ」と部長はいった。

「ぼくにはやめなければならないようなことをした覚えがない。具体的に説明してください」

い」

彼は粘った。しかし、あとは押し問答であった。その中ではっきりしたことは「お前の考え方が、会社にとっては都合が悪い」ということであり、「身上書に記載すべきことが書いてないので、将来の幹部候補生として信頼できない」という理由であった。

彼は、ひるまず部長にくり返しきいた。

「思想が悪いとは、どういう思想のことをいうのですか。会社はどのように都合が悪いのですか」「身上書に記載してない事項とは具体的にどのようなことかはっきりしてほしい。仕事は真面目にやってきたつもりだし、今後もしそれは変わらないつもりです。もういちど考えなおしてほしい」

しかし、部長は「会社はいちど決定したら、だれがなんといっても引っこめないのです、おとなしくやめてくれ」とつめたく突っぱねた。

結局のところ、「たとえ一人の首切りであっても、理由の不明確な、不当なものは認められないので絶対にやめない」ことを彼は告げ、物別れとなった。

独身寮（荻窪）への帰り道、彼は昼間の部長の宣告を思いうかべながら、今後のことをあれこれと考えた。……知っている人の少ない所で、果たして何人が理解してくれ、支援してくれ

るだろうか。いっそのこと、あっさり引きさがつてしまおうか。しかし……それにしても会社のやり方はいっぼう的だ。ムチャクチャなやり方だ。このままでは、とてもやめるわけにはいかない……。

彼は、仙台の父母のこと、学生時代のことも思い浮べた。それが消えては浮び、重なっては迫り、彼の胸をよぎった。そのうちに、いくら悲壯感をともなつて、彼の正義感がふつつとよみがえってきた。心の底から、怒りがわきあがってくる。彼は決意した。

「よし、こうなったら最後までたたかおう。たとえ力が及ばなくて、途中で倒れるようなことがあったとしても、正しいと思うことをやっていくことこそ、この世に生をうけたものの当然の生き方ではないだろうか……」

翌朝、彼は何事もなかったように出社した。ところが、部長から「帰れ!」と怒鳴られ、つめたくあしらわれた。彼は、それに黙って耐えた。仕事だけは、真面目にやり、会社の誠意にひそかな期待をつないだ。寮に帰っても、同僚には一言も話さなかった。しかし、その願いはふみにじられた。六月二八日、会社からは、「最後通告」が出た。

それから二日後の夜、彼は独身寮の寮生たちに相談した。

地区労オルグにはげまされて

一室に集まった若者たちは、お通夜のようにしばらくおし黙ったままであった。

「同じ寮生が、はっきりした理由もなしにクビになる。どうしたらいいのだろう？」

「もし、高野に味方すれば、自分も一緒にやられるのではないか」

寮生たちには、六月末の夜が一段とむし暑く感じられた。

労働組合運動に、さした経験も持たない彼らに、首切りを撤回させる「名案」など浮ぼうはずはなく、逆に職制や重役の顔が大きく思いうかんで、相談は少しも進展しなかった。しかし、高野君は、理由もない首切り通告に対して憤りと不安に身を固くしながら、一生懸命総務部長に呼ばれたこと、そこで、解雇をいい渡されたこと、しかし、理由がないことなどを訴えた。

「ともかく、僕はこんな首切りでハイといって郷里に帰るわけにはいかない。僕はたたかうつもりだ」

寮生は、この彼の言葉に逆に励まされて、ポツポツ発言し始めた。なかには、積極的に高野君を守る必要を訴えるものも現われた。そして、夜中の二時過ぎに、ともかく同僚の首切りを

だまって見ているわけにはゆかない。今まで通りつき合うことが申し合わされ、翌日ただちに労働組合に訴えて守ってもらうことになった。

しかし、労働組合は必ず応援してくれるという期待は、シャボン玉のようにはかなく打ちくだかれた。

組合事務所にむかう時とはうって変ったように、重い足を運ぶ彼の耳もとには、「君は、入社間もないので組合員でないから、首になっても組合で取り上げるわけにはゆかない」という組合幹部の言葉がいつまでも残っていた。

いのちのツナとも頼む組合から、冷たく突き放されて、彼は全身から力が抜けてしまうのを感じた。しかし、彼の解雇は、総務部長がいうように「身上書に偽りがあるから」といった単純なものではなかった。

それまで、賃上げ要求をしても、闘争体制を組んだことがなかった三菱樹脂労組が、一九六二年春闘でスト権を確立し、大幅五〇〇〇円を要求、さらに、上部団体加盟が大会議題になるまでに成長するという背景があったのである。それは、安保闘争が契機になっていたのはいくまでもない。

三菱独占の塩化ビニール、樹脂関係製品の主要工場として、三一億の資本と年間売上げ一二〇億円をほこり、積水化学、住友ベークライトと一、二をきそう三菱樹脂の経営者が、この労

働組合の変化に無関心であらうはすがなかった。しかも、二〇〇〇人に近い労働者でふくれ上る滋賀県長浜工場を始めとして、二五〇人の平塚工場、一五〇人の東京本社とも、労働組合の前進が目立ったのだから、そのあわてぶりは大変なものであった。

新入社員の高野君は、このような情勢の中で「その運動の経歴をかくした」ことを理由に解雇されたのである。

組合から支援を拒否された夜、彼は仙台の親もとへ、気のすすまない、手紙を書いた。上京して三カ月。「元気で東京についた」の知らせの後が、「クビになった」というたよりを書かなければならないのだ。

その夜は、苦勞して大学を出してくれたのだから東京で大成功することを願っているに違いない両親の顔が、頭にうかんでなかなか寝つかれなかった。しかし、彼は、どうしても泣き寝入りする気持にはなれなかった。

ところが七月一日、平常通り出勤して見たら、すでに自分の机はなかったのである。東京のど真ん中、高層ビルの立ち並ぶ丸の内。その谷間のような歩道をあらく彼は、弱気になってしまふ自分と必死にたたかっていた。

「三菱の組合は支援しないといったが、千代田の地区労へでも行ったら、少しはわかってくれるかもしれない」——ワラをもつかむ思いで、千代田地区労をさがし歩いた。ところが、彼

はそこで予想もしないようなことにおつかったのだ。

地区労の役員は、「君が本気になってやる気なら、私たちはあくまで支援する。労働者階級は強くなっているのだから、自信をもってたたかうべきだし、一人でもたたかえるんだよ」と激励しながら、守る会の支援をうけてたたかう一人ぼっちの解雇反対闘争の話をしてくれたのだ。

上京間もなく、知り合いとてない彼にとって、このときの言葉ほど重く腹に響いたものはないかった。

「一人でもたたかえるんだ」——一〇〇万の味方を得た思いで仲間たちのいる寮へ飛んで帰った。

守る会に支えられ現職復帰の日まで

こうして、千代田地区労の事務所をめぐらに「高野守る会」の運動が、三菱樹脂の内と外で開始された。彼は、それに励まされて連日のようにビルのなかに入ってビラを配った。

会社側は、高野君の姿がビルに現われるたびに、守衛を動員して妨害したが、平均賃金一万数千円という低賃金にあえぎ、会社のやり方に疑問を抱いている労働者は、ビラを気持よく受

けとり、熱心に読んでくれた。

だが、「守る会」活動は困難をきわめた。「高野はアカだそうだ、クビになるのかもしれない」といった敵の攻撃にのせられて、スタートしたばかりの高野解雇反対闘争に背をむける労働者も少なくなかったのだ。

「ビラを渡そうとしても、そっぽをむく労働者がいると、初めの頃は、そいつの顔が頭で浮んで食事ものどを通らなかった」と、当時を思い出して彼は語っている。

しかし、そんな彼を千代田地区労の労働者と職場の仲間たちが、しっかりと支えた。中央電報局、市外電話局などの「守る会」の仲間たちは、徹夜でビラをつくり、「がんばろうね」という言葉とともに、彼に手渡してくれた。

ときには、寝る場所に困って、近くの深夜喫茶で夜を明かし、翌朝眠い目をこすりながらビラをまくということもあった。しかし、月給日前には、食べるにもこと欠くという低賃金の仲間たちのなかにも、彼のカンパには心よく応じてくれる人がいた。さらに高野は「アカ」だと近づくのをおそれていた職場や寮の仲間たちのなかでも、敵の目のないところでは、「元氣か。たまには泊って酒でも飲んでゆけよ」と親しく声をかけてくれるものがふえていった。

こうして、無我夢中の半月間が過ぎた。郷里からは、母親が食膳に向うたびに、悲しんで泣いているというたよりが届いていた。しかし、千代田地区労の支援決議とともに、三菱樹脂労

組中央執行委員会も、高野支援を決議したのである。

彼はその知らせを受けた時、本気で信ずることができなかった。

「これならやれるぞ」

彼は、断固として、たたかいぬくことを自分にいい聞かせた。

一九六三年七月一六日。中央電報局、市外電話局、全通中郵、東京海上などの地域の仲間に、三菱樹脂の労働者をまじえて、「高野君を守る会」が結成された。それだけではない。「守る会」の中心的活動家である兼松君は、三菱樹脂労組東京支部役員選挙に立候補し、資本の攻撃と妨害をけて、みごと上位当選を勝ちとったのである。

明らかに、高野解雇を契機として、三菱樹脂の労働者は、権利をまもりたたかうことの大切さを知りはじめていたのである。会社側は、その力をおそれ、兼松君に広島営業所へ配転を命じて来た。職場は、高野・兼松問題で大討論が繰返された。

八月九日は、〃高野・兼松をまもれ〃の職場の声は、ついに多数を結集し、東京支部大会で〃支援決議〃を勝ちとった。すでに、彼は一人ぼっちではなくなったばかりか、上部団体をもため企業内組合が、本来の労働組合として大きく変り始めていたのである。

九月三〇日、東京地方裁判所へ「地位保全」の申請を行なった。月二回の法廷は、支援を正式に決議した組合と「守る会」会員によってうめつくされた。昼休みにコッペパンをかじりな

がら、かけつける地域の労働者、夜勤明けの目をこすりながら傍聴する労働者——。彼は働くものの連帯に熱い涙を押えた。

「裁判を有利にするには、〃守る会〃と地域の活動を強化しなければならない」——守る会の幹事会は、裁判所に結集した仲間たちに強く訴えた。「ベトナム映画と話し合い」などの学習会、守る会、望年会などが、一〇〇人に近い労働者を結集して成功を勝ちとった。ここでも、守る会は単なる救援活動から、次第に労働組合の団結を強化し、地域の労働組合の横のつながりを発展させる〃カナメ〃になっていった。

一九六四年四月二七日——組合の〃全面支援〃と「守る会」の発展のなかで東京地裁の判決が出された。

「申請人（高野達男）が被申請人（会社）に対し、労働契約上の権利を有する地位を仮に定める——」

〃かったぞ〃〃勝った、勝った〃——彼は、裁判所のなかで苦労をたえぬいてきた仲間たちと固い握手をくりかえした。そして、「ついに勝った。今日まで頑張って来て本当に良かった」と自分にいい聞かせていた。

数十名の労働者を前に、感謝のあいさつをする彼は、実践にたえぬかれた立派な闘士であった。

「——本当にありがとうございました。しかし、まだ現職復帰は勝ちとられていません。この勝利を基礎に、さらに三菱樹脂の職場にもどる日のために頑張ってください」

裁判所の廊下に歓声と拍手が起った。それは同時に、「守る会」全員の現職復帰への新たな決意表明でもあった。

解雇後間もなく、上京して会社側とあって「息子の正しき」を確認し、たたかうことに同意した父。食膳に向うたびに悲しみ、なげいていた母が、「正しいものは最後までやるがいい。母さんも、お前の真剣さに負けて、なけなしの財産をなげうっても悔いしないから」と支持してくれた母。その父母に彼は裁判の勝利を電報で知らせた。

こうして彼は、現職にこそまだ復帰していないが、三菱樹脂労組東京支部の「専従活動家」として、日夜職場や地域での活動に精を出している。

彼の「現職復帰」の執念は、一層激しく燃え、裁判勝利後は、自らタイムカードを作製し、出退勤時に必ず打刻している。

「守る会運動」の教訓と問題点

首都における「守る会」の数は、およそ七〇になろうとしている。ここに紹介したたたかい

は、そのほんの一部にすぎない。

これら「守る会」の発展が、攻撃を受けた本人と家族、それを支える活動家のいかなる犠牲をも恐れない決意と奮闘にあったことはいうまでもない。しかし、新しい共闘組織の一形態としての「守る会」は、現在ではたとえ攻撃を受けた活動家を組合が支えてたかったとしても、組織する理由があるようである。いい変えれば、解雇反対闘争は、組合が組織をあげてたたかって、これで十分ということはないからである。それだけ現状では、困難なたたかいなのだ。だから、組合が取り上げない職場での「専売特許」ではない。

したがって、「守る会」は「反幹部闘争」にすべることを、いつも注意することが大切だ。とくに、攻撃を受けた活動家を組合が守らないという職場では、「組合なんかあてにならない。こんなひどい目にあうのも、あんな幹部がいるからだ」という「反組合、反幹部」の感じが前面にでがちである。

しかし、「松沼守る会」に見られるように、本来の組合活動と「守る会」は矛盾する組織ではない。むしろ、労働組合を強化し、労働組合の目的達成をたすける。だから、組合運営で意見を異にしたり、思想・信条で異った立場にある労働者でも、「仲間の首切りは許せない」という一点で結集することが大切だ。「組合活動を批判的にみられる活動家」に「守る会」を限定するセクト主義は、必ず失敗をまねくであろう。

また、「守る会」の発展する客観的な条件は、何よりも活動家を首切り、配転させた同じ黒い手が、職場の末端にまで兇暴な攻撃を加えてきているというところにある。だから、「守る会」は、職場の要求をたたかいとる闘争と結合したとき、無限の発展性を手中にすることができさる。

単なる救済運動の範囲をはるかに越えて発展している「松沼守る会」のエネルギーは、この職場要求との結合にその秘密がある。だからこそ、労働組合の団結と統一を促進することが可能になってくる。

「守る会」は、このほかにも複雑な問題をかかえているが、日本の労働者階級の知恵が苦難なたたかひのなかで生みだした「宝」である。さらに権利闘争に一定の不十分さをもつ日本の労働組合運動に新たなたましいをふきこむ任務を結果的には果たす運動として、位置づけられなければならないだろう。そして、たとえひとりぼっちでも、道理と努力とど根性があれば、必ずたたかえるものだという教訓をもち、全国のたたかう仲間たちに限りない激励をあたえている。



III

たたかう労働者の団結

大衆路線

みんなで決めて、みんなで実行

平均年齢一九才という、東京地方争議団共闘のなかでも若い労働者が圧倒的に多い喜多パン労組の指導部に、勝利をかちとった最大の武器は何かとたずねたところ、書記長はためらいもせず、「全員が苦しい生活を、平等に実行することを土台にすえて団結したことだと思っています。なんでも全員で徹底的に話しあいました。〃みんなで決めて、みんなで実行しよう〃がスローガンです」と語った。

一六才の少年から六〇才に近い婦人まで、苦しい生活を平等に実行するということは、なまやさしい決定ではなかった。とぼしい生活資金の中で、へたばることなくたたかいぬくため

に、妻帯者も世帯をたたんで家族ぐるみ寮に引っ越してきて、全員が寝食をともにするという体制を、みんなで考えだした。家族もちは、家庭に帰って家族の協力をえ、さっそく実行に移した。

喜多パンの仲間は、「家族ごと寮に移り住むというのは、大変でした」と、ひとことポツリと語るだけだが、なみなみならぬ思想闘争が家族のなかで行なわれたにちがいない。

こうして、全員が工場の食堂で一食四〇円の一つ釜のめしを食うという文字どおり家族ぐるみの戦闘体制が確立された。

書記長は続けて、「今になって考えてみると、一つ釜のめしを食ってきたことが、論理や理屈でなく、一年間たたかいぬいた団結をつくりあげたと思います」と語っている。

喜多パンの仲間たちは、このような寮生活を基礎にして、工場を長期的に占拠し、敵の弾圧や挑発、分裂などの攻撃とたたかってきた。しかし、敵とのたたかいが熾烈を極めれば極めるほど、寮の生活をみんなで大切に、決してあじけなく、みすぼらしいものにはしなかった。たたかう若い労働者の一日の疲れをいやし、団結と闘魂をより強める場にするため、全員で点検し、工夫した。

争議生活は、オルグ、アルバイト、行商と連日多忙で遊ぶヒマも金もない。争議中だから当然だ、といってそのまま日を重ねると、つまらないことで口論がおこったり、たたかいに嫌気

がさしてくる。争議に入って一カ月ほどたったとき、だれかが発案し、工場内の敷地にバレーボールのコートをつくった。みんなで力を合わせて角材を探してきて、ネットをはり、白線もひいた。完成したとき、いままでにないあたらしい団結を全員が感じた。それからバスケットのリングもつくり、鉄棒もつくり、野球用具までみんなでつくった。

さびしくなったときなど、全員で昼休みや夕方にスポーツを楽しむことにした。おもいっきり遊び回ると元気が湧いてくる。また、寮の庭に花壇をつくって四季おりおりの花を咲かせ、みんなの心をなぐさめるようにした。ひとつ新しいものが完成するたびに、「みんなでやればできるなあ」という感想が話された。

たたかいに勝つために、きりつめた生活をしているのだから、好きな酒を飲みたくても飲むことができない。なんとか工面して飲むものもでてくるが、みんな飲めないのが当り前だから、どうしても不団結をつくりだしてしまう。そこで、毎月一回、闘争突入記念のパーティーをやることにした。四カ月目、五カ月目と努力をお互いにたたえながら、楽しく全員で一杯を飲み、たたかうエネルギーをみんなで作くりだすように工夫してきた。このような生活は、自然にひとりひとりの私生活を正しく規律あるものにし、集団主義のなかで思想改造を押し進めることになった。寮の室名も、たたかう若者にふさわしく、統一の間、学習の間、連帯の間などの名で呼ばれていて、苦しいけれど明るいはずとした戦闘的集団の生活が創造されて行った。

自己批判・相互批判をきめこまかに

きめのこまかい団結をつくりだすまでには、敵の攻撃に負けて脱落するものもでてきた。そんなときには、全員がその原因を追及し、全員が責任を負う立場で、全員が説得した。

経営側とひそかに通じている裏切者もだが、慎重に調査し、反省と自己批判によって立ち直らせ、最後までスクラムを組んでたたかえるように、節度をもって、いたわるように、励ますように、全員で説得した。

長期のたたかいのなかで、考えこみ、ふさがちになる仲間には、苦しみや悩みをよく聞いて、解決できるものはすぐ解決したうえで、さらに労働者としての自覚を高めるように、全員で相互批判をし、助けあった。だから、このような問題がおきると、当事者以上にひとりひとりがためされ、逆にこのことが全員の階級性を高める契機になった。

こんなこともあった。説得もなかなか効果的でなく、おちこんだ仲間の魂をとらえることができず、みんなが展望を見失いがちで苦しんでいたときである。〃寮の庭に池をつくろうや〃という提案があった。日曜日ひさしぶりでみんなが土を掘り、石や砂を運び、汗を流し、声をかけあいながらよく働いた。セメントをぬりかため、みごとな池ができた。地域の人が

さっそく鯉をもって放してくれた。みんなの心は、池を泳ぎまわる鯉のように、明るくのびのびとした。このとき、おちこんでいた若者は汗をぬぐいながら、「おれ、やっぱりたたかうよ」と言葉すくなく決意を表明した。集団作業のなかで、団結と連帯を再びつかみなおしたのである。

池づくりには後日談がある。勝利が確定的になった団交の席で、親会社の重役が、「あの池を見て、これは本気で腰をすえたな」とい、真剣に解決のことを考えた」と語ったのである。

東北の田舎からでてきた一六、七才の若者が多い喜多パン労組なので、敵は切りくずしのため、田舎の親もとにさまざまな攻撃をかけた。ある一七才の少年は、両親から懇願されてぐらついた。争議をやめて帰省しろという手紙が、矢のようになる。これを全員で討議し、みんなが一通づつその少年の両親に手紙を書くことにした。説得などできるはずがない。自分自身がふみとどまり、たたかっている決意を書き送ったのである。

一八人目の手紙が届くころ、両親から組合あてに、よろしく頼むと手紙がきた。その少年はいまも元気でたたかっているが、手紙を書き送った少年たちの決意もいっそうかたまったのである。

若い仲間は、「私たちの組合は、だれもが非常にこまかいところまでよく気がつき、なんでも話しあえて兄弟みたいなのです。委員長でも、書記長でも、ザックバランに批判する。こ

れがうちの財産だ」と語っている。

喜多パン争議団の強固な団結をつらぬいている原則は、組合民主主義の徹底した実践であろう。それは戦闘的な集団生活をつくりあげ、それが真に日本の労働者階級の息子と娘にふさわしい、あたらしい人間像を生み出したのである。

最初は頼りない争議団であっても

「全員解雇」になった青葉幼稚園は、若い女の先生ばかり。たたかわねばと思っても、はじめてのことでもあり、つらいことばかりで、つい気おくれがして消極的になってしまふ。ある日、区内の学校へ訴えに行った。校門の前まできたのだが、なんとなく白い眼でみられるような気がしてならない。そればかりか、自分が非常にじめに感じられてきた。学校のまわりを二度、三度まわってみたが、どうしても門をくぐる事ができず、そのまま帰ってしまった。ところが、訴えに行ったその成果を、期待している仲間がいると思うと気が気でない。この若い先生は、貧しい組合の金をつかうのも気がひけて、二時間もの道をバスにも、電車にも乗らずテクテク歩いてもどってきた。そして、泣き顔で仲間に報告し、あやまったのである。

まだ、＼ど根性＼がすわっていないといってしまえばそれまでだが、どこの争議団にも一度

や二度は覚えのあるほろにがいような経験談だ。

「うすら馬鹿みたいに根気がいい」とか、あの争議団は筋金がいっている」とよくいわれるように、長期にねばり強くたたかう争議団がふえている。そのなかには、多くの「守る会」運動、たとえば定時制高校に通学している「アイデアル」の丸定商店の少年——奥田君のように、たったひとりでたたかっている仲間もいる。また、青葉幼稚園や旭食堂のように女性ばかりの争議団もある。日本ロール、東京磁石、東京発動機、日本光学、日特鋼など、金属労働者の数百、数千のマンモス争議団もたたかいつづけている。

このような事実は、長期争議が非常に大衆化していることを物語っている。それだからその初期の青葉の先生のような頼りない話も生まれてくるのだ。みんな最初は頼りない。現代争議の特徴は、その頼りない、いわばしろうと争議団が、ひとつひとつ経験を積み、確信を深めて、＼ど根性＼の長期争議団に生まれ変わる点にある。

激しい討論と行動を通して

「つぶれた工場でがんばったって、しょうがねえじゃねえか」

「たたかうといったって、会社が倒産、相手がいないんだから」

「第一、あすからかあちゃんと子供のあごが干あがってしまう」

東京磁石でも、たたかいと生活の二重の不安で、五〇〇人をこえた組合員はアツというまに一五〇名に減ってしまった。たたかいの火は消されて、一度倒産、ただちに三菱独占に吸収という予定のコースを歩むかに見えたが、そうは問屋がよろさなかった。

火を吐くような討論がくりかえされた。

「会社はつぶされても、おれたちの組合と生活はつぶせない」と白昼強盗のような三菱独占と、とことんまでたたかう方針を確立した。とくに、三協紙器、正路喜社、エスエスから、日本ロール、喜多パン、東京発動機へと争議の前進をよく学び、なによりもいま踏みとどまった仲間ひとりも脱落させない方向をとった。これが勝利の保証だし、運動を前進させるうえでの歴史的役割だと指導部は考えた。

「賃金遅配反対」「夏期一時金即時支給」「工場閉鎖、首切り、配転反対」「労働者と下請中小債権者の犠牲によらない会社再建」「退職金の増額」などの要求をかかげて、組合員の日常的な要求、実利を徹底して重視する方向でたたかいを組織した。これは電気料未払いのため電気をとめられ、自主生産が不可能になった時期だけに、団結をかため闘争体制をつくりあげるうえで重要な方向であった。手はじめに、社長と重役のところへ押しかけて、生活資金をひねりだすことにした。

「おれたちは、ともかくまじめに働いてきたのに、倒産によってハイそれまでよ、とはなにごとだ」

「三菱にだまされたといっても、責任はおまえさんたちにもある」

「おれたちは、あしたから食うコメもない。どうしてくれる」

執行部とか、一般組合員というへだたりはなかった。全員が真剣そのものだった。

「倒産だから金を出せない」

「冗談いって困る」

数時間ののち、とうとう気迫と団結の力で押しぬぎ、譲歩をかちとり、寮生の給料未払い分をまず出すという約束を取りつけた。

「やる気でやればできないことはない」「あわてる乞食はもらいがすくないというのは、どうも乞食の原則ではなくて、労働者の原則だ」などの声がかかれ、とたんににぎやかになった。確信がわき、展望がみえたしたのである。

倒産した社長、重役からひねり出させる金は知れている。当然、清算人にホコ先がむいた。また、連日のように集団交渉がはじまった。しかし、今度は簡単にはいかなかった。

「私どものところに責任を転化されても困ります。私はたかが清算人でしかないのですから」となかなか強気だ。ところが、東京磁石の仲間の生活防衛の要求と怒りは、敵がのらりく

らりしたり、強気にでたりすればするほど、こちらもより頑強に、ねばり強くなるのである。賃金がとれなくとも、電気代、水道代を払わせ、電話をひかせるなど、行くたびに何かは獲得してきた。そのたびに東京磁石の組合員は団結の力に対する確信を深めた。

こうして、とうとう未払い賃金分を、差押え物件を売却させてひねりださせることに成功した。

仲間たちはしだいに金がなければたかえないという思想を克服して、「要求を明確にして頑強にたたかう以外に生活の道はない」ことを身をもって学んだ。

労働者の熱い連帯に支えられながら

不敗のトリデを築きつつある日本ロールも、たたかいのはじめから、組合員のひとりひとりが勝利への確信と「ど根性」をもっていたわけではない。争議突入後三カ月ほどたって膠着状態になると「つらいたたかいが、何日続くのだろう」「もう三カ月もしたら終るだろうか」と考えこむ仲間も多かった。

「みんながやっているのに、自分からいいだすわけにもゆかないが、おれの首などどうでもいいから、だれかの責任で早く解決して、安定した生活を送りたい」という空気も流れてい

た。主婦の間でも、「組合の正しいのはわかるけど、本当に勝てるのかしら」「やるどころまでやって、ダメだったら……」と思いつめたような話がささやかれるようになり、自然と組合員の間に暗くしめっぽい空気がただよいます。

しかし、日本ロールの仲間たちとその家族が、身をふるわせるほどの感激とともに、狂暴な敵に対決して頑強に立ちむかう「ど根性」をすえる日がきた。それは、スト突入九カ月目の「日本ロール闘争必勝10・18団結大集会」の夜であった。

日本ロール闘争の必勝を願う労働者は、つぎからつぎと詰めかけ、さしもの日比谷野外音楽堂も満員になった。町内の人たち、第二組合の労働者、家族も多数参加した。秋風は冷たかったが、東京芸術座の大野外構成劇「団結は暴力に勝つ」が会場を熱っぽくつつんだ。

ロールの仲間は、この日ほど、労働者の階級連帯の力強さと美しさを知らされたことはなかった。暴力団に襲われたときの緊張感、機動隊に踏みこまれたときのにえたぎる怒り、家族に「本当に勝てるのか」ときかれて答えられなかった時のせつなさ、それまでの苦しかったこと、つらかったことが頭の中を駆けめぐる。舞台上に勢揃いした日本ロール争議団を励ます「ロールは負けない」の大歓声、一万人の仲間で一杯の客席が、涙にかすんで見えなかった。日比谷の夜の森をとどろかす「がんばろう」の大合唱は、今も日本ロールの仲間たちの耳にのこっている。仲間たちも、家族も、昨日までの不安をふっとばしてしまった。

こうして10・18大集会は、家族も含めて「最後の勝利を自分たちの手に握る日まで、どんなにつらくとも、この支援に答えてたたかいぬこう」という誓いの大集会となった。

強固な争議団をつくりあげるために

最初は頼りない争議団であっても、一つ一つの成果をつみ上げ、確信にかえて「ど根性」をもった「筋金入り」の争議団に成長する。ひとりひとりの組合員も、家族も、このたたかいの過程で驚くほど変ってゆく。そのためには、最終的な勝利へ向って毎日毎日のたたかいをすすめるうえで、つぎの三つの側面から常にきびしく点検する必要がある。

第一は、当面の要求、日常的な実利を重視してたたかうことである。東京磁石の経験が示しているように、たたかいの基本的な意義や方向に確信がもてない多数の組合員がいても、当面の要求でたたかい、成果をかちとることで、「団結」の力がわかり、闘争全体の展望が明確になる。

第二に、単産や地域の仲間による階級連帯の支援行動である。ロールの10・18大集会や2・5連帯ストがあきらかにしているように、敵にたいする打撃であると同時に、争議団の確信を深め、団結を強化する。なによりも、孤立感を粉碎し、一人ひとりにここまでたたかってきて

よかった、俺たちのたたかいに間違いはなかったと実感で証明することが大切である。

第三に、こうしたたたかいの中で組合員一人ひとりの変化を重視し、発展させることである。組合員にとって、争議は毎日毎日が新しい自分の発見である。自分たちの階級的な自覚の成長が手にとるようにわかるから、はりあいがあり、たたかう意欲も倍加される。相互にたしかめあい、意識的に定着させるよう討論、学習、手記を書く運動をつくりだす必要がある。

これらの点が正しく進められれば、争議団は不敗であろう。訴えることすらできず、涙をためて帰ってきた、かつての青葉幼稚園の若い先生も、今ではりっぱな押しもおされもせぬ活動家に成長してたたかっている。

学習と交流

東京磁石の創意ある組合学校

△月曜日▽

午前Ⅱ会社の歴史、午後Ⅱ組合の歴史とたたかいの経過、講師Ⅱ委員長および副委員長

△火曜日▽

「先輩争議団から学ぶ」講師Ⅱ全国金属日本ロール支部書記長、東京争議団共闘事務局長

△水曜日▽

「世の中の仕組みと今日の世界」講師Ⅱ北部平和委員会幹事

△木曜日▽

争議団交流Ⅱ日本ロール支部訪問

△金曜日▽

争議団交流Ⅱ神谷プレス訪問

▲土曜日▼

午前Ⅱ裁判傍聴見学・東京地裁民事一部「正路喜社立禁事件」、午後Ⅱ感想文（卒論）作成

これは、東京磁石争議団の「闘争勝利強化月間」に実施された組合学校の、ある一組の時間割である。一五人一組みで一週間学び、二カ月にわたる強化月間中に全組合員が無事卒業し、組合活動はみちがえるように活発になった。

この学校は、実践的で創意にあふれた労働者学校であった。学校の内容をさらにくわしく紹介すると、まず月曜日は会社、組合の歴史、闘争の経過などをふりかえり、身近な問題から階級的なものの見方、考え方を身につける。つづいて火曜日は、先進的な争議団の指導者からたたかいの経験と教訓を学ぶ。そこで自分たちの問題から、同じようにたたかい苦しんでいる仲間との問題の理解へと階級的視点を広げて行く。水曜日には、もう一歩前進して「社会全体の仕組みと内外情勢」を学び、階級的なものの見方、考え方を整理させる。木曜と金曜の二日間は、他の争議組合の現場に出かけて行き、たたかう仲間——幹部ではなく一般組合員と交流する。すなわち、木曜日には進んだ争議団に出かけて行き、いわば激励されてくるのだが、金曜日には自分たちよりも、あとから遅れてたたかいをはじめた争議団を訪ね、逆に自分たちがたたかいのなかでつかんだもので激励交流する。土曜日は、裁判所で実地に他の争議団の法廷闘

争を学ぶと同時に、国家権力の本質を具体的に肌を通して理解するといふものである。

この組合学校の中で一番好評だったのは、他の争議団の一般組合員との交流であった。具体的なたたかいの経験を通して交流し、たがいに激励しあうということは、なににもまして説得力がある。自分たちが、他の争議団を激励する立場に立たせるといふことは、真に組合員をきたえ、自信をもたせる極めて創造的な方法だといえる。

つぎに、東京磁石の仲間たちが喜多パン労組の仲間たちと交流したときのことを紹介しよう。

喜多パンの仲間との交流の中で

六五年一月のある日――。晴天だったが風の強い日だった。東京磁石の組合員一五名は、電車で約二〇分ゆられ、板橋区富士見町の喜多パン労組を訪れた。

企業閉鎖反対闘争一〇カ月、企業をつぶした山崎パンに「全員雇用」をみとめさせたばかりの喜多パンの若い組合員三〇名は、拍手をもって迎えてくれた。午前中は、おたがいに闘争の経過をのべあった。東京磁石の組合員たちは、人前で闘争の経過をベラベラしゃべった経験をもっていなかった。いつもは、組合幹部がすべてやってくれるのだが、その日は幹部たちも

わざと遅れ、午後から参加することになっていた。仲間たちは、たがいに顔を見合わせ、緊張した。だが、時間がたつにつれ、けっして雄弁とはいえない喜多パンの若者たちのものおじしない話しっぷりに、東京磁石の仲間たちもいくらか気分がほぐれてきた。

喜多パンの仲間たちは、つぎからつぎに苦しかったこと、悲しかったこと、うれしかったことを話した。

はじめに、アルバイト先の鉄工場で、なれない仕事のためへばった話が出た。「パンより重いものをもったことがないもんだから、身体が痛くて困った。組合に帰えて話したら、書記長が「俺がいつてみる」といって、翌日一緒に働きにいった。ところが、書記長の方が俺よりも先にアゴを出した……」

つづいて、地域へ「最中」の行商カンパについて「押し売り」と間違えられたこと、人前でしゃべれなかったのが行商カンパでだんだんしゃべれるようになったことなど、時おりみんなで大笑いしながら、なごやかに話しあいやすんでいた。

両親にたたかいへの協力と理解を得ることができず、動揺していた仲間のために全員でその仲間の両親に手紙を書いたこともでた。「それは俺なんだけど……」突然、頭をかきかき若者が名乗りでた。「あん時は、ほんとうに考えた。でも、仲間というものはいいもんだ」みんなは若者に熱い拍手を送った。

同じように、田舎の母に無理やり連れもどされた娘が、一週間のちになかば「勘当」覚悟で再び争議に加わるため上京した話も、みんなの感動をよんだ。

「……朝の六時に突然母が寮にやってきて、荷物をまとめ私を連れ帰ろうとしたんです。幹部の人が母を説得してくれたんですが、母はそのうちに泣きだし、とうとう一緒に新潟までかえりました。帰ってから毎日のように母に、みんながたたかっていること、警察のあくどい仕打ちを話し、思いきって勘当されても東京に戻るといったんです。頑固に反対していた母も、駅までおくってくれ、旅費だといって五〇〇〇円くれました。つい最近きた手紙には、
「人は自分が正しいと思っていることをやり抜くのが一番しあわせなのかも知れない。私はやっぱり心配だが、元気でやっておくれ」と書いてきています……」
ある仲間からは、街頭活動の経験がでた。

「……たくさんの人たちにたたかいて知ってもらうために、真っ白い作業服の背中に「企業閉鎖反対」のスローガンを書きこんで着て歩いたが、最初のうちは背中だから人が振りむいてみても、顔はうしろについていないのだから恥かしくはないという程度だった。それが、たたかに強い確信をもつようになってからは、前の方にも書いて正面からくる人にジロジロみられても気はすかしく思わなくなった」

話題はつきなかった。汲めども汲めども、こんこんと湧きでる泉のように、みんなは明るく

話し、笑い、涙を流した。交流は、こうしていつ果てることもなくつづいた。

交流のあとみんなは感想文を書いた

この日のことを、東京磁石の仲間たちは、土曜日に書いた感想文でつぎのようにのべている。

——私は組合運動をしたことがなく、こんどはじめて喜多パンに行って、みんなが一つの気持でたたかっているのをみて感激した。そして、親や兄弟のように迎えてもらって何よりもうれしかった。あまり丁重に扱ってもらったので「最中」を二〇〇円買い、四〇円のおつりをカンパしてきた。……今まで、自分の会社がどうしてつぶれたのかを知らなかったが、こんどの学習会で三井や三菱、住友、日立などの大会社によってつぶされたことがはっきりわかり、人にもそのことを簡単に話すことができるようになった。

——私は、いま活動にたいする考え方、たがいにいたわりあう理解にとぼしかったと思う。交流は、その点にたいして実によかったと思う。

——喜多パンと交流会をもったとき、もし聞かれたら何をしゃべったらよいかわからなかった。しかし、時間が過ぎて行くにつれて自信が出てきた。私が一番感じていることは、やは

り自分で人中に出て、よく聞いてしゃべることが大切だということです。それには、みんな団結するといけないうる。

——今まで自分は色々迷った。書いても書きつくせない。だが、いま思っていることは、企業倒産が多い中で何処に行っても同じだということだ。そう自分に言いきかせている。どうせたかうなら、この磁石だと思う。もっとも自分のなやんでるとき、腹を打ちわって話すことができるようになったら、労働組合は勝てるのだと思う。

感想文は、短いもの、長いもの、いろいろあった。そのなかに、「団結と自由と笑い」という一文があった。この感想文は、少し理屈っぽいが「交流会」のなかでえたものを、実によく表現しており、東京磁石の幹部たちも多くのことを学ばされた。

——私は、最近一つの問題につきあたっていました。それは、「団結と自由」という問題です。磁石の闘争が今日までつづき、多くの成果をみていますが、それは団結があったからです。私はそう思います。でも、そのなかでいろいろの乱れもありました。それが「自由」の一つのあらわれです。

「自由」……これはすばらしいものと思っています。しかし、その「自由」が、団結を弱体化する要因にもなっているのです。それでは、団結を高めると「自由」が侵されるのか……

：私はそうなくても仕様がないと考えておりました。過去二十数年の私の生活をふりかえってみて、あらゆる団体生活の中での団結はすべてそうでした。

「団結」……そこには「自由」というものは名前だけで、実在しないと思いついてきました。私は、ほんとうをいって自分がわからなくなってきたのです。ところが、喜多パンに行き、私は自分のいままで考えてきたことが間違っていることに気づいたのです。そこには、団結も、そして多くの自由も、笑いも一緒にあるではありませんか。今でも、あの姿が頭に焼きついて離れません。そこには、夢と一部の本の中にしかなかったみんなの世界、働くものの世界、貨幣もいらない理論の上でのみ考えていた共産主義の世界が、小さな世界ですが喜多パンに生まれている。

私は、自由主義とか共産主義などには余り知識がない。でも、団結していて、そこに笑いと「自由」が同位している社会があることを、この眼でみた。このこと一つを発見したことでも、こんどの学習会の催しに心から有難うをいっておきたい。

先輩争議団の経験に学んで

中国には、「有理、有利、有節」という言葉がある。理にかなない、利益があり、節度のある

方針こそ、たたかいを勝利させるカギである。と同時に、全員が一つになって方針を実践にうつすことである。共通の実践がなく、共通の苦しみをともにすることができなくて、どんな立派な方針を出してみても、それは画にかいたモチにすぎない。

共通の実践にもとづいてはじめて、生きた学習——その一部としての先進争議団との経験交流が役に立つのである。しかし、先進争議団の経験を学ぶうえで注意しなければならないことは、それをけっして猿真似式にあてはめてはならないということである。相手が違い、条件が違い、味方の状態も違う。

必要なことは、どのたたかいにも共通な一つの原則——統一こそ最大の武器であるということとを、あたえられた条件をどう生かし、適用しているかを学ぶことである。いいかえるなら、他の争議団の経験をよく分析し、批判的に教訓を汲みとるということである。

経験交流のすばらしい力は、生きた人間が自分たちの苦しみより数倍も困難な状況を乗りこえ、克服し、あかるくたたかっていることを知ることから出発する。百の理屈より一つの実例である。一般組合員同士の交流は、東京磁石の場合のように、豊かな、なにものにもかえがたい大きな力となって結実して行く。

「日本ロールに行ってほんとうによかった。確信が湧いた」——先進争議団を訪れ、交流し、それがきっかけでたくましく成長していった争議団は数多くある。かつて、日本ロールが

先輩争議団の経験から学び、それをさらにこえる前進をとげたように、喜多パン、東京発動機は日本ロールに学び勝利をかちとっている。いままた、東京磁石が喜多パン、東京発動機に学んでいっそうのたたかいの前進をたたかいとっている。

三協紙器や正路喜社が、六カ月もかかって克服した問題を、日本ロールや喜多パンの仲間たちは、二カ月で克服し、大衆的団結、共闘、法廷闘争、学習、生活対策などでいっそう進んだ新しい教訓を残した。一九六〇年代後半の日本労働運動の歴史のページに、これらのたたかいはきつと新しく成果と教訓を書き加えるに違いない。

闘争財政

あきらめず、何回失敗しようとも

争議突入もない東京発動機の組合員が、ジュースの行商カンパで、ある地域に入った。もちろん、闘争財政をつくりだすことが主目的だが、同時にたたかいを訴えることも大切な行動目標になっていた。

「今日は、奥さん。東京発動機の組合のものです。いま東発では、闘争資金を稼ぐためにジュースを売っています。一袋一八〇円です。買って下さい」

出てきた奥さんは、返事もしない。そこで、重ねて「ご協力ねがいます」とつけ加えた。すると奥さんは、「いま家では、そういうジュースはのんでおりませんから」といった。

「ああそうですか。どうも……さようなら」すぐすと隣の家へ。だが、その家も買ってくれない。次から次へと行く先ぎでことわられてしまった。

仲間はがっかりして帰ってきた。

しかし、このような失敗は決してむだにしてはいけない。さっそう参加者全員で討論した。この討論の中で、はじめて先進的な争議団の教訓を生き生きとうけとめることができた。それは喜多パンの例である。

喜多パンの仲間たちは、工場閉鎖に反対し、工場をまもり占拠して行くために地域共闘に力を入れてきた。組織されていない市民とも、幅広く手を結び、その力に依拠してたたかいをつづけてきた。

あるとき、母親たちから子どもたちの安全な遊び場がなくて困っていることを聞いた。さっそく組合で討論し、占拠している工場を解放して、その要求にこたえた。

地域の子どもたちは、「喜多パンに遊びに行くよ」と母親にいう。喜多パンの名が、こうして広がっていった。そして、この結びつきを土台として、「喜多パンです」といって「最中」の行商カンパに出かけた。母親たちからは支持された。心よくカンパに応じてくれた。苦しみや要求もきくことができた。ここには、訴えるものと聞くものとの共通な基盤があった。

喜多パンのこの実践的な教訓を、東京発動機の仲間はさらに深めていった。援農活動の中で

荒廃してゆく農村を身をもって知った仲間たちは、畑でくさっている野菜をみて、この野菜をさつそく地域（赤羽団地）にもち帰り、行商カンパをすることにした。赤ハチマキ姿でたたかいのピラを配りながら、主婦たちに安いキャベツや大根を一軒ごと訪ねて売って歩いた。だが、またも失敗した。

主婦たちは、赤ハチマキ姿をみて敬遠した。仲間たちは討論した。「赤ハチマキ姿がいけなかったのだろうか」「いや、そうではない。たたかいを訴えることすらできなかったではないか」

そこで宣伝カーを入れ、マイクでよびかけることにした。まずピラをいれておいて、マイクで訴えた。ポツポツうれるようになった。もっと効果的に訴えようということになり、文工隊もつくった。宣伝カーでよびかける。歌ごえが流れる。子どもたちが集まってくる。主婦たちも、子どもたちにつられて集まってきた。

仲間たちは、まず自分たちのたたかいについて訴えた。農民の苦しみも話した。これにたいして、水不足から物価の値上り、内職の労賃の安い話など主婦たちの声がはね返ってきた。こんどは成功した。トラックにいっぱい積みこんだ野菜は、どんどん売れた。

このように何回失敗しようと、たたかいは断固つづけねばならない。失敗の原因をあきらかにし、他のすぐれた経験に学び、みんなの創意を発揮すれば、困難は必ず克服されることを、

この東京発動機の仲間の貴重な経験は教えている。

「自力更生」を合言葉に行商活動

正路喜社労組も、企業閉鎖全員解雇の攻撃をうけて争議に入ってから三年九カ月（六五年七月現在）たった。いまでも、ごく一部分を除いて大部分の組合員がアルバイトもせず、たたかいに明けくれる毎日を送っている。ホワイトカラーの労働組合である正路喜社労組は、正直なところ戦闘的な組合ではなかった。その組合が、どのようにして財政をささえてきたのだろうか。その苦しかった財政活動のあゆみをふりかえてみると――。

やめていく仲間たちにも、解雇予告手当、退職金手当は支払われておらず、解雇前一カ月の賃金も未払いのままという状態の中で争議にはいった正路喜社労組は、闘争に入った翌日から「生活資金」を心配しなければならなかった。

最初の三カ月は、独身者は月額四〇〇〇円、家族持ちは一万円の金で生活。だが、わずかな闘争資金は、すぐ底をついた。この時期の財政方針は、「金がなくともたたかう」という決意を固め、「全員がカスミを食っても生きぬき、たたかい抜こう」という合言葉で頑張った。闘

争にはいつて最初にむかえた新しい年は、上部団体の全国一般からの借入金で息をついだ。

組合員のほとんどは、わずかばりの貯金を生活費の一部に引きあて、新婚早々の仲間は奥さんの貯金をすべて吐きださせた。妹の結婚資金を引きだした仲間もいる。

六二年一月からは、失業保険を受給した。同時に「お菓子」の行商カンパを始めた。カンパ収入は、すべて闘争資金にまわした。生活は、失業保険金の範囲内でまかになったが、そのわずかばかりの金額からさらに二割を組合に積立て、上部団体からの借入金の返済にあてたのである。失業保険受給中には、完全に返済した。

失業保険切れとともに、お菓子、衣類、毛布などの行商活動に重点がおかれ、長期体制による「自力更生」を合言葉に奮闘した。しかし、正しく闘争を発展させることと財政活動とが有機的に結合されないという弱さが生まれ、ただ「稼がねばならない」ことが強調された。

こうしたなかで、闘争から離れて他に就職した百数十名の組合員の要求だった未払い賃金、予告手当、退職金を獲得した。これによって、多額のカンパが寄せられ、財政の危機を救った。この苦しい時期の中で、生活の実態に即し、学歴、年齢、性別を問わず最低生活費をきめ、「生活費体系」をつくることに成功した。

闘争突入二年目にはいつて、全員解雇撤回を要求してたたかっていたエスエス製薬労組が勝利し、多くの教訓と激励をえた。一般的にがんばり、さまざまのたたかいに取りくむだけでは

なく、長期路線の上になって地域とマスコミ労働者との共闘をつくりあげることがきめられ、行商カンパの範囲を拡大した。たたかいをひろめ、敵を包囲する観点と結合し、総評、中立、全労系を問わず全都六〇〇の組合で行商活動を行なった。六〇〇の組合に受け入れられるには、二〇〇〇を越える労組を訪ね、たたかいを訴えねばならなかった。この経験は貴重だった。そして、六〇〇の支援組合の存在は、それが行商物資を売ってくれるというだけのつながりであっても、動揺や不安が襲ったとき、なによりの力強いよりどころとなった。

たたかう労働者は飢え死にしない

三年目の春を迎えるころから、闘争方針も、財政方針もあらたな発展の段階に入った。正路喜社労組は、地域におけるさまざまなたたかいの中心となり、数少ない組合員はいろいろな組織の役員として運動の中軸となってはたらいっていた。だが、共闘はまだ底の浅いものであった。組合書記局、幹部との共闘から、職場の労働者との共闘へと活動が強められた。

このような状態の中で、東京地裁であらそわれていた東京放送、毎日新聞の破産債権確定訴訟の判決がおりた。組合の「債権者としての資格はない」という主張は受け入れられなかった。これが確定されると占拠している建物も、凍結されている一億近い金も、法的にはこれらの大

口債権者にゆずりわたされることになる。組合は、ただちに控訴の手続きをとった。ところが、その訴訟費用として四二万円が必要だった。期間は二週間しかなかった。組合は、訴訟救助の再申請をすると同時に、カンパと署名活動をはじめた。カンパ帳と署名簿は、相手方の東京放送、毎日新聞の職場、高裁の書記官室までまわっていった。こうして、二週間で四二万円の金は集まった。それと同時に、〃訴訟費用救助〃の決定をたたかいとったのである。

共闘がふかまり、敵は動揺し、そのうえ組合財政に訴訟費用救助決定によりカンパの四二万円が残った。まさに一石三鳥であった。明確な方針をもち、断固としてたたかいを進め、広範な労働者に支援を訴えるなら、たたかいを支える財政は確保されるという確信を、仲間たちは強くもった。財政方針も、職場のひとりひとりの労働者に依拠した活動に重点をおくことが強調され、行商カンパも衣類、毛布からチョコレートに物品をかえた。民主的な映画の上映運動、特技を生かしての看板、装飾のアルバイトもはじめた。

足かけ五年のきびしい闘争財政確立のたたかいは、どんなに困難であっても〃必ず打開する〃というど根性を育てた。指導部の一人はいう。

「〃必ず打開する〃といっても、もちろんいつまでも苦しいのです。楽になることなんかあり得ないでしょう。毎年、春闘を迎えるころになると、私たちは賃下げの討議です。一昨年までは、一律賃下げでしたが、昨年からは討議の中で自発的に賃下げを申しでることにしまし

た。きれいごとではすまされません。血を吐くような討議ですが、真の団結はここから築かれていくのではないかと思います。まさに、困難は乗りこえるためにある、といえますね」
こうして正路喜社労組は、以上のたたかいの経験を総括し、闘争財政の教訓としてつぎの五つにまとめて闘争中間報告書に書きこんだ。

(1) 財政は闘争の鏡である。たたかいの方針を明確にし、それにもとづいて断固たたかうことが最良の財政対策である。

(2) 金があることは、勝利を保証しないし、たたかう労働者は飢え死にしない。

(3) 生活費の討議を徹底して行なうことが団結を強化する（一人が万人のために万人が一人のために、という自己犠牲の思想で武装するうえで欠かすことができない）。

(4) たたかいを訴え、共通の敵を明らかにし、職場の一人ひとりの労働者に依拠して財政を確立する。

(5) 全労働者から課せられた任務にたいするカンパであることを忘れてはならない。

賃金をうけとり解雇撤回闘争

不当な首切り攻撃を受ければ、それがいかに不当であっても、その日から生活の道を奪われ

てしまう。

ところが、私教連の實踐学園の三名の仲間たちは、解雇されたその日から、生活の道を奪われずに、学園経営者から引きつづき賃金を支払わせ、不当な解雇と長期にたたかってきた。賃金を受けとって解雇撤回闘争——まことにものゝけなす話である。

それは、つぎのようなたたかいの結果、かちとられたものであった。

学園経営者は、解雇通告にたいし、「不当な首切りは認めない」と訴え、教壇にたちつづける教師に「立入り禁止」の仮処分申請で対抗してきた。組合は、ただちに「地位保全」の仮処分を申請してたたかった。たたかいをより大衆化させるため、組合は「判決をだすなら両方を一緒に出すこと」を要求、生徒や父兄に訴えた。それは、当然の要求であった。だから、生徒も訴えを支持し、裁判所にも押しかけた。

大衆闘争の盛りあがりの中で、裁判所は「立入り禁止」の仮処分申請を却下、組合の「地位保全」仮処分については一年以内に判決を出す、但し、学園は判決確定の日まで毎月賃金を支払うこと、解雇された当事者は組合事務所以外に立入らないという和解命令をだしたのである。この結果、賃金を受けとって解雇反対闘争という事態が生まれたのだった。

三菱樹脂の高野達男さんの場合も、これと似ている。彼が解雇されたのは、学生時代の自治会活動が社風にあわないという理由である。しかし、一年間の裁判闘争で彼は勝利した。経営

者はやぶれた。そこで経営者は、彼に賃金だけを払って職場復帰を認めない戦術をとった。つづいて、寮を新築し、移転のさいに新しい寮に彼の部屋をつくらず、事実上、彼を寮からも追い出した。だが、彼は経営者にかわりの下宿を探させ、権利金を払わせ、下宿代も毎月支払わせることにしたのである。それだけではない。彼は、下宿には風呂がないので銭湯代も出すよう要求し、あくまで復職を貫徹させるたたかいをすすめている。まさに、敵の兵糧でたたかうという精神を、みごとに実践しているといつてよい。

また、こんなたたかいもある。

私教連傘下の帝京学園教職員組合（東京都板橋区板橋町六の三五六九）の解雇反対をたたかう仲間の一人は、病弱の妻と子どもをかかえ頑張ってきたが、妻の医料費、子どものミルク代、ガス、水道、電気料、アパートの部屋代などがかさんで苦しんでいた。借金も限界があった。

そのうちに、妻がかばかしくない病氣回復に新興宗教の信者になり、朝夕病魔を追いだすためのお題目をとなえるようになっていた。この事態に、彼はいっそう苦しんだ。このままでは、長期にたたかっていく自信もわいてこない。そこで彼は、生活の保障を国と東京都に求め、「生活保護」をとってたたかうことを決意した。しかし、筋道としては当然なことであるが、「生活保護」をとるということは転落のように思えてならない。大学卒のインテリ——教師として、なかなか踏み切れないものがあった。でも、生活に負けてたたかいを放棄すること

は許されないことである。

彼は悩んだ。妻とも何回も話しあった。妻は、外聞を恐れた。自分もそんな気がする。生活保護をとるということは、自分が無能力者にでもなったように思えて――。しかし、彼はついに妻をも説得して、地域の健康と生活を守る会に入り、援助をうけながらたかいたいはじめた。そして、「生活保護」を認めさせることに成功したのである。

健康と生活を守る会の人たちと一緒にたたかうなかで、生活保護をとるということは決して無能力者ではないということを知った。守る会の人たちは、みんな心優しい人たちであった。妻も、のちには守る会の活動家の一人として活躍するようになっていった。

東京磁石川口工場の仲間たちの場合は、零細な下請鋳物工場の連鎖倒産でほうりだされた川口の鋳物労働者たちと共闘を組み、市議会に生活資金を要求したのである。市議会は、満場一致でこれを認めた。市長交渉がすめられ、倒産労働者一人あたり一万円を生活資金として借り出すことに成功した。労働者たちは、その後、要求を五万円に引きあげ、たたかいを前進させている。

ゴマ化しなく心の底から理解しあって

日本ロールの闘争財政は、アルバイト一五〇名、自主生産二〇名で、本部要員三〇名をふくめ二〇〇名の生活を完全プール制で維持してきた。

ところが、少ない生活賃金であるため、アルバイトで得た金額をゴマ化す組合員が出てきた。たまたま子どもたちの勉強会で、それが問題になった。第二組合、地域の子どももふくめて討論がはじまった。

「お前のオヤジは、アルバイトの金を全額だしていいじゃないか……」

やり玉にあげられたM君（二五）は、さっそく両親にそのことを伝えた。

「父ちゃんは、いつも争議は苦しいが正しいからやるんだと言ってきたが、アルバイトの金を全部組合へ出さないでゴマ化しているんじゃないか」

「苦しいからしうがない」と父はいった。「みんなが苦しんでいるのに、自分だけゴマ化すのはよくない。それじゃ、いくら正しい争議だといっても、ちっとも正しくなんかない」息子は批判した。「そんなに苦しいのなら、ぼくの毎月の小遣いはいらぬ。ゴマ化するだけはやめてくれ！」

父は、息子の真剣さに胸をうたれた。しかし、現実の生活は苦しい。「それじゃ、お前の小遣い分一〇〇〇円だけは余計に組合に出すようにする」と、父は妥協案を出した。息子は父の態度に腹をたて、家を飛び出た。ロールの組合員寮にころがりこんだのである。母が心配し

て追っかけてきた。

「子どものいうことはよくわかる。しかし、生活がほんとうに苦しくてつらい。ゴマ化しをやっていないみなさんに申しわけないと思っている。どうすればいいかわからない。どうか組合員のみなさんで、息子をまっすぐに育ててください」

母は、寮の組合員に深く頭を下げた。

この事件をきっかけに、組合員全体集会がひらかれ、徹底的な討議のなかから自己批判が自発的に行なわれた。かなりの組合員が、なんらかのゴマ化しをやっていることが明らかになった。しかし、同時にみんなが闘争の勝利のため一生懸命になり、心の底から理解しあおうと努力していることも、よくわかった。こうして、さらに質的に高い団結がたたかいとられたのであった。この集会ののち、M君がよろこんで家に帰ったことはいうまでもない。

財政は「団結」の重要なカナメ

以上にみてきたように、財政は団結の重要なカナメである。生活費の問題で深い意志統一ができれば、真の団結とはいえない。どんなに理論に通じ、活動的なようであっても、いざというとき自分の生活費をまっさきにきりつめられる労働者でなければ、本当に階級的な労働

者だとは言えない。まさに「財政は闘争の鏡」なのだ。

しかし、私たちはいつも思想的に高い労働者だけで争議をたたかうわけにはいかない。すでにのべてきたように、日常的な要求、実利実益を重視することをもう一度おもいかべてみる必要がある。この問題が、財政の面においてもあらためて前面にたてられてきたところに、争議団共闘の前進があった。労働者がすこしでも人間らしい生活に近づきたいと考えるのは、まったく当然なことである。争議団といえども同様だ。これが否定されるならば、労働組合も、階級闘争も、争議もなくなってしまうだろう。

重要なのは、労働者はたたかわなければ、人間らしい生活に一步も近づくことができないということを、この生活要求のたたかいの中で、早急に全体のものにするのである。その上にたって、＼ど根性＼と＼カスミを喰っても＼の問題を考えなければならない。

三協紙器も、エスエスも、正路喜社も、組合員の生活要求を無視していたわけではない。事実としては、むしろ重視していた方だろう。ただ、争議の重要な問題として、意識的にとりあげられ、研究され、総括されなかった。そのことよりも、いかなる困苦にも耐える労働者の＼ど根性＼をつくりだし、存在し得ることを訴え、それを重視した。そうしなければならぬ、そのことが第一に重要な運動の条件であったのだ。

しかし、今はちがう。現在は、いかに争議が大衆的にたたかわれ得るか、また大衆的な長期

争議として粘りぬくことができるか——このことが決定的に重要な段階にある。そして、たにかいはますますきびしくなっている。さらに、なおいっそう厳しくなるだろう。

東京磁石の仲間は、失業保険の給付を停止させられた。北海道のタクシーの仲間は、生活保護の不正受給をでっち上げられて逮捕され、起訴されている。

日経連は、一九六五年四月二日の定時総会で「現段階に処する経営者の見解」を発表し、「合理化の推進、期待される人間像づくり」とともに、「社会保障制度の再検討」をあげた。それには、「医療保険あるいは失業保険などの例に見られるごとく、社会保障にたいする安易な依存と乱用傾向が増大しつつあることはまことに遺憾である」として、政府にたいし「乱用を助長するがごとき制度上の欠陥是正を」行ない、「管理運用につき責任体制を確立する」よう命令している。これは彼らのいう一九六五年代の経営の基本戦略である「安定成長」のなかで、合理化の嵐をふきまくる一方において「社会保障」を圧殺していく戦争路線であることは言うまでもないことである。

たたかいは容易ではない。それは、財政の場合もまた、常に前人未踏の地を進まねばならないだろう。しかし、たたかう労働者は、かならず道なきところに道をつくり、勝利にむかってまい進する。

家族共闘

夫の真剣な生活態度に心うたれて

日本ロールの高橋宏さんは、実直な組合員だったが、奥さんに反対されて争議が始まるすこし前に、組合を脱退してしまった。

闘争に突入してから、執行部ではもう一度高橋さんに、再加入するように説得した。ところが彼は、組合の説得工作以上に、奥さんから「この三人の子どもをどうするのですか。組合に入ってストに参加するのだけはやめて下さい」といわれ、なかなか態度を決しかねていた。

しかし、仲間たちはドレイ職場解放のスローガンのもとに、連日警察や暴力団の大弾圧に屈せずたたかっている。血まみれになりながら必死に守る仲間たちのピケットをかくくぐって就

勞する毎日は、耐えがたかった。彼の心は、だんだんと奥さんの反対にもかかわらず、再度組合加入の方向へと変っていった。このような主人の変化に気づいた奥さんは、怒った。「こんなたのんでいても、組合に入るのですか。私がいうことより、組合の人のいうことの方が大事なのですか。それならかってにしてください。私は里へ帰ります」。最後は、夫婦別れの話にまでなってしまった。

彼は、悩みぬいた。ストに参加すれば、奥さんがいちばん心配しているように、その日から生活の不安が訪れるのはまちがいない。よる布団に入ってから、なかなか寝つかれない。しかし、彼はけっして自分の妻を話のわからない、どうにもならない奴だとは思わなかった。

一カ月後、彼は、ついに決意した。翌朝から、彼は会社への出勤をやめ、暴力団のゲンコツと機動隊の警棒が雨のようにふりかかるビケに参加し、仲間とガッチリとスクラムをくんだ。さあ、大変だった。奥さんは、本当に怒ってしまった。里帰りこそしなかったが、いっさいの家事をほおりだしてサボタージュに入ってしまったのである。

彼も、大変だった。昼間は仲間とストライキ。家に帰れば、こんどは奥さんのストライキ。夫婦ともども、要求貫徹のストライキ合戦になってしまった。

ところが、彼は奥さんのこのストライキには、文句一ついわなかった。毎朝五時に起きて御飯をたき、子どもを起して食事をさせ、学校に送りだし、家の中から庭の掃除をすませ、奥さ

んの茶ワンも食卓にそろえて、かけつけるようにピケに参加する。これを、彼はまだ肌寒い三月の初めから、五月まで、実に三カ月間も続けたのである。

さしもの奥さんも、この頃から、夫のあまりにも真剣な生活態度に心を動かされ、自然に夫たちのたたかいこそ働く者のやむにやまれぬたたかいにちがいないと思うようになってきた。そしてまた、このたたかいに参加している夫こそ、苦勞をともし、信じあっていける人にちがいないとあらためて見なおした。こうして、夫婦のよりが戻った。そればかりではない。彼の奥さんは、今では日本ロールの家族会の中心的な活動家になっている。

信頼される夫、父親になるために

全自交の司労組では、連日のように暴力団による暴行傷害がくりかえされた。

朝、元気で家を出たのに、夕方帰ってくるときには、顔から手から傷だらけ。司労組の主婦たちは、不安におそわれた。

しかし、司の仲間たちは、断固としてたたかった。すると、敵は暴力団を職場ばかりでなく、一人ひとりの仲間たちの家庭にまでさしむけ、あらんかぎりの強迫、暴行で主婦と子どもちにおそいかかった。こうなると、もはや職場とか、家庭とかの区別はなかった。そこで仲間

たちは、自分の妻も、両親も、また幼い子どもたちまでも、敵の攻撃を粉碎し、妥協することなくたたかう戦闘的な家庭をつくりだす以外に方法のないことを悟った。

仲間たちは、苦しい生活と暴力団の攻撃の中で、たじろがない戦闘的な家庭の団結をつくりだすために徹底的に討論した。そして、でてきた結論は、妻や子どもたちから、本当に信頼される夫であり、父親でないかぎり、妻の戦闘性を引きだし、家庭の団結をたたかいることは困難だということであった。

仲間たちは、一人ひとり自分の家庭生活について自己批判を開始した。ある仲間は、疲れて家へ帰ったら、子供が白バイのおもちゃで遊んでいるのをみて、カッとした。いきなり、「バカロー、こんなものあずけやがって」と、怒鳴りながら、白バイのおもちゃをとりあげ、窓の外へなげ捨ててしまった。そして、奥さんに向かって、「おれたちが、この白バイにどんなに苦しめられているか知らないのか」といった。日ごろハイタク労働者が、道交法の名のもとに弾圧され、それとしかにたたかっているかということを、ふだんろくに話もせず、いきなり白バイのおもちゃをなげ捨てるのだから、これはおだやかではない。

また、ある仲間は、警察や戦争を美化したテレビを、子どもたちが見ていると、いきなりチャンネルを切り替えてしまう。だから、子どもたちは、父親が帰ってくると、見たくてしかたがなくともチャンネルを切りかえてしまう。

さらに、ある仲間は、「おとうさん、おかえり」と出迎え、そばに寄りそい、だかれるようにする子どもに、「うるさい。おとうちゃんは疲れているのだ」と、どなりつける。だから、子供たちはだんだんと父親の顔色をうかがうようになってしまう。

こうして、いろいろ話しあわれた。そして、このなかで明らかになったことは、仲間たちは共通して、家庭では全くといっていいくらいに、手や足、そして身体を動かさない暴君になっているということであった。こんな家庭生活の中で、どうして妻や子供たちの積極性を引きだし、たたかう家庭の団結をかためられるか。

そこで仲間たちは、一人ひとりが家庭生活をただちに改めることを確認しあった。一人の仲間はそれを開始した。結婚してから一五年、ただの一度もやったことのなかった自分の布団を、自分でたたみ、押入れにしまつする。これは、仲間の家庭にとって、革命的なできごとであった。第一に、奥さんがまず驚いた。いや奥さんばかりではない。子供たちまでが……。

たたかう同志として成長した家族

このような仲間たちの、具体的な一つひとつの実践は、たたかう労働者としての自己変革の課題とかく結合してなされた。自分が変えることによって妻をかえ、共にたたかう同志として

の信頼関係に発展するようになった。こうなると減法強くなる。仲間たちの不在をねらって、暴力団がおしかけてきて、おどしても、すかしても、また大金を積まれても、武装した家庭はびくともしない。ここまで、司の主婦たちは成長した。

このような階級的な自覚を、主婦たちがつようになると、組合が家族対策の一つとして指導してきた家族会は、自然と主婦たちの自主的な運営にまかされるようになり、さらに血のかよったものになった。主婦たちのことばをかりるならば、「親でもない、兄弟姉妹でもない、私たちの集りである家族会が、親・兄弟以上のきずなで、かたく結ばれるようになりました」「病気になるれば、すぐだれかがかけつけてくれる。そして、親以上にめんどろをみてくれる。こうなると、不安はありません」「自分の夫についても、今では文句をつけるところがありません。ただただ、早くめざめていたら、夫の足を引っぱるようなことはしなかったのにと申訳なく思っています」と。

ある主婦は、こうもいった。「私は、結婚というものを二度もしたような気がしてならないのです。一回目は、ブルジョア的な思想の中で、もう一度はこの争議の中で。なによりの喜びは、階級的な自覚をもつようになって、本当に助けあい、はげましあっていける夫婦になれたことです」と。

このように成長した司労組の主婦たちは、次第に一人ひとりが自己運動を開始するようにな

った。それぞれの家の回りで、要求を組織してたたかう活動家になった。そして、民主的な婦人組織や生活と健康を守る会に入ってたかうようになると、夫たちのたたかいと、その展望についても、自らのたたかいや活動の経験にてらしながら深め、正しく受けとめることができるようになった。

司労組の仲間たちは、このようにして東京都内に、千葉に、そして埼玉県にと散在する地理的な悪条件にもかかわらず、家族会を通じて主婦たちを団結させてきた。家族会は、月二回定期的に開き、お互に活動を報告し、学び、組合の当面のたたかいと、主婦たちの任務を確認しあい、司労組のたたかいと地域のたたかいを統一的におし進めてきた。主婦たちは、暴力団を撃退したばかりか、今では司労組の共闘を深く厚く、広いものに発展させる大きな力になっている。

司労組の仲間は、こういっている。

「家族対策を非常に重視してとりくんでから、脱落する仲間が出なくなりました。それから、主婦たちが急速に成長し、階級的自覚を深めるようになったのは、なんといってもそれぞれの地域で、いろんな組織に参加し、活動家になっていったからだと思います」と。

全国からの激励の手紙にはげまされて

富士アイス労働組合（東京都千代田区丸の内）の塩田さんは、今日もまた深夜、初産を前にした奥さんのまつアバートにかえってきた。奥さんは、カンカンに怒っている。「これからどうするのですか。生活してゆくあてがあるのですか。赤ちゃんが生れるというのに……」

彼は、答えることばがない。

「もう、赤旗をふるのはやめてください。一向にらちがあかないではありませんか。いちど首を切った人を、もういちど会社がつかうなどということが、あろうはずがありません。どこかに、一日も早く就職して、私が安心してお産できるようにしてください。さもないときは、赤ちゃんが生まれたら、あなたにあげます。子どもをおんぶして、好きな赤旗をふればいい。私は、私ですきなようにさせてもらいます」

目に涙をいっばいとかべ、奥さんは訴えた。

彼も、もうすぐ父親になろうとしているが、自分の行動はどうだったのだろうか反省した。いつも、むずかしい理屈をならべて、妻のいうことを聞こうとせず、どなってみたり、妻に對しての思いやりは全く欠けていたようだ。これからは、妻の立場に立って、家庭生活を考え

よう。

それからは、どんなに夜おそく帰ったときでも、朝は奥さんより早く起きて、炊事から洗濯と奥さんの手となり、足となって働いた。

彼は、組合にも妻が苦しんでいることを報告した。組合では、さっそく塩田さんの一家を励めます会を組織して、具体的に一つひとつ問題が解決できるよう援助することにした。

一つには、彼の奥さんが安心してお産ができるようにすること。二つめには、奥さんにたたかいを理解してもらうために、彼だけにまかせずに、励ます会の会員がでかけていって話あい、彼のたたかいは労働者の基本的権利の問題であって、けっして塩田さん一人の問題ではなく、全労働者の問題であることを理解してもらう。

組合は、ただちにカンパを広く訴えた。そして、奥さんを月に二、三回訪問して、塩田さんのように不当な弾圧をうけてたたかっている多くの仲間のいることを話し、たたかえばたたかうだけ、支持する仲間の増えることを、また勝利の展望のあることを話した。彼の努力と、仲間たちの援助によって、奥さんもたたかいを理解するようになり、次第に孤立した考えから解放されていった。

そんなある日。奥さんはアカハタ日曜版に訴えをだした。

「来月出産を前にして、夫は首を切られてたたかっています。まだ、ベビー用品がととのっ

加する主婦へと成長した。

新しい愛と規律の中で育つ子供たち

たたかう労働者の子どもたちは、父や母、兄や姉のたたかいのいぶきのなかで、すばらしい労働者階級の後継者として成長している。

中学二年生の女の子は、「私のクラスには、日本ロールで働いているお父さんもっている人は五人います。しかし、私の父だけが組合員です。首を切られているからといって、私はちっともはずかしいと思ったことはありません。むしろ誇りに思っています。組合は、労働者にとって大切なものだから。私は、〃お父さん、最後まで頑張ろうね〃と父にいうと、父も〃大変だけど、頑張るさ〃といました。私の父は、説得班の一人です」と書いている。

争議団のたたかいの中で成長しているこの子には、きびしい生活の暗いあとかたはみじんもみられない。そこには、素直な親と子の呼吸がある。

また、ある中学一年生の男の子は、「組合がストに入ってから、会社のえらい人がきて、父に〃あなたは管理職だから、どちらの組合にも入ってはいけません〃といわれた。父もストをやったかと思う。しかし、父はできなかった。自分が正しいと思う方をえらばよいの

に、正しいことの方がつらく、苦しくとも、それをのりこえてこそ、正しさがでてくるのではないか。そのてん、兄がストに加わったときほど兄がたのもしく見えたことはなかった」と、すんだ瞳はシャープにとらえている。労働者が、たたかわないかぎり、みじめであることを知っているのだ。

アイデアルの奥田君の三人の妹たちは、兄が心配なくたたかえるようにと、新聞配達のアアルバイトを實行して、兄にかわって家計を助けている。この三人の妹たちも、りっぱなたたかう戦士なのだ。

たたかう労働者の子供たちには、非行少年や少女はいない。一日、一日のきびしいたたかいの中で、労働者階級の子にふさわしく目をみひらいている。このような話は、たくさんある。昨年、高校進学が決定していた東京発動機の仲間の子どもは、企業閉鎖とたたかう父をみて、「お父さん、僕は高校へいくのをやめたよ」といい就職した。そのわが子をみて、「よせよせ、なんとしても高校だけはいかなくては」といったけれど、一面淋しくもあったが、なんとなくたのもしさも感じたとき、年配の一人の労働者は語っている。

たたかう労働者の子どもたちの生活は、たしかにきびしい一面をよぎなくされている。年の瀬のさしせまった日本ロールの組合事務所では、執行委員の一人が年配の組合員にきいた。

「きのうのクリスマスはどうした」

第二組合の家庭では、親子づれで出かけ、買物包みをかかえて帰ってくる。たまの休みをとった組合員が、金がないのでどう過したか心配だったのだ。

「いや、なにね、うちの子は電車に乗せさえすれば喜ぶもんだから、きのうは親子三人で山手線をぐるぐる二回まわってきた。とっても喜んでくれてね……」

これが、たたかう労働者の年に一度のプレゼントなのだ。しかし、子どもたちは淋しがりはない。年末には恒例の「団結もちつき大会」をひらく。バス九台、一〇〇〇名もの全国金属の若ものたちが集まってきて、一五俵のモチをつきあげる。いつも世話になっている近所の人たちにも届ける。子どもたちにとって、一年中でいちばんうれしい日だ。第二組合の子ども、地域の子どももやってくる。みんなは食べる。若ものたちはダンスをはじめ、子どもたちと一緒に野球やバレーボール、なわとびで一日を楽しく過す。こうして、子どもたちは新しい愛と規律の中で育てられて行く。

日本ロールでは、たたかいのなかでたくましく成長する子どもたちのために、「子ども会」を組織した。ここにあつまる子どもたちは、「学校」とよんでいる。たしかに「学校」である。子どもちの集団的成長をたすけ、自主性と自治の気風を高めながら、日々の勉強会を發展させてきている。

ある中学一年の男の子は、「先生は日本ロールのストに加わっている人。普通の塾とちがっ

ですごくおもしろく勉強できる。第二組合の子とも仲よくやっている」と作文に書いている。夏休みには、第二組合の母親たちからの熱望で、学年別学習塾も開いた。すべて無料である。子ども会を指導している責任者（日本ロールの仲間たちは「校長先生」と呼んでいる）は、つぎのように「子ども会」のことを語る。

「……ある日、地域の一人の母親が、組合事務所にきて、『うちの子どもをなんとかしてくれ』と頼むわけです。よく聞いてみると、ぐれていて手におえない子で、学校でもどうにもならないというのです。母親は争議団の子ども会に入れてなんとかしてくれというわけです。それで入会させました。魚が水をえたとでもいうのですかね、いい子になりました。とにかく、めっぼう勉強の弱い子でしたが、いまではどうしてどうして、たいしたもんですよ……」

このように、地域の人たちから、いや子どもたちからも、日本ロールの争議団は支持され、信頼されている。

家族との共闘なくして勝利なし

家族との共闘、家庭の団結は特殊な問題ではない。他の職場の労働者、他階層の人たちと共

闘し、団結するのとまったく同じ問題である。だから、家族問題を特別扱いするのではなく、共闘と団結の原則——その普遍性を強調することが、なによりも重要である。

これがはっきりすれば、家族との共闘、団結は強まる。家族も一人の人間である。要求をもち、自分の意思で働き、たたかう力をもっている人間なのだ。

第一に要求をつかみ、第二にその要求実現に努力し、第三に敵を明らかにしつつ、第四に自らたたかいにたちあがり、組織に加わるよう、これを援助、強化することである。家族は、好むと好まないにかかわらず一番緊密な共闘参加者なのだから、私たちが誠実に共闘と団結の原則を実践すれば、いっそう緊密な同志になりうる。これが、いいかえるなら特殊性である。にもかかわらず、家族との共闘がむずかしいのは、家族は私たちの態度や行動を常に実践的に裏表から観察しており、ゴマ化せないからである。だから家族と共闘が組めない労働者は、だれとも真の共闘は組めないだろう。しかし、逆もまた真であって、ゆるぎない完全な共闘と団結がどこにもないように、家族との団結上の問題がなくなってしまった労働者も、また一人もいないだろう。ここでも、困難は再生産される。敵がいるかぎり、問題なくなることはありえない。しかし、私たちは新しい困難を克服して、必ずたたかいを前進させることができる。

指導と団結

朝出勤時の東京駅から、丸の内のビル街にサラリーマンが吐きだされていく。みんな急ぎ足で、信号が変るのもまちどおしげである。

その中に、三菱樹脂の高野達男君もいる。午前九時ギリギリになると、みんななりふりかまわずかけだす。彼も一緒にかけて、巨大な三菱のビルに飛びこみ、同僚のうしろについてタイム・レコーダーの前にならび順番をまって打刻する。みんなは、タイム・レコーダーの横から出勤カードをとりだすが、彼だけは、自分の鞆からとりだして打刻する。会社は裁判にまけたが、職場には入れず、事実上首をきられたままだからだ。遅刻をすると、自分で赤字で書き入れることにしている。これがもう一年も続いているのだ。つまりぬ気やすめと思うだろう。しかし、これこそ、彼を勝利させた職場の団結をつくり、守る会をひろげた原動力ではないだろうか。資本家どもに、秒きざみで搾取されている職場の仲間の強制された規律を、自発的に自

分に課して、連帯を実践的に追求しているのである。団結をつくりあげるのは、理くつではなく、実践である。

戦後最大の「倒産旋風」のなかで

靖国神社の森に近い静かな高級住宅街・千代田区麹町三番町にある三星電機労働組合の争議が一人の脱落者もなく解決した。六五年四月一九日無期限ストに突入以来八日ぶりであった。

この三星電機労組は平均年齢二三・四才、組合員数二四名。このうち男子八名、女子一六名。若い女性が三分の二をしめる組合である。組合結成以来二年、資本の猛烈な組合切り崩しにも耐えて組合に残った二四名だったが、いわゆる筋金入りと目される活動家は少なかった。

一六名の婦人の圧倒的多数が、「結婚適齢期」である。彼女たちを主体にした労働組合は、上部団体をもっていなかった。組織的には致命的とも思われる状況のなかで、とにかく「工場閉鎖、全員解雇」に反対して、無期限ストに突入した。

ところで一九六四年一年だけで倒産した企業は四二二件（負債総額一〇〇〇万円以上）。このうち、一一四九件が東京である。六五年に入ってから六月までの半年間に、二九九〇件が倒産し、昨年の五割増になっている。しかし、このような「戦後最大の倒産旋風」に耐えてふみと

どまり、〃争議〃になった件数は、一割をはるかに下まわっている。数万、数十万人の労働者のほとんどが、未払い賃金、退職金はもちろん、なけなしの社内預金も〃凍結〃されたまま、さらにひどい無権利、低賃金の未組織労働者の大群のなかに放りだされている。

三星電機の場合も、工場部門——〃不採算部門〃の切り捨て〃合理化〃によって、約二〇〇人の労働者が、争議に入る前の四カ月間に、しつような退職勧告と就職あっせん攻撃に崩れ去っていった。下請五社にあっせんされた労働者も、全部未組織工場で、長時間労働と劣悪な労働条件のなかで、さらに一層の搾取と収奪に苦しんでいる。

このような「合理化の大波」のなかで、組合にふみとどまった二四名の若い労働者を支えた唯一の組織が、千代田区労協である。上部団体がなかったため、いわば親のない子供を近所の人たちで育てあげるように、地区労を中心とする地域共闘が支えた。

ストライキ突入の翌日には、電気、ガス、水道がとめられた。三日目には有刺鉄線のバリケードで封じ込められ、警察が出てきた。立入禁止仮処分も出された。……矢つぎばやな攻撃にもかかわらず、仲間たちは地域の仲間の連帯に支えられ、驚くほどの創意性を発揮し、一人の脱落者もださずにたたかった。水は、近所の人たちの好意で長い長いホースで補給され、出入口も急造のハンゴで非常口から隣接のビルの敷地を通る〃ホーチミン・ルート〃で確保された電気は、ラジオをつくる〃電気〃に強い〃労働者が独創的方法でつけた。

立入禁止仮処分の裁判を逆用して、裁判所に自主団交を勧告させ、裁判所→自主交渉→労働委員会→裁判所と、交渉の場を移しながらねばりにねばり続けた。その結果、警察も、暴力団も使い切れずに、ストに入るまで、既定の退職金（一人当り二・三万円）プラス・ステレオ一台というスズメの涙で追っ払おうとしていた会社の意図は打ち破られた。

解決金一人当り十数万円をたたかいとって一応たたかいは終結した。表面的には、「ゼニで解決した」。しかし、「戦後最大の倒産旋風」のなかで、ゼニもとれずに放りだされる何万、何十万という労働者のなかで、とにかく一定のゼニをとったのである。「たたかえばとれる」のである。それはそれとして、正當に評価される必要がある。

現在、二四名の労働者は、たたかいとったゼニを軍資金にして、解決後も未組織労働者に戻るのではなく、個人加盟の単一組織に加盟し、労働組合として活動して行く方針を検討している。

クシの歯の一本一本はか細いけれど

しかし、彼らは、はじめから、このような新しい解決をなし得るほど団結してはいなかった。二四名のうち三分の二は、「結婚適齢期」の若いセンサイな神経の女性たちである。争議

の局面が、スト突入当初の激動期から、表面的には一応平穏な状態にもどると、二四名のなかから、——とくに女性のなかから脱落者がでてきた。

若い男性の多い執行部は、「女の子が脱落しそうだから良い相手をさがしてくれ」と、千代田区労協傘下の組合にたのみこんだ。彼らによれば、男性の数が女性の半分なので、他の職場から恋人をあてがうことで団結できるというのである。

これは、若い労働者たちの間では一面の「真理」でもあろう。一九四五年前後に生まれたドライな層の間にも、案外根づよい女性蔑視の考え方が残っている。そして、そのような男性が指導部の多数を占めているだけに、ただちに団結の問題にハネ返ってきた。

「交渉をどうするか」という大事な時点だったが、それはそっちのけで、「恋愛問題」の処理をめくり組合大会や闘争委員会の議論は二日も三日も空転した。

ストに入る以前から、闘争委員を好きな女性組合員が三人いた。お熱の入れ方に差はあっても、彼女たちは真剣だった。この問題について、執行部は「たたかいの最中に態度をはっきりさせたら、他の二人は脱落するだろう。だから、つかず離れずつきあえ」という態度をとった。

このような執行部の態度に、地区労の女性オルグは批判した。

「それはまちがいだ。女性べっ視もはなはだしい。一時は傷ついても、その彼女たちを援助し、支えてやるのが指導部の任務だ。必ず、このたたかいのなかで克服できるはずだから……」

同じ女性として、ふんまんやる方なく、指導部を批判した。しかし、答えは実に簡単だった。「それでいままではうまくやってきたのだから、やはりこの措置は正しかった」と。

その日の議論は、真夜中までつづいた。だが、結論が出ないままに寢床に入った。そして、ついに翌朝の全体会議で爆発した。

「AさんはBさんを好きなのに、他の二人ともつきあっている。執行部は、私たちを闘争に利用しているのか……」

「Cさんは執行委員のくせに、活動家の女の子はきらいだ、結婚するなら家庭的な女性がいいといった。これでは、たたかえばたたかうほど、私たちは結婚の相手にされなくなるのか……」

この発言が口火になって、「執行部は、仲間を信頼しよう」と口ではいうが、私たちを信頼していないじゃないか」という不満が一時に爆発した。

このころ、彼女たちの多くは、活動したいという積極性と、活動すれば結婚できなくなるのではないか、という悩みを共通にもっていた。だから、指導部が自分たちをどうみているかということについて敏感に反応し、それがぬぐい切れない不信となっていたのである。

この全体会議のなかで、とにかく話合いが足りないことを確認し、班体制をつくり、どんな問題でも話合う場を保障することにした。かろうじて、一応の手当はされた。しかし、ふたた

び問題が起った。

「みんなできめて、みんなで実行」されないことが原因だった。ここでもまた、意識の高いはずの指導部がヤリダマに上った。

ストに入って一カ月目の五月中ごろ、女性組合員Gさんが午前八時半に自宅から職場に出勤した。執行部は、掃除当番も、食事当番もしないで、寝ているものもいれば、ヒゲをそっているものもいた。彼女は自分の仕事を片づけると、誰にもいわずに家に帰ってしまった。原因は、「決めたことを守らない」ことだった。彼女は、呼びもとされたが、途中から帰った理由を、なかなか答えなかった。そして、最後に「もういいんです。解決しましたから……」といった。彼女のいう解決とは、「五月二五日にやめるつもりだったが、今日限りやめる」というのである。再び全体会議がひらかれ、「決めたことは必ず守る」ことを確認した。しかし、多くの組合員は、腹のなかではどうせまた守れないに違いない、と思い込んでいた。

地区労の女性オルグは、まさに女性らしく話をした。「櫛の歯の一本一本はか細いけれど、全部そろっているときは丈夫だし、髪をとかすことができる。しかし、なにかのきっかけで、一本歯が欠けると、ポロポロと欠けてゆく。Gさんがやめることは、始めの一本の歯が欠けることになるかどうかだと思う。私たち一人ひとり、とくに女性は弱い。その弱い一人ひとりが団結すれば、なんでもできる。とにかくがんばりましょう」

この地区労働の女性オルグは、組合員、一人ひとりの性格、生いたちをよく調べていた。脱落しそうな女性組合員の自宅訪問もよくやった。無口なGさんと話合うには、「ビヤホールにみんなで行こう」とさそった。Eさんは、「たたかいのなかでも遊べると思うと、なんとなくうれしくなった」といって、再び戦列にもどった。

このオルグは、「私は『落穂拾い』専門よ。事務局長は、私のことを『三星電機の『夢の鳥』だ』といっただけからかう。まあ、いってみれば、苦情処理係ね」と笑いながら話していた。そして『落穂拾い』のなかから、つぎのように多くの教訓を得た。

・組合決定で脱落しかかったひとに手紙をだす、といった形式ばった働きかけでは、むしろ反感となる。

・どんな小さな問題でも話し合える小さな横の関係を大切にし、それを発展させて組織的な人間関係につくり上げる。

・女性が多い場合、必ずいくつかのグループにわかれ、反目がある。しかし、そのなかにもすばらしい積極面があり、それをいかにひきだすが、指導部の任務になる。

・大衆路線とは、大変時間がかかり、めんどくさい遅々とした進み方をするものである。

・団結とは、ひとの痛さを自分の痛さと感じ、自分の痛さを、ひとの痛さのように処理できる人間関係をつくりだして、はじめてでき上るものである。

指導部の責任は極めて重くきびしい

このような事例は、多くの争議団のなかに無数にあるだろう。きわめて、平凡な事例ともいえる。しかし、団結をつくりだし、勝利を保証するものは指導部にあることをまず確認すべきである。このために、指導部の責任はきわめて重く、きびしいものがある。その典型として、次に喜多パンの事例をあげよう。

喜多パンの若ものたちに、「よく頑張ったね」とたずねると、「よくわからなかったけれど、会社が、つぶされる前から、幹部は俺たちをよくめんどろみてくれたから……」と、見透しのつかないたたかいに、のこって頑張ってきた理由を語る。

喜多パンの委員長、書記長は三〇才台、組合員は五〇才前後の婦人数名をのぞいて、一六才から一九才の若者ばかりである。

話を聞くと、とてもきびしい。朝礼、夕礼といって、朝夕集会をもつ。アルバイトに行く組合員も、本部業務についている組合員も、みんな出席する。そして、みんな発言する。させられる。あいまいな発言に対しては、トコトンまで全員で追及する。

「みんな決めて、みんなでやろう」というスローガン通りにやってきた。たしかに、これ

はずばらしい。しかし、そんなことをやったら、たたかいから脱落していく人が、つぎつぎと出てくるのではないだろうか。「俺のところでは、とうていやれそうもない」という心配も出てくる。

だが、喜多パンでは、争議に入ってから脱落した組合員は殆んどいない。生活のあてもない争議をやりぬくのは大変なことだ。みんなの要求と、自発性に依拠して、みんなの能力と条件を考えて、たたかいにそれぞれ参加させなくては、けっして長もちしない。また同時に、大事にしすぎて、いわゆる甘やかしていれば、たくましく成長せず、ちょっと新たな困難があると脱落してしまう。どうしたらいいのか。これが争議団の指導部の悩みである。

どうして、喜多パンは、うまくいったのだろうか。一度、喜多パンの組合に泊り、一日生活を共にすると、その秘密はすぐわかる。

夕方、みんなが仕事から帰って夕礼が初まった。今日の活動の成果、つらかったことなどだされたあと、ある争議団との交流会で一言も発言しない組合員がいて問題になり、いろいろ批判された。気持ちよく相互批判と自己批判が行なわれ、集会は早く終わった。夕食をすませて、それぞれ地域の活動に散っていき、午後一〇時、一一時に帰ってきて床につく。執行部は、それからまた夜半まで会議をもっていた。

翌朝七時に起きて食堂へ行くと、昨夜おそくねた執行委員が、食事当番で若い組合員にみそ

汁をよそってやり、弁当をつめてやってアルバイトに送りだしている。

「おいよくねむれたか」

「風邪の方は、もういいか」

「おい、熱いお茶、ここにおいとくぞ」

「気をつけて、怪我するなよ」

といいながら、昨夜のあまったおかずをあたたためて、みんなにわけてやっている。聞くと、喜多パンでは執行委員が朝食の一切の世話をする事になっているのだという。若い組合員は、ヒナ鳥が親のふところを離れるように、お弁当をかかえてアルバイト先へ飛びたって行った。

執行委員は、どうしても夜おそくなる。それが、朝は必ず五時にきおて、毎日食事当番をするのだ。そして、一般の組合員に暖いみそ汁と弁当を保証する。これが喜多パンの団結のナメになっている。

喜多パンの組合執行部が、いつも全員を素直に、そして正直な気持につくりあげているカギは、この辺から組みたてられているのだ。

「幹部は組合員大衆に奉仕しなければならない」——これは指導者の鉄則である。首を切ら

れたものは、いつも生産点で搾取されている仲間に奉仕しなければならない。これも鉄則だ。組合員の利益、大衆の利益のために奉仕する立場が貫徹されているからこそ、追従にならずに、大衆路線を通していけるのである。そうしてこそ、攻撃を受けたすべての仲間を結集して、どんなに困難な、長期のたたかいもやりぬける。だからこそ、職場で搾取されている仲間たち、街で、農村で苦しめられている仲間たちに、争議を理解してもらい、ともにたたかってもらうことができる。

将来、必ずすべての労働者・国民はこぶしをあげて敵に迫る。その日を準備するためにも、私たちはたたかわねばならないのだ。

あとがき

私たちが、この『東京争議団物語』をまとめていた一九六五年の春から夏にかけて、労働組合運動の分野でいくつもの歴史的な事件が起った。

一つは、春闘における大量弾圧、弾圧政策の質的变化である。「日本中が争議団」のなかでも簡単にふれたが、マスコミの職場を中心に警官隊が踏みこみ、直接労働者を街頭にひきずり出している。組合の抗議にたいしては、たとえば大阪府警の場合、「ロック・アウトの手続きがどうの、憲法がどうのこうのというのは、三、四年前の夢物語だよ」といい、東京警視庁は「職場占拠は管理者からの退去要求があったのちもつづけられれば、業務妨害を伴っているかどうか、ロック・アウトがなされたかどうか、ということには関係なく住居不退去罪になる」と、そぶいている。つまり、〃自宅待機のストライキ〃以外は違法争議となり、刑事弾圧の対象、解雇理由となるというのである。

一方、この春闘での公労協のたたかいたいとしては、二〇万人におよぶ「空前の大量処分」を

発表し、ILO八七号条約批准後における彼らの基本的な対決の姿勢を露骨にしめしてきている。また日韓基本条約調印直後、六月二五日の閣議では、公務員労働者の「政治デモは規制」する方針を決めた。さらに、すでにこの物語の中に紹介したように前田日経連専務理事の「合理化の大作」はその前ぶれをみせ、倒産、合併による安上り「合理化」、労働者にたいする低賃金、無権利労働の攻撃がつづいている。

まさに、「日本中が争議団」になろうとしている。闘争が前進する条件は、潮のみちるようにとのつてきている。私たち「争議団共闘」の叫びも、けっしてひとりよがりで「特殊なたかい」のそれではなかったことが明らかとなってきた。

政治の面では、すでに「地すべりの変化」がおこってきている。参議院選挙では、首都において共産党の野坂参三氏が第一位、社会党の木村禰八郎氏が第三位で当選し、自民党の全滅という快挙を実現させた。つづく都議会選挙でも、戦後二〇年——第一党の席をしめてきた自民党を三分の一以下になるまで惨敗させ、社会党が初の四五議席を確保、第一党に躍進したのをはじめ、共産党も二議席から九議席に大進出した。まさに歴史的な大変動といわなければならない。

こうした敵と味方の力関係に重大変化が起り、たたかいがいっそう緊迫化し、前進している時期に、この『東京争議団物語』を出版することができたことは、卒直にいつて大変うれし

い。くり返すまでもなく、長期で困難な争議を、じっと歯をくいしばって支えている職場の無名の労働者のたたかいが、この物語を書きあげさせた原動力である。

彼らの苦しみと、そこから生み出した貴重な教訓は、一九六五年以降の労働者階級のたたかいに必ず寄与するものと、私たちは確信している。

全国の労働者・兄弟たち――。

労働者の生活と権利を守るために、階級的団結と統一をかちとるために、そして独立と平和と民主主義の国をきづく日まで、ともにたたかいぬこう。

越勢

一九六二年

八月

明

午

方

十四

日



検印省略

東京争議団物語

発行 編者 発行者 発行所	昭和40年8月25日初版 昭和41年7月15日第七版 東京地方争議団共闘会議 木 檜 哲 夫 労働旬報社 東京都港区芝西久保巴町32 電話(434) 3 6 8 1~5 振替東京 180374
装幀 印刷所 製本所	兎 本 雅 俊 第一印刷株式会社 東京・新宿・荻原製本

定価 350 円



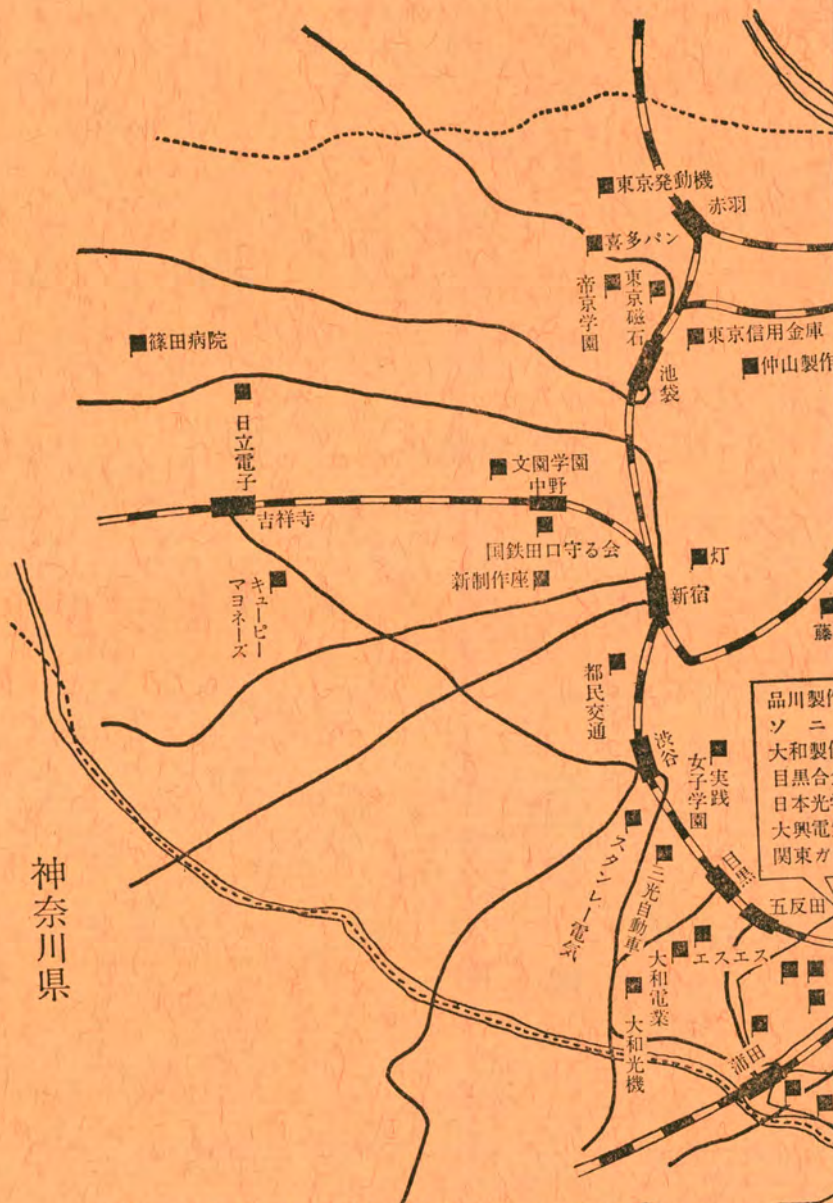
東京都



千葉県

東京湾

日本特殊鋼
ナショナル
金銭
東洋事務器
東電機
三井精機



神奈川県

東京地方主要争議団分布図

